友人の【魔法適正】が最強クラスだったので、僕は大人しく支援に回ろうと思います。

にっぱち

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トラックに轢かれたかと思ったら、いつの間にか異世界へと飛ばされてしまった浦沢陽向と明村灯火。

突然起こった超常的な現象に戸惑いながらも、彼らは地球へと帰る術を模索するためにこの世界についての知識を深めていく。

冒険者になってモンスターを討伐し、新たな魔道具を作り、２人は街を渡り歩く。

果たして２人は、無事に地球へと帰れるのだろうか……

※こちらは小説家になろう様でも同時に投稿させていただいております。

目　次

プロローグ ―― 1
第一章　僕じゃなくて親友が最強でした
第一章第１話【その時不思議なことが起こった】 ―― 6
第一章第２話【恐らく地球ではない何処かで】 ―― 10
第一章第３話【いつの時代の城塞都市】 ―― 15
第一章第４話【心優しき隣人】 ―― 19
第一章第５話【めぐりあい異世界】 ―― 24
第一章第６話【城塞都市タラハット】 ―― 29
第一章第７話【リゾマータ・ディアファニス】 ―― 34
第一章第７．５話【受付嬢の疑問】 ―― 38
第一章第８話【薄暮の迫る街】 ―― 42
第一章第９話【剣の師】 ―― 47
第一章第１０話【路傍の石】 ―― 51
第一章第１１話【僕は孤独じゃない】 ―― 57
第一章第１２話【魔法の謎】 ―― 61
第一章第１３話【マナと魔法】 ―― 65
第一章第１４話【原点にして起源】 ―― 70
第一章第１５話【ぼくらのアゾット】 ―― 74
第一章第１５．５話【ロイハの苦悩は空へと舞う】 ―― 80
第一章ＥＸ【とある修行の最中、陽向と灯火の会話編】 ―― 82
第二章　冒険者らしく旅に出ようと思います
第二章第０話【進む君と、止まった僕の】 ―― 86
第二章第１話【あれから半年】 ―― 89

第二章第２話　【緋色のマドンナ】　94
第二章第３話　【目的を忘れるなかれ】　99
第二章第４話　【明日の旅路】　103
第二章第５話　【目的をもって一歩を踏み出せ】　108
第二章第６話　【進む】　112
第二章第７話　【出逢いがあれば別れもある】　116
第二章第８話　【言葉よりも剣で語れ】　123
第二章第８．５話　【師の想い】　129
第二章第９話　【旅立ち】　134
第二章第１０話　【はじめのいっぽ】　139
第二章第１１話　【情けは人の為ならず】　143
第二章第１２話　【ＯＤ】　148
第二章第１３話　【僕は君じゃないし、お前は俺じゃない】　153
第二章第１４話　【ゼストスの光】　160
第二章第１５話　【税金奴隷】　167
第二章第１６話　【同郷とはとても】　173
第二章第１７話　【白黒つけてやるから】　178
第二章第１８話　【スキル】　184
第二章第１９話　【まるでゲームだな】　190

プロローグ

世界は未知で満ちている。
例えば神様なんて会ったことないからいるかどうかなんて分からないし、死後の世界なんて行ったことないからあるかどうかなんて分からない。

だから、所謂『異世界』なんてものも、実際に行ってみないとあるかどうかなんて分からない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「くあぁ～～……ねみぃ」
大きなあくびをかましながらだるそうに僕の隣を歩く明村灯火(あきむらとうか)。こいつは僕の小さいころからの親友で、今日もいつも通り、２人で学校に向かっている。
そんな僕、浦沢陽向(うらさわひなた)は眠そうにする灯火の顔を見てつい苦笑いを零してしまう。
「灯火、昨日何時に寝たの？」
「ん～……寝た記憶が無いな」
「灯火……」
灯火は短く切り揃えられた茶色の髪をポリポリと掻きながら昨日の記憶を思い返し、僕に対してとんでもない返答をしてきた。
「灯火、そんなんで来月の大会大丈夫なの？」

自堕落な生活を送っているように見えるが、これでも灯火は全国的にも有名な総合格闘技の選手で何度も賞を取っているほどの凄い人間だったりする。お母さんって訳じゃないけど、小さいころから見ている僕的には少し心配になってしまう。
「大丈夫だろ、多分」
「ねえ……」
「しゃーないだろ？　お前が貸してくれたゲームが面白すぎて辞め時見つけられなかったんだから」
「……今貸さなきゃ良かったって思ったよ」
夜更かしの原因が僕の貸したゲームと言われてしまえば、僕自身も責任を感じざるを得ない。面白いと言ってくれる分にはうれしい限りだけど、それで体調を崩すようなことになってしまったら目も当てられない。
いらない心配をしている僕を他所に、灯火は別の話題を僕に振ってきた。
「そういや陽向、お前最近模試の成績上がったってマジ？」
「え？　ああうん、２つだけだけどね」
僕たちはまだ１７歳。高校二年生ではあるけれど、僕は灯火と違って部活は何もやっていない。格闘技を頑張っている灯火の姿を見て『自分も何か頑張らなきゃ』と思って始めた勉強だったけど、今ではかなりいい成績を取れるようになってきている。
「お前、俺の順位が２つ上がるのと陽向の順位が２つ上がるのじゃえらい違いだろ。
今回で全国トップ１０入りだろ？」
「あはは……」
褒められることに未だに慣れていない僕は、灯火の尊敬の眼差しにどう答えていいのか分からずに照れ笑いをしてしまう。
「俺ももうちょっと勉強出来たらな」
「そう言う灯火だって、十分勉強できるじゃん。この間の中間テスト、どうだったの？」
「中間は、まあまあだったかな？　その前にちょっと大きめの大会が

あったからあんまり勉強できなかったんだよ」
「それで何点？」
「確か合計が４６７点だったかな？」
　うちの学校で行われる２学期の中間テストは、国数英と社会系の選択科目１つ、そして理科系の選択科目が１つの計５科目５００点満点だから、４６７点だったら高得点も高得点だ。
「文武両道って、まさに灯火のことだよね」
「才色兼備も追加していいんだぞ？」
　そう言って、シュッと整った顔を僕に向けてくる灯火。確かに灯火は男性の僕が見ても惚れてしまいそうなほどカッコイイ顔をしているが、それを自分で言うのは果たしてどうなんだろう。
「灯火、才色兼備って普通女性に使う言葉だよ」
「別に男に使って悪いことは無いだろ」
「そりゃあそうだけど……」
　変に反論したら、うまいこと言いくるめられてしまった。頭の回転が速いと言うか口がうまいと言うか……。
「とにかく、夜更かしはダメだよ？　それで学校の授業で居眠りなんてしたら内申に響いちゃうんだし」
「分かってるって、今回だけだよ」
　僕の注意を、いつものように流す灯火。こう言った灯火が今回だけで収まったことは今までで一度もない。
「もう……」
　それを分かっていても、僕はこれ以上灯火に強くは言えない。これが僕たちのいつものやり取りとなっていた。
　この後はまた他愛もない話をしながら学校へ行き、授業を受けて一日を過ごす。それが僕たちの日常。

　でも今日は、そんな日常とは少しだけ違った出来事が僕らの目の前で起こってしまった。

「……あ、おーい！　まだ信号赤だぞ！」
僕たちが学校までの途中にある道の中に、大きな坂がある。僕らが今いる地点は下り坂の始まりの方で、坂を昇ってきた車が僕たち歩行者側から見にくいというところから交通事故が多い場所で有名なところだった。
そんなところで、僕らの前を歩いていた少年が一人、歩行者用の道を飛び出て車道へと出て行ってしまった。
「君、危ないって！」
少年はゲームをしていたようで、前を見ていなかった。だからだろうか、歩道を外れたことに気づかずに歩いていってしまったっぽい。
僕は慌てて少年を追いかけ、道の途中で少年を捕まえることに成功した。
「駄目だよ、ゲームしながら歩いちゃ。ちゃんと前見て歩かないと」
少年を注意する僕。少年は僕の方を見ると、口の両端を吊り上げて笑った。人様の子どもに使っていい表現じゃないとは思うが、口は笑顔なのに目には一切の感情を感じられない、その顔がとても不気味だった。
「おい陽向！　早く逃げろ!!」
僕の背中から、灯火の焦ったような声が聞こえる。そっちを振り向こうとして僕の目線は坂上の方へと一度向けられた。
「……あ」
僕の目には、坂のてっぺんから下り始めるトラックが映った。坂を下り始めたトラックはスピードを緩めることが出来ず、僕たちの方へと突っ込んでくる。
「っ……灯火！」
僕は咄嗟に灯火の名前を叫んで、目の前の少年を灯火の居る方に向かって突き飛ばした。せめて少年だけでも、そんな思いが僕の身体を突き動かしてくれた。
しかしそれと同時に、灯火が僕たちの方へと向かって飛び出してくるのが見えた。
「「……え？」」

トラックのクラクションが鳴り響く中、２人の重なった素っ頓狂な声がやけに大きく聞こえた気がした。

少年と入れ違いになる形で僕のところへと来た灯火と一緒に、僕たちは眼前に迫る恐怖に対して目を閉じた。

第一章　僕じゃなくて親友が最強でした

第一章第1話　【その時不思議なことが起こった】

「……ん？」

目を開くと、そこは緑が溢れる草原の上だった。

僕たちは確か、学校に向かう途中の道を歩いていたはずで、危ない子どもを助けようとしてトラックに轢かれたはずだ。

……ということは、ここは天国？

死後の世界なんて当然僕は知らないから、これが天国だと誰かに言われたら認めるしかない。

でも……

「妙に、リアル……」

自分が今座っている草の感触や、照り付ける太陽の眩しさ、暑さ、そして草木の香り。肌を撫でる風の感覚が、死んだにしては妙にリアルなものだった。

「あれ、灯火？」

辺りを見回すと、僕の隣に灯火が寝ていることに気づく。恐る恐る灯火に触れてみると、僕の手は灯火の身体を透けることなくしっかりと触ることに成功した。

その時に感じた灯火の体温も、とても死んでいるとは思えなかった。

「灯火、灯火起きて」

隣で眠る灯火を揺すって無理矢理起こす。灯火は鬱陶しそうに瞼を強く閉じて抵抗するが、僕はその抵抗を受け入れずに更に強く灯火を揺する。

「灯火起きてって、大変なんだよ！」

ぱしぱしと灯火の頬を叩くと、漸く灯火は諦めたように目を開いた。

「灯火、僕のこと分かる？」

念のため、灯火に自分のことを覚えているかの確認を取る。灯火は

僕の顔を見ると諦めたようにため息を吐いた。
「陽向、お前死んでる？」
「……多分生きてる」
いつから起きていたのかは分からないが、どうやら灯火も僕と同じ結論に至ったらしい。

僕たちは恐らく死んでいない。そして僕たちのよく知る通学路から、何処かも分からない地に突然飛ばされた。という結論に。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「ねえ灯火、この状況どう思う？」
僕らが今いるのは、周りを木々に囲まれた草原。広さは学校のグラウンドくらいで、草原と木以外に見えるものは空と太陽くらい、そんな場所だ。
「俺の記憶が正しかったら、俺たちはトラックに轢かれた……はずだ。轢かれた感覚は一切ないけど」
「僕もそう。最後に覚えてるのは、僕と灯火２人ともがトラックに轢かれるところだ」
「ってなると、ここは普通に考えれば死後の世界ってのが妥当な考えだと思うんだが……」
灯火は自分の胸に手を当て、目を閉じる。
「……流石に死後の世界で心臓が動いてます、なんてのはあり得ないだろ」

「だよね……」
　僕と灯火の心臓は、間違いなく鼓動を打っている。それがこの世界が死後の世界であるということの、一番の否定になるだろう。
「じゃあここは何だ？　トラックに轢かれそうになって、次に目を開けたら知らない場所でしたーって、それはそれであり得ないだろ」
「それは同感する」
　僕たちの身に何が起こったのか、そもそもここが何処なのか。ただの木々に囲まれた原っぱの上にいる僕たちには判断材料が足りなさすぎる。

「……なあ陽向。取り敢えずこの草原、抜けてみないか？」
　暫く2人で考え込んでいると、不意に灯火がそんな提案をしてきた。
「抜けるって、目の前の木々を？」
「ああ。多分ここって森の中だと思うんだけど、いつまでもここにいたって俺たちの身の安全が保障されるわけでもないだろ？
　生きていると分かった以上、ここで原因ばっかり考えてても仕方ないと思うんだ」
　確かに、灯火の言うことには一理ある。ここが何処かも分からない以上、この草原が必ずしも安全だという保障はない。それに家も食料もないのにここで何かわかるまで過ごすのはほぼ不可能だろう。
「ここにいるよりも一旦動いてみる方がいい、ってこと？」
「それに森を抜けた先に、新しい発見だってあるかもしれない。
　ここが何処なのかとか、俺たちがなんでこんなところにいるのかとか」
　勿論、森の中に入ることの危険性は多分にある。僕たちは今制服にスニーカーと、とても森を歩くような服装じゃない。
　それに森の中にはどんな動物がいるかも分からない。うっかり熊

や毒蛇みたいな獰猛な生物に会って殺されました、何てことだってあり得る。
「でも、ここにいるよりはまし、か」
この草原に危険性がないという保障は何処にもない。なら灯火が言うように、何か手がかりを探しに一歩踏み出すことも大事かもしれない。
「行こう、灯火。灯火の言う通り、ここでうだうだしてても何も分からない」
僕たちは決意を固め、新たな一歩を踏み出すことにした。

第一章第2話　【恐らく地球ではない何処かで】

気が付いたら、そこは何もない草原の上でした。
登校時に持っていた鞄はいつの間にか無くなっていて、ポケットに入っていたスマホも消えていた。この身と服だけで訳の分からないところで僕たちは目を覚ましました。
そんなこと、あり得る？　実際にあり得るんだからしょうがないでしょ。
「はぁ……」
トラックに轢かれそうになったかと思ったらそんな超常的な現象に見舞われた僕たちは、灯火の提案でここが何処なのかを探る為に、森の中に入っていくことになった。
僕たちは今、目覚めた原っぱから太陽があった方向に向かって進んでいる。どこに行くかという話になったときに、
「取り敢えず戻る時の指標があった方が何かあったときにも帰りやすいかな」
という灯火の考えで、太陽を自分たちの道しるべにして歩くことにした。森の中に入ることでかなり太陽が見え辛くはなってしまったけど、それでも完全に木々で隠れるってことは無いし今のところは大丈夫そうだ。

問題は、そもそも迷うという前提自体が間違っている可能性があるってことだけど。
「生えてる木々は広葉樹なんだよね……だからまだここが日本の可能性も十分にある」
「その割には腑に落ちてなさそうな顔してんな」
周りの木々を見ながら呟く僕の顔を覗き込んで灯火が話す。口に出しておいてなんだけど、僕はここが日本だとは思っていない。
「さっきの草原、動物の足跡らしきものが無かったのに草がぼうぼうになってなかったじゃん？　あれって誰かが手入れしている証拠だ

と思うんだ。
それにこの道。ここも明らかに人の手が加わった道なんだけど、整備の仕方が現代のものより甘い気がすると思わない？　灯火よくキャンプ行くって言ってたし、そことの違いとか感じない？」
足元の道を見ながら灯火が唸る。僕たちが今歩いている道は、ただ土を踏み固めただけの簡素な道だ。日本によくあるような、木で囲ったり石で脇を固めて道を分かりやすくしたりといった配慮が一切ない。
勿論日本の森にもこんな風に踏み固めただけの道なんて探せばいくらでもあるだろうけど、それにしては綺麗に固められている。それこそＲＰＧゲームの中に出てくる森の中の道みたいだ。
「自然そのままって感じがしない、かと言って現代日本の舗装にしちゃ簡素過ぎる。この森の持ち主がそれを望んでやってるならまだしも、これはちょっと違和感があるな」
「だよね」
予想通りの返答が灯火から帰ってくる。スマホが無いから連絡手段がなく、財布が無いからお金を両替して公衆電話みたいなものを使うことも出来ない。
だから僕たちに残された手段は、現地の人に事情を説明して親なり警察なり誰かしらに連絡を取ることだ。
「太陽の位置的にまだ午前中だと思うけど、早いとこ森を抜けちまおう。日が暮れ始めたら完全にアウトだ」
どの国の森かも分からない場所で夜に火もなしで野宿なんて、餌として食べてくださいって言ってるようなものだ。灯火の言う通り、早く森を抜けて人を探した方がいい。
「そうだね、急ごう」

それから僕たちは、自分たちの体力に気を配りながらできるだけ早く森の中を歩き続けた。

途中、野兎や野鳥みたいな無害そうな生物には出会ったけど、幸いなことに獰猛な生物には出会っていない。
ただ……
「ねえ灯火、僕の見間違いじゃなければさっきの兎、角みたいなの生えてなかった？」
「……生えてたな。額にドリルみたいな角が。」
僕たちの目の前に現れた兎は、僕たちを見るなり驚いて草むらの方へと逃げていった。それは良いんだけど、その見た目が少なくとも僕が見たことのあるような兎とは少し違っていた。
額の部分からドリルのような形状をした小さな角が生えている、ゲームの中でしか見たことが無いような変異種のような兎だった。
「……地球上にあんな兎いるんだな、知らなかったわ」
「……ま、まあ、地球上には未発見種が何百万種もいるらしいから」
とは言ってみたものの、僕も灯火も薄々感じていることがあった。

もしかしたらここは、地球ではないんじゃないか？

「……いやいや、まさか」
「そんな漫画みたいな展開あるわけないよな」
互いの頭に浮かんだ考えを自分自身で否定する。だって地球じゃないなら、ここは一体どこだって言うんだ。
太陽があって木々があるってことは、地球とかなりよく似た気候状況の土地ってことになる。そんな星は、太陽系には存在しない。
「あ、あはははは……」
灯火の顔は、今までに見たことが無いほどに引きつっていた。
恐らく僕の顔もこんな感じになっているんだろうな。
「いや、変な考えは止そう。誰かしらに会ってその人から話を聞ければ、ここが何処かってのもはっきりするんだから」

「そうだよね」
嫌な予想を頭の中から振り払って先に進もうとした直後、

目の前に、巨大な熊が降ってきた

「……はい？」
轟音と共に背中から地面に着地した大熊は、そのまま起き上がることなく地面にだらりと四肢を投げ出している。傍目から見たら死んでいるようにも見えるその恰好に、僕たちの思考はショートしかけていた。
「熊って、降ってくるもんだっけ？」
「んなわけないだろ」
「だよね……」
灯火と現実逃避気味にそんな話をしていると、突然僕らの周りに影が差した。太陽が雲にでも隠れたのかと思って空を見上げてみると、そこには
「……嘘でしょ」
目の前の熊とは比較にならないほど巨大な飛行体が、僕らの頭上を飛んでいた。
太陽の影になっているせいでシルエットしか見えなかったが、刺々しいフォルムや不規則に動く尻尾が頭上の飛行体が飛行機や戦闘機の類ではなく生き物であることを証明していた。
「灯火。多分だけどさ、あれってドラゴンだよね？」
僕と同じように空を見上げている灯火は、こめかみのあたりに手を添えて頭を大きく横に振った。
「勘弁してくれよ陽向、ドラゴンなんている訳ないだろ？
……あ、分かった。これきっと夢だわ。じゃないとこんなの説明がつかない」
完全に現実逃避をし始めた灯火の頬をつねる。しっかりと痛みを

感じたのか、灯火は「いてぇなぁ……」と遠い目になってしまった。
さすがにここまで来たら認めるしかないだろう。
「地球、じゃないんだ。ここ」

第一章第3話　【いつの時代の城塞都市】

頭上を飛ぶドラゴンは、地上の僕たちに目もくれずにどこかへと飛び去ってしまった。

そして降ってきた熊は、僕らが触ってもピクリとも動かなかったのでそのまま放置していくことにした。あんなもの、手ぶらの僕らにはどうしてみようもない。

先へと進みながら、僕たちは一度自分たちの状況やこの世界について整理することになった。

「僕の意見では、多分ここは地球じゃない。そして太陽系に存在する惑星でもないと思う。

まだ観測されていないような、地球によく似た星って言うのが僕の考えなんだけど……灯火はどう思う？」

「概ね同意。ただもしかしたらパラレルワールドって線もある」

「パラレルワールド……もしそうだとしても順当に時代が進んだ２０２１年の世界とは言えなくない？」

ドラゴンや地球じゃ有り得ないサイズの熊、角の生えた兎なんかは過去にそういう生態系の変化があった世界と言われればまだ分からないこともない。

でもそうだとして、科学の進歩が殆ど成されていなさそうなのはどうなんだろう？　少なくともビルのような建物は見当たらないし、あれだけ大きなドラゴンが空を飛び回っているのにそれに対して戦闘機が出てこないって言うのも引っかかる。

「……すまん、まだ地球っていう選択肢を放棄したくなかっただけだ」

「いや、いいよ灯火。僕だってここが地球だったら嬉しいって気持ちはまだ残ってるから」

あからさまに落胆する灯火の肩を叩く。そりゃあここが地球だったらいいな、っていう気持ちは僕にだってあるさ。でも希望を持つのと現実を見るのはまた別の話だ。

「じゃあ灯火も、僕の考えに賛成？」

「ああ。俺たちはトラックに轢かれそうになった拍子に何か不思議な

事が起こって、地球によく似た全く別の惑星に飛ばされた。そんな感じだと思う」
「改めて言葉にしてみると本当に現実味が無いね……」
「本にしたらウケるかもな」
「生きて帰れたらね」
　多少の冗談を交わしてはいるが、そうでもしないと受け止めきれない情報量で頭がパンクしてしまいそうになる。
「生きて帰れたら……か。そもそもそんな方法あるんだろうかね。俺たちってここに来た経緯とか、方法さえ一切知らないわけだし」
　灯火の疑問に、僕は目を伏せてしまう。来る方法があるんだから帰る方法だってあるのかもしれないが、それを探す術が現状の僕らには一切用意されていない。
「……まずはこの世界について知る必要があるのかもしれない。ここが地球じゃないとしても、この世界の人に会って話をして、この世界についての情報を集めることが第一だと思う」
「話って……ここ地球じゃないんだろ？　コミュニケーション取れんの？」
「あ……」
　完全に失念していた。日本どころか地球ですらないなら、コミュニケーションなんて不可能だろう。そうなれば情報集めなんてできっこないし、結局この世界について知ることもできない。
「まあ、まずはこの森抜けちまおうぜ。あんな大熊やドラゴンがいるような場所に安全なんて期待するだけ無駄だろうし、開けた場所に出れば今後の方針も見えてくるだろ」
　僕の頭に手を置くと、ぐしゃぐしゃと乱雑に撫でまわす灯火。僕が落ち込んでいる時は、決まってこうして雑なスキンシップを取ってくる。今回は「一人で悩むな」って言ってくれているみたいで、何だか慰められた気持ちになった。
「うん、ありがとうね灯火」
　灯火のお陰で多少は気持ちも晴れた。僕らに後退するっていう選択肢はないんだし、とにかく進んでみるしかない。この先に何がある

のかなんて想像も出来ないけど、何もせずに朽ちていくよりはマシなはずだ。

そう思って歩き続けて、結構な時間が経った。
太陽は既に傾きかけている。正確な時間は分からないが、きっと午後になってからまあまあな時間が経ったんだろう。そんなころに、僕たちは漸く森を抜けることに成功した。
そして、僕らの身長の数十倍はありそうな高さの壁に囲まれた街を発見した。
「城塞都市、かな？」
森の中からもチラチラと見えてはいたが、こうして全貌を見るとその大きさが分かる。恐らく円形に作られた壁が、僕らの前に鎮座している。僕らを出迎えるかのように森に面する形で構えられた門には、街に入る為の許可を得るためのものであろう行列ができている。
「並んでみるか？」
「言葉はどうするのさ」
「ボディランゲージで何とかならないかな」
「えー……。無理だと思うけどな」
「でもこのまま外で生活するのは流石に無理だろ。ほら行こうぜ」
「ああちょっと灯火！」
灯火に引っ張られる形で僕たちは列に並ぶ。同じく列に並んでいるこの世界の住人と思しき人たちは、僕らを見ると納得したように頷いてまた視線を前へと戻した。
「……？」
僕たち以外の人たちは、皆動きやすさを重視したようなチュニックのような服にズボンといった格好で、色や装飾に違いはあれどTシャツやスーツ、僕たちみたいに制服を着ている人は誰一人としていなかった。

まるで中世のヨーロッパで着られていた『ゴネル』や『ブラカエ』に似ている衣服を着用している。そう思った時に、ふと目の前の城壁に目が移った。
「中世以降の城壁ってこれくらい高いものが用いられることが多いんだっけ……？」
「ん？　ああそういえばそんなこと世界史の中西先生が言ってたっけ。
もしかして陽向、まだここが地球である可能性を捨てきれてないのか？」
僕の独り言に反応した灯火が、同じように目の前の城壁を見ながら答える。
「いやそういう訳じゃなくて、ここまで来ると本当にファンタジーの中みたいだなって」
「中世に用いられたみたいな城壁……ああ、言われてみればこの人たちが着てる服ってゴネルか」
「見た目が似てるだけだと思うけど……」
「でも陽向の言う通り、本当にファンタジーの世界みたいだな。中世ヨーロッパみたいな世界観で、空にはドラゴン。熊や兎の見た目はしてるけど、明らかに違った部位が存在している生物か。
ここまで来たら、いっそ魔法とかあるかもな」
「魔法って……まさかそんなこと」
「ありますよ」
僕と灯火の話に割り込む形で、僕たちの前に並んでいる男性が日本語で話しかけてくる。
「魔法、ありますよ。流れ人のお二方」

第一章第４話　【心優しき隣人】

「え、今、日本語？」
　急にやってきた、僕と灯火以外の声。しかもそれが日本語となれば、そりゃあ戸惑いもする。
　コミュ障が緊張しまくったときみたいな言語能力になってしまったけど、何とか言いたいことは伝えることが出来た。
「にほんご……ああ、貴方がたの扱う言語のことですかね。
　残念ながら私たちが話しているのはその『にほんご』というものではないですよ」
　僕らよりも２０歳は上であろう男性が丁寧な口調で答える。男性は他の人と同じようにゴネルに似た服を着ているが、髪や髭が清潔に整えられている。それに言葉遣いが物凄く丁寧で物腰が柔らかい。
「えっと……じゃあなんで僕と貴方は会話を？」
　男性の言うように言語が違うと言うなら、何故僕は目の前の男性とコミュニケーションが取れているというのだろうか。
　まさかこの世界では『日本語』が別の言語として使われているとか？　そんな都合のいいことあるんだろうか？
「ああ、確か『すきる』……だったかな？　それのお陰で会話ができるとかいうことを、別の流れ人が言ってましたね」
「……スキル？」
「なんだそれ？」
　灯火と顔を見合わせてはてなマークを浮かべていると、男性は申し訳なさそうに頭を下げる。
「あ、ああ申し訳ありません。他の流れ人の方は皆一様にスキルがどうこう～みたいなお話をされていたので、てっきり流れ人の方々には共通の認識なのだとばかり」
「ああいえそんな、知らないこちらが悪いんですから謝らないでください」
　丁寧すぎる、というかそれを超えてもはや気持ち悪さすら感じる男性の態度に気持ち引きながらも僕らは会話を続ける。

「あの、幾つかお聞きしたいことがあるんですけど聞いても宜しいですか？」
「ええ、私に答えられることなら」
笑顔で答える男性。当初は無理だと思われていたこの世界の人とのコミュニケーションを取れたおかげで、情報収集が大幅に楽になってくれた。これは嬉しすぎる誤算だ。
「ありがとうございます。
早速なんですが、ここは何という名前の星ですか？」
「星……この世界のことですかね？　それでしたら、ここは『ピラマ』という名前です」
「ピラマ……」
やっぱり聞いたことの無い名前の星だ。灯火の方を見てみるが、灯火も聞き覚えが無いようで黙って首を横に振った。
「じゃあ、あの城塞都市の名前は？」
「あれは『タラハット』という街です。この辺りでは大きめの街で、結構ご飯が美味しいと有名なところなんですよ」
「タラハット……」
こちらも同じように聞き覚えが無い。そうであるなら本格的に、この世界についての情報を一から集める必要があるのか。

「ありがとうございます。次なんですけど、さっきから僕たちのことをずっと『流れ人』って仰ってましたけど、流れ人って何ですか？」
場所については大方分かった……と言うより聞いてもあまり意味が無いことが分かったので、僕は次にこの男性との会話の中で出てきた『流れ人』という言葉について聞くことにした。もしこの言葉の意味が僕の考えと一致するなら、もしかすると地球に帰る方法は思ったよりも早く見つけられるかもしれない。
「ああ、流れ人とは貴方がたのように別のところから来る人のことを纏めてそう呼んでいるんです」
もっと核心に近づくような答えが欲しかった僕は、更に質問を重ね

る。
「その別のところって、何処かって聞いてたりしますか？」
「ええと、聞いたことがある気はするんですけど……なんて言ってたかな……」
　この時点で、僕の中ではほぼ確信めいたものがあった。頭の中に浮かんでいるその言葉を、男性に向かって発してみる。
「もしかしてですけど、それって『地球』じゃないですか？」
　僕がそういうと、男性は喉につかえた小骨が取れたかのようなスッキリとした顔で答える。
「ああそうだそれだ！　私が会った流れ人の方は皆そのちきゅう、から来たと仰っていましたね」
　やっぱり。この人は僕らを見てすぐに僕らが『流れ人』だと分かっていた。ってことはこの人が見てきた流れ人と僕らの見た目で一致する特徴があるはずだ。
　顔つきとか細かい違いはあるのかもしれないが、多分一番見て分かりやすい違いは『服装』だろう。この世界の人々の服装と僕らの服装は明らかに違い過ぎる。恐らく他の流れ人もこういった洋服を着ていることが多いはずだから、この人も僕たちが流れ人だと分かったのかもしれない。
「ってことは、他の流れ人に話を聞けば何か帰る為の手がかりが掴めるかもしれないな」
　灯火の顔が自然と綻ぶ。何も分からないところに突然飛ばされて、自分たちで色々と模索しながら不安だらけの道を進んできたところで初めての明確な進展。この世界の人とコミュニケーションが取れたことが大きすぎる。
　かと思ったら、急に何かに気づいたかのように表情を曇らせた。
「あ、でもそっか……」
「どうしたの？　灯火」
「いや、その流れ人を探せば手がかりを見つけられるかもしれないと思ったんだけど、そもそも探そうとしたら聞き込みをしたり移動をしたりしなきゃいけないだろ。

今の俺たちにはこの世界の通貨を持っていないから、移動は自然と徒歩になる。あんなドラゴンとか巨大熊とかがいる世界で戦う術も無しに徒歩で旅って、無謀通り越して不可能だな、って思って」
「……うん。問題はそこなんだよね」
それには僕も気づいてはいた。探すにしても僕らにはそれをするだけの『力』が無い。財力や戦力、それに旅をするなら野営するための能力だって必要になってくる。それら全てが欠けている僕らには、帰る方法を探しているような余裕が無い。
知識の面だけで言えば進展したかもしれないけど、現状は何も進展してはいないんだ。
「え？　お二人とも冒険者登録をするためにこの街に来たのではないんですか？」
「冒険者登録？」
落胆する僕らを見て、またも男性が聞き覚えの無い言葉を口にする。さっきからこんなのばっかりだ。
「流れ人の方は大半が冒険者の登録をしていると聞きましたが……お二人ともその為にここに来たのでは？」
どうも僕たちみたいに地球からここへとやってきた人たちはみんな『冒険者登録』というものをやっているらしい。ドラゴンに冒険者って、いよいよファンタジーじみてきたな。
「……申し訳ありません。僕たちこの世界に来てから殆ど時間が経っていない上に、この世界でコミュニケーションを取れたのは貴方が初めてなんです。なのでこの世界の仕組みについても何一つ分かっていなくて……」
僕がそう言うと、男性は合点がいったようで納得したような顔になった。
「なるほど、そういうことでしたか。いやはやそれは気が利かずに申し訳ありません。
何分今まで私が出会った流れ人と言えば、みんながみんな全てを分かっているように色々なことをこなしていたので、流れ人とはそういうものなのだとばかり」

「全てを、ですか……」
もしかして、この世界に来る人間として僕たちはかなり異端な部類なのではないだろうか。他の流れ人がみんなこの世界についての事前知識を持って来ているんだとしたら、僕らは一体なんでこんなことになっているんだ？

第一章第5話　【めぐりあい異世界】

男性が言うには、この世界における冒険者という職業は割と一般的なもので、その基本的な仕事内容としては『ギルドから発注される様々な依頼を受注し、達成することで報酬を得る』ことらしい。冒険者というよりも万事屋の方が意味的には合ってそうな気がするが、そこは気にしたら負けなのかもしれない。

「多分その恰好でしたら門番の方もすぐにお二人が流れ人だと気づいてくれるでしょう。冒険者ギルドへの紹介状を書いてくれるはずですので、それを持ってギルドの方へ行けば色々と手続きを進めてくれると思いますよ」

男性は懇切丁寧にギルドについて教えてくれた上に、門からの簡単な道まで教えてくれた。本当に優しい人に巡り合えてよかった。

「何から何まで本当にありがとうございます。なんとお礼を言ったらいいか……」

「いえいえ、私はただ恩を売っておきたかっただけですので」

「恩、ですか？」

正直、僕らに恩を売っても何の得もないような気がするが。男性は僕らに一体どんな価値を見出したというのだろうか。

「ええ。元来から流れ人は、我々には無いような特殊な能力を持つと聞きます。彼ら自身はそれをすきる、とか呼んでいるようですが」

「スキル、ですか。そういえばさっきも言ってましたけど、そのスキルって具体的にどんなものなんですか？」

ものはついでとばかりに疑問をぶつけてみる。男性は少し困った顔をして右手で頬をポリポリと掻きながら、申し訳なさそうに答える。

「さあ……。何分私も間近で見たことは一度もありませんもので。ただ人づてに聞いた話では、流れ人は天変地異を起こせるほどの力を持っているとか」

「天変地異？」

人一人が天変地異を起こせるなんてあり得るのだろうか。そんな

の人じゃなくて、神様か何かの間違いだろう。
「私も人づてに聞いたものですので、本当かどうかは分かりませんがそれほどの強さを持っているという話はよく聞きますよ」
どうもこの世界にやってきた地球人というのは、とんでもなく強い人ばかりらしい。とても現代社会に暮らしている人間とは思えないんだけど、この世界に来ると何か身体能力が変異したりするんだろうか……？
「あの、色々と教えて頂き本当にありがとうございます。僕は浦沢陽向と言います。今後お会いしたときには必ずこのご恩は返させて頂きますので」
「俺は明村灯火って言います。右も左も分からない俺たちに丁寧に色々と教えて頂き、本当にありがとうございました」
僕と灯火が揃って男性に向かって深々と頭を下げる。この人のお陰でこの世界の仕組みや流れ人についての情報を得ることができ、今後の方針も立てやすくなった。感謝してもしきれない。
「いえいえ、先ほども言いましたが、私はただお二人に恩を売っておきたかっただけですので。
あ、ちなみに私はオズウエルと言うもので、キース商会で働いています。何か縁がございましたら、ぜひうちの商会を宜しくお願いします」
キース商会のオズウェルさんか、何か買うことがあったらその時はこの商会を使わせて貰うことにしよう。

「それでは、そろそろ私の番ですので」
気づけば、列は随分と進んでいてもうすぐ僕らの番、というところまで来ていた。
オズウェルさんは僕たちに手を振りながら、検閲官と思しき鎧姿の人のところへと向かっていく。僕らはその背中に向かって、ずっと頭を下げ続けた。

「……あ、言い忘れてた。
一番最初に仰ってた『魔法』についてですが、冒険者ギルドに行けば詳しく教えてくれると思いますので是非聞いてみてください」
オズウェルさんが門の前に辿り着く直前、こちらを振り向いて僕らの一番最初の疑問にも答えてくれた。
「はい、ありがとうございます！」
再び心からのお礼を言う。それを受け取ってくれたオズウェルさんはこちらに向かって軽く手を振ると、今度こそ検閲官の元へと向かって行った。
「優しい人で良かったな」
オズウェルさんが検閲を受けている間、灯火が微笑みながらぽつりと言った。
「本当に助かったよ。正直ああやってコミュニケーションが取れただけでも大分収穫なのに、あんなに丁寧に教えてくれるなんて」
ここまでの道中、内心不安や焦りでいっぱいだったことや、この世界に来てから初めて話す人だったことも相まってオズウェルさんが菩薩のようにも見えてくる。オズウェルさんの存在はそれほどまでにありがたく、そして偉大だった。
「オズウェルさんの言う通り、まずは検閲を受けてから冒険者ギルドに行ってそこで話を聞くことにしよう。
あの話の感じだと、多分流れ人の対応には慣れていそうだしもっと詳しい話が聞けるかもしれない」
「だな。そこから今後の方針を立てていく形にするか。
にしても冒険かー、なんか陽向が先月くらいに貸してくれたゲームみたいでワクワクするな」
キラキラと瞳を輝かせる灯火。きっと魔法やら剣やらを巧みに使って敵を圧倒する自分の姿を思い浮かべているんだろう。
「灯火、忘れてるかもしれないけどこれゲームじゃないんだよ。死んだらリセットできないんだよ」
危うくトリップしてしまいそうな親友を現実へと引き戻す一言。灯火は僕の言葉につまらなそうに頷いた。

「分かってるよんなことは。ここまで不安だらけだったんだ、少しくらいいい妄想するくらい許されるだろ？」
「お願いだから妄想の中だけにしてね。現実でカッコよさなんて求めなくていいからね」
「大丈夫だって」
　重みの無さすぎる大丈夫に頭が痛くなるけど、こういう明るさも灯火の良さではあるから叱りにくいところではある。
「お、次俺らっぽいぞ」
　灯火と雑談をしていたら、いつの間にかオズウェルさんの検閲は終わったらしい。僕らを待つように、検閲官がこちらを見ていた。
「行こうか。一応事情も話さないと」
「オズウェルさんの話だと、多分ここも話をするのは大丈夫だと思うけど果たして……？」
　確かに、僕らがそのスキルとかいうものを持っているという確たる証拠は無いから、灯火の言う通り偶々オズウェルさんとだけ話せたっていう可能性も無くは無い。
　まあ、もしそうなったら今度こそボディランゲージでもなんでも使って何とかコミュニケーションを取る他無いだろう。

「次……ってなるほど、お前らがオズウェルさんの言っていた流れ人か」
　僕らの心配はどうやら杞憂に終わったようで、検閲官の言葉も普通に日本語として聞き取れた。
「オズウェルさんが何か言ってたんですか？」
「別に大したことじゃない。今冒険者ギルドへの紹介状を書いているところだから、その間に所持品の検査をさせて貰う」
　オズウェルさんが検閲官の人に何を言ったのかは気になるところだけど、この感じだと別に悪口ってことは無さそうだ。

僕たちは検閲官に言われるがまま、ポケットの中身を検閲官へと見せる。
「……何も持っていないのか？」
僕らが手ぶらなことに疑問を抱く検閲官。正直スマホの一つでも持っていたらまた説明もややこしくなっていただろうし、手ぶらな方が楽だろう。
「済まないが念のためボディチェックをさせてもらえるか？　流石に手ぶらというのは少し怪しい」
どうやら何も持っていないことが裏目に出たらしい。大人しく僕も灯火も検閲官のボディチェックを受ける。
「……本当に何もないのか」
体の隅々まで触って調べられた結果、漸く僕たちへの疑いが晴れた。多分服のつくりがこの世界のものと比べて複雑だから、ああして触って調べたんだろう。
「この世界に来た時から、何も持ってなかったんです」
「そうか、それは災難だったな。……ああ、ありがとう。
これが冒険者ギルドへの紹介状だ。これを持って目の前の大通りを真っすぐ行くと、突き当りに剣と盾が描かれた看板がある。そこが冒険者ギルドだ。
この紹介状は、君達の手では開けないように。開けると本物であるという証拠が無くなるから気を付けて」
検閲官の人、そして奥にいた門番と思しき人物に軽く会釈をして、僕たちはこの世界で初めての街――『城塞都市タラハット』へと足を踏み入れる。

第一章第6話　【城塞都市タラハット】

タラハットの街の中は、昔旅行で行ったチェコやイタリアの街並みによく似ていた。

石造りの街道の脇に建てられたレンガ造りの建物、壁の色は白や薄茶のものが多く、屋根はオレンジ色のものが殆ど。またその下には露店だろうか、テントを張って果物や野菜のようなものを売っている人達が見受けられる。

道幅は人の往来に不自由しない程度には広く作られているが、それでもかなり往来が多いようでそんな道幅も狭く感じてしまう。

人々の服装は、やはりチュニックのような服を身に着けている。この世界ではこの服が一般的な服装らしく、制服姿の僕らの格好はかなり浮いているように感じられた。

「まさに中世ヨーロッパ、って感じだね」

「でかい川が近くにあったら情緒的には完璧だな」

都会に初めて上がってきた田舎者のようにきょろきょろと周りを見渡す。日本では絶対に見られない街並みに、僕の心も自然と踊ってしまう。

「……って、観光してる場合じゃなかった。冒険者ギルドに行かなきゃ」

危うく観光気分になりかけていた頭を無理矢理切り替える。僕らはここに遊びに来たわけじゃないんだから、油なんて売ってる暇はない。

「検閲官の人の話だと、ここを真っすぐ行った先だよね」

「そう言ってたな。ただ、結構道が入り組んでるから、迷子になりそうで怖ぇ」

目の前の道は真っすぐ一直線ではなく、多少斜めに曲がっている。取り敢えずはこの大通りに沿って進めば問題はなさそうだけど、灯火の言う通り迷子になりそうなのがちょっと怖い。

「行ってみようか」

検閲官の人がわざわざ嘘を言う理由もないだろうし、その言葉を信

じて僕たちは大通りを歩く。

暫く歩いていると、目の前に他の建物とは一回りほど大きさの違う平屋の建物が見えてきた。

「あれかな？」

よく見ると、正面の看板と思しきものには盾に剣が交差して描かれた絵が見える。あれが検閲官の人が言っていた目印の看板なのだろう。

その絵の上には、何やら模様のようなものが描かれている。

「あれなんだろうけど、上に描かれてるのなんだろ？」

「……順当に考えれば文字、か？　でも見たことないから分からん。この世界独自の文字なのかもしれないけど」

「あー独自の文字、ありそう」

楔形文字と言われれば何となくそんな雰囲気も無くは無いかもしれないが、あれが文字なのかどうかも正直分からない。

「まあ入ってみりゃ分かるだろ。今までの感じだと文字は読めなくても話は出来るみたいだし」

「この世界の言葉なんて触れたことも全くないのに、現地の人達とコミュニケーション取れるって言うのも物凄く変な話なんだけどね」

僕たちは冒険者登録という目的を果たすために、冒険者ギルドの門戸を叩いた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

冒険者ギルドの中は、結構な人で賑わっていた。
筋骨隆々なものもいれば、そんな体躯で戦えるのだろうかと疑問を抱きたくなるようなひょろりとしたもの、また体躯をすっぽりと覆い隠すようなローブに身を包んだものと様々な人がいる。
しかし共通しているのが、皆が皆各々の獲物を携えているということ。あるものは自分の身長よりも長い大剣、あるものは腰に携えた片手直剣、またあるものは木でできたと思しき杖。先ほどまでの街並みから感じられた観光感とは打って変わり、ここはまさに『異世界』を感じさせる場所だった。
「地球じゃ絶対見られない光景だね」
「あ、ああ。ある程度想像はしていたけど、実際に見ると圧倒されるな、この光景」
全員が全員、人間の命を簡単に刈り取れる武器を持っている空間。日本で生きていた僕たちからしたら恐怖でしかない。
それでも、暫くはここで生きていくしかないんだから早くこの空間にも慣れなきゃいけない。
「お前ら、流れ人か？」
出入口のところで突っ立っていた僕たちに、背中に剣を携えた男性が横から声を掛けてくる。男性の顔には右目の辺りから顎にかけて大きな切り傷があり、いきなり声を掛けられたこととその傷に驚いてしまった僕は一瞬男性から後ずさってしまう。
「え!? あ、あの、え、あ、はい、そうです……」
驚く僕とは対照的に、灯火は平然とした顔で受け答えをする。
「すいません。俺たち今日この世界に来たばっかりで右も左も分からない状態なもので」
「……そうか。流れ人なら門を通る時に紹介状を貰っているだろう。受け付けはあそこだ、一番右の緑の頭巾を被った受付嬢にその紙を持っていけ」
男性が指をさした先――――ちょうど入口を入って左側の奥に市役所のような木造のカウンターが設置されている。
カウンターには、頭巾を被りワンピースのような服を着た４人の女

性が横に並んで座っている。色によって対応するものが違うのだろうか、それぞれが色の違う衣服を身に着けていて、別の冒険者の方たちの対応をしている最中だった。
「ありがとうございます」
「あ、ありがとございます……」
灯火と僕がそれぞれ男性冒険者にお礼を言って、教えてもらった受付嬢の列に並ぶ。
「陽向お前、なんでそんなにビビってんだ？」
ケロッとした顔で灯火が言う。こいつ、さっきまで圧倒されるとか言ってたはずなのになんでこんなに平然としていられるんだ。
「そりゃあビビりもするでしょ。あんなごっつい大剣担いだ男の人にいきなり話しかけられたら」
「そうか？　寧ろガチ感が出てワクワクしね？」
「灯火さっきからそればっかり……。ほんと頼むよ？　僕がさっき言ったこと、覚えてる？」
「分かってるよ。これは現実なんだからそんな夢見心地でいるなよ、って言いたいんだろ」
「……分かってるならいいけど」
さっきから妙にソワソワしている灯火が心配になる。やっぱり格闘技をやっているからこういった戦闘シーンが多くなるシチュエーションが来ると血が滾るんだろうか。僕には分からない感覚だけど。
「ほれ、俺らの番だぞ」
灯火が顎で前に視線を送るようにサインする。見ると受付嬢が手を挙げて「次の方、こちらへどうぞー！」と元気よく僕たちを呼んでいた。
「……はあ」
僕の心配なんてどこ吹く風、と目を輝かせる灯火を見て溜息が口から零れ出る。こうなってしまったらもう何を言っても無駄だろう。せめて最悪の事態が起こらないように僕がカバーしていく他ない。
僕たちはさっき検閲官から貰った紹介状を取り出し、受付嬢の元へと持って行った。

「あの、僕たち流れ人です。冒険者登録をしたいんですが」
「はい、冒険者登録ですね。それではまずは紹介状をお預かりいたします」
紹介状には、この建物に書かれていた文字のようなものと似たものがびっしりと書かれていた。やっぱりこれが、この世界の言語であり文字なのだろう。
受付嬢は紹介状を受け取ると、それぞれに目を通し始める。

「……はい、ありがとうございます。
確認ですが、お二人はどちらからここに？」
「……門の向こうにある森です。そこにある原っぱから」
「え、森の原っぱ、ですか……？」
僕が答えると、女性は怪訝な顔をした。
来た場所を答えただけでこんな反応をされると、何かまずいことを言ったのではないかと不安になってくる。
「……あの、何か問題がありましたか？」
「ああいえ、もしかしたら私の記憶違いかもしれませんし大丈夫です。
ではこれから、冒険者登録の為の手続きに移らせて頂きますね」
不安感に耐え切れず僕が聞くと、女性は即座に否定し先ほどと同じ笑顔に戻った。

第一章第7話　【リゾマータ・ディアファニス】

受付の女性の表情が曇った理由は結局分からず、僕らはそのまま冒険者へと登録する手続きへと移ることになった。
「お二人はこの世界の文字は書けますか？」
「いえ、書けません」
「分かりました。ではこちらで代筆させて頂きますので、お名前と年齢を教えて頂けますか？」
「僕は浦沢陽向、１７歳です。でこっちが――――」
僕が言った内容をサラサラと紙に書き込む女性。その紙を覗き込んでみるが、やっぱり読めない。話している言葉は日本語なのに記入している文字は別物なのってすっごい違和感があるな。
文字の読み書きができないってかなり不便だし、あとでこの世界の言葉も覚えないと。
「……はい、ありがとうございます。こちらで必要事項の記入は終わりましたので、最後に魔法適正を測らせて頂きます」
「魔法適正……って、何ですか？」
「……あ、ああ失礼しました。
魔法適正とは、文字通り魔法の適正値のことです。この世界の魔法は主に『地・水・火・風』の四つに分類されていて、その属性に対する適正がどのくらいあるのか、というのをこちらの魔道具を使って計測させていただきます。
何らかの属性に対する適正が確認できた場合は、ギルドで開催している『流れ人向けの魔法講義』を受講することをお勧めします」
女性が説明しながら僕らの前に大きな水晶玉のようなものを置く。見た目は普通の水晶玉だけど、これで計測ができるんだろうか。
それに魔道具とは一体何だろう。また新しい言葉が出てきてそろそろ頭が痛くなってきた。
「まずは陽向さんからお願いします。こちらの水晶に手を触れて頂きますと、適性を測ることができますので」
女性に言われるまま、僕は水晶に手を触れる。

「……適正無し。はい、ありがとうございます」
水晶には特に何か変化が起こるといったことは無かった。女性は淡々と紙に何かを書き込み、僕に手を離すように促す。
というか今、適性無しって言わなかったか？　ってことは僕は魔法が使えないってこと？
……いや、冷静に考えればそれが普通なのか。日本にいて魔法なんて使ってる人見たことないし。
「それでは次に、灯火さんお願いします」
僕と交代する形で、灯火が水晶に手を触れる。すると水晶は黄、青、赤、緑の四色に強く輝きを放った。
「四属性すべてに強い適正有り……と。はい、ありがとうございます」
灯火はまさかの全属性に対する適正有り。しかもどうやら強い適正らしい。
「灯火、魔法使えたの？」
「使えるわけねーだろ。もし使えてたら高校なんて行かずに魔法使いとして一儲けしてるわ」
灯火もこれは驚きだったらしい。そりゃあ１０年来の親友が魔法使いでした、なんて言われてそうだったんだー！　と受け入れ喜べるわけがない。
「恐らくお二人の故郷であるちきゅうにはこの世界に溢れている『マナ』が存在していないので、魔法が身近に無かったんだと思います」
これ以上知らない単語を出すのは勘弁してほしい。今日一日で一体どれだけの情報を流し込まれるんだ。
「……あの、先ほど言っていた『魔道具』と『マナ』って何ですか？」
それでも聞かないわけにはいかない。その情報を知らなかったせいで命を落としました、なんてことになったら洒落にならないからだ。
「『魔道具』とは魔法を使った特殊な製法で作られた道具のことで、マナを流し込むことでその魔道具に付与された効果を発揮することが出来ます。
『マナ』とはこの世界に溢れる魔法の源のようなものです。普通は

目では見えませんが、訓練を積めば目視することも出来るようになりますよ」
魔道具もマナも、どちらもファンタジー味の溢れる内容だった。いや、だからってどうのって訳じゃないんだけど、結局説明を受けたところで何も分からなかった。
「……ありがとうございます」
「いえ。
ではこれで、こちらでの手続きは以上となります。明日からですが、早速魔法に関する講義を始めることも出来ますが受講しますか？」
女性は僕ではなく灯火の方を見ながら聞く。適性が無いから僕は講義を受けても意味が無いということなのだろう。別にこの女性に悪意は無いと思うが、ちょっと心にくるものがある。
「俺は受けます。陽向はどうする？」
「僕はいいや。灯火が講義を受けている間に、僕は色々と調べものをしておくよ」
まあ、講義を受ける分の時間が丸々空いたと思えばいいだけのことだ。灯火が講義を受けている間、僕はこの世界に関する知識を深めて今後の生活基盤を整えるための準備をすればいい。
「分かりました。では灯火さんのみの受講と言うことで手続きを進めておきますね。
講義を受けている期間中は、こちらからお二人に宿の手配と一日あたり銀貨一枚を支給させて頂きます」
宿とお金を手配してくれるのは非常にありがたい。というか宿とかこの世界のお金とか、そこまで頭が回っていなかったから言われて思い出したくらいだ。
「銀貨一枚でどれくらいのものが買えるんですか？」
「そうですね……大体二人分の一日の食事代を多少節約すれば賄えるくらい、でしょうか」
二人で節約して一日銀貨一枚の食事、ってことは別に節約しなくても銀貨二枚なら一日分の食事でお釣りがくるって計算で問題なさそ

うかな。無駄遣いするつもりはさらさらないけど、わざわざひもじい思いをしなきゃいけない理由もない。
　それに食事は身体を作ったり自分自身のメンタルを保つためにも大事なものだし、ちゃんと賄えるなら別に無理をすることもないだろう。
「分かりました、教えて頂いてありがとうございます」
「いえいえ。
　では以上で、冒険者登録は完了となります。こちらで手配した宿までの簡単な地図をお渡ししますので、後でそちらに向かってください」
　僕らに同じ絵が描かれた二枚の紙が手渡される。現代のものみたいに真っ白というわけではないが、黒のインクで描かれたここから宿までの簡易的な地図は問題なく読み取ることが出来る。
「今日はもう早速宿に行って、これからのことについての計画を立てよっか」
「そうだな。色々ありすぎて疲れたし、飯食って話し合って寝よう」
　思えばここまでとんでもない出来事ばかりだったなぁ。この世界に来てドラゴンや巨大熊を見て、この世界についての知識を沢山教えてもらって、冒険者として登録する。ここまでで一日も経っていないというのだから驚きだ。色々と起こりすぎだろう。
　僕らはギルドを後にすると、指定された宿に向かって真っすぐに歩き出した。

第一章第7・5話　【受付嬢の疑問】

新たにやってきた流れ人二人の登録書類をじっと見つめるトーシェ。
「トーシェ、さっきの流れ人二人の書類の処理は終わったの？」
今はまだ午後ということもあり、多くの冒険者が依頼をこなしに行っているおかげで受付の仕事はそんなに多くはない。
だからといって仕事をサボっていい理由にはならず、冒険者ギルドタラハット支部の支部長『ロイハ・シーラ』はトーシェの元へと歩み寄ると、トーシェが持つ書類を取り上げた。
「ウチにしては珍しい流れ人だからって、なにうつつぬかしてんの」
「あ、ロイハさん違いますよ。ちょっとその二人について気になることがあって……」
「気になること？」
肩甲骨くらいまで伸びた長いピンクの髪を耳にかけ、ロイハはトーシェから奪い取った書類に目を通す。
「はい。その二人、どうやらキゼモナスの住処がある方向からやってきたみたいで……」
「……は？　あの厄災龍の？」
キゼモナスとは、タラハットの門前にある森を抜けた先、ずっと向こうにある『厄災の降る地』と呼ばれる場所に住まうドラゴンの名前である。大昔に国を一つ壊滅させたという逸話が残っていて、ピラマに住まう人々からは『厄災龍』として恐れられている。
キゼモナスの名前に驚いたロイハは、思わず持っていた書類を地面に落としてしまった。
「ああ、やばい落としちゃった。トーシェがいきなり変な冗談言うせいで大事な書類にホコリがついちゃったよ」
「私のせいにしないでくださいよロイハさん。私はただ事実を伝えただけなんですから」
ジトッとしたロイハの視線を受けたトーシェが反論する。それを聞いたロイハは、もう一度書類を上から下までじっくりと見つめる。

「……このトウカ、って子が四属性持ちで適正強めってくらいしか怪しい要素は無いと思うけど。
ねえ、本当にあの二人は厄災の降る地から来たって言ったの？」
ロイハの問いに対して、トーシェは手と頭を使って全力で否定の姿勢を取る。
「ち、違いますよ！　そっちの方向から来たってだけで厄災の降る地から来たとは言ってません！」
「紛らわしい言い方しないでよトーシェ……危うく調査隊を派遣しなきゃいけなくなるところだったじゃない」
大きくため息を吐いたロイハは、書類を持って奥へと戻ろうとする。
その背中を、トーシェが呼び止める。
「あ、待ってくださいロイハさん。どのみち調査隊の派遣はしてほしいんです」
「どういうこと？　彼らは厄災の降る地の方向から来たのであって、実際にその地から来たわけじゃないんでしょ？　なら問題は何も――」
「いえ、彼らが来たのは途中にある『はじまりの森』です。それも、そこにある原っぱから、って」
「……はじまりの森にある原っぱ？」
はじまり森は、初心者冒険者でも狩りやすいモンスターが多く住んでいる森として有名で、そこで戦い方や森での身のこなし方を覚えて次のステップへと進んでいく場所となっている。
故にこの森はギルド職員によって完全に調査されていて、その地図もギルドから発行されているくらいだ。
「はい。私の記憶違いだったら申し訳ないんですけど、はじまりの森に原っぱなんてないですよね？」
調査され尽くしているからこそ、トーシェは陽向の発言に疑問を持った。あそこに開けた原っぱなんて存在しないはずだ、と。
トーシェに問われたロイハも、首を横に振って答える。
「ええ、あそこに原っぱなんて存在しない。となるとあの二人が嘘を

吐いているってことになるけど……」
　そこで、トーシェもロイハも口ごもる。二人には明らかにこの世界に来たばかりの陽向たちが、わざわざそんな見え透いた嘘を吐く理由が分からなかったからだ。
「それで怪しいと思って、あの方向にいる厄災龍の名前がトーシェから出てきたってことね。
　私はその二人を直接見たわけじゃないから何とも言えないけど……トーシェはどう思った？」
「この世界に戸惑っている流れ人、って感じでした。正直他の流れ人よりも何も知らない感じと言うか、魔法とか魔道具についても質問されましたし」
「別に魔法や魔道具について聞いてくる流れ人自体は珍しくないけど……この世界に戸惑ってるって言うと、確かに他の流れ人とはちょっと違うね」
　大体の場合、流れ人はこの世界のことを熟知とまではいかないがある程度知っている状態でギルドへとやってくる。だから殆ど何も知らない、というのはかなり珍しい。
「それに検閲官のシニカルさんによると、手ぶらの状態だったうえにスキルについても知らなかったようだと」
「スキルを知らない？　流れ人なのに？」
「ほら、これを……」
　トーシェはロイハに”紹介状”を渡す。これは門番たちによって書かれた『流れ人の危険性や怪しさを表す通達文』であり、万が一内容を読み取られないように”紹介状”と銘打ち、更に開封しないように流れ人に釘を刺した上で手渡されている。
　因みにこれを開封した場合、本来受けられるはずの初心者向けのサポート（宿の支援や講習を受けている間の資金支給）が一切なされない上、ギルドから発行されるギルドカードが監視機能の付いたものになるというペナルティが加算される。
　シニカルが渡した通達文には、『流れ人二名、スキルについて無知。また持ち物も一切なし。未知の能力を有している可能性あり』と言っ

た内容の文章が書かれていた。
流れ人がピラマの人々とは異なる力を持ち、彼らがそれを『スキル』と呼んでいるということは最早共通認識になりつつある。故にスキル無しの陽向たちは、オズウェルやシニカル、そしてトーシェには服装とは違った意味で目立っていた。
「しっかり未開封の状態で持ってきたんですよ、あの二人。
……もしあれが演技で、本当はこの街を滅ぼそうとしていたりする、みたいなことだったら正直脱帽するしかないです」
「そのくらい嘘感が無かった、ってことか……」
ロイハは手元の二人に関する資料とシニカルの通達文を交互に見る。そして数刻考える素振りを見せた後、纏まった考えをトーシェに伝える。
「『はじまりの森』へは調査隊を出す。それとあの二人にこっちから『はじまりの森』に関するクエストを斡旋しておいて。そこに冒険者に扮したギルド職員を同行させて反応を確かめて貰う。
それら全ての資料を持ったうえで、改めて判断するわ」
「はい、分かりました。」
ロイハは大きく息を吐くと、手をパンと叩いた。
「よし、この件は一旦終わり。これから忙しくなる時間だし、トーシェも仕事に戻りな」
そう言うと、ロイハは受付奥に用意された自分用の執務室へと戻っていった。

第一章第８話　【薄暮の迫る街】

ギルドが手配してくれた宿は、豪華とまではいかないけれど十分に立派なものだった。
受付には４０代くらいのおばさんが立っていて、僕らが入ってくるのを見つけると驚いたような顔をした。
「あら、流れ人なんて珍しいね。ギルドからの手配証は持ってるかい？」
「はい、これを」
僕は地図と一緒に渡された銀色のプレートをおばさんに差し出す。おばさんはそれを受け取ると、表裏を確認し始めた。
「偽造防止用の刻印も有り……と。
あい、いらっしゃい。何泊してくんだい？」
手配証が本物であることを確認すると、おばさんは笑顔で僕たちを迎えてくれた。
「一応魔法に関する講義が終わるまでの予定なんですが」
「ふむ……それだったら一応１０日で取っておくから、それ以上伸びそうだったらその時に言っとくれ。部屋はツインでいいかい？」
「はい、大丈夫です。ありがとうございます」
「それじゃあ名前教えてくれるかい？　こっちで書いておくから」
ギルドの時と同じように、名前をおばさんに書いてもらう。
「ヒナタとトウカ、ね。
ご飯だけど、朝食は一人銅貨３０枚、夕食は一人銅貨５０枚になってるよ。まあ夕食に関しては、他のところに行った方が値段は掛かるけどいいもの食べれるから、そっちに行くのもいいと思うよ」
「あの、相場観がいまいち分からないんですけど、銀貨１枚って銅貨何枚分なんですか？」
「銀貨１枚は銅貨１００枚分だね。まあうちのはギルドと提携している分、他より安めになっているとは思うよ」
銀貨１枚が銅貨１００枚で、朝食が銅貨３０枚。ここの相場観で言えば、確かに多少節約すれば銀貨１枚で二人分の一日の食事は賄えそ

うではあるか。
「なるほど、ありがとうございます。では今日から暫くの間、お世話になります」
おばさんに向かって、僕と灯火が同時に頭を下げる。
「あいよ。あ、部屋に貴重品は置いていかない方がいいよ。一応鍵は出来るけど、誰かに荒らされてもうちは責任取れないから。
それじゃあ、部屋は二階に上がって突き当りにあるところを使いな。水は自分で作れるならそれでいいけど、無理なら外にある井戸から汲むか食堂で買うかのどっちかになるからそのつもりでね」
「はい、分かりました」
再度おばさんに頭を下げて、僕たちは指定された二階の一番奥にある部屋へと向かう。

部屋にはベッドが二つとちょっとした荷物置きのスペース、それとテーブルとクローゼットがあるだけの簡素なものだった。窓にはカーテンの類は一切無く、外から丸見えの状態になっている。まあ二階だから角度的には見えないとは思うけど。
窓から外を覗いてみると、辺りはすっかり夕焼け色に染まっていた。
「いい景色……」
窓から見るタラハットの街並みは、風情と芸術に彩られた中世の姿そのものだった。ここだけ切り取ったら観光地にいられるような気分になれて最高なんだけどな。
改めて部屋の中に目を向けてみる。部屋の中は綺麗に掃除がなされていて、ベッドにもシーツのようなものが掛けられている。しかし綺麗な直方体の形をしているわけではなく、歪な形をしていた。触ってみると、ちくちくとした感触が返ってくる。
中を捲ってみると、そこには大量の藁が入っていた。

「まあ、そりゃあそうだよね」
ここまでの街並みや人々の衣装を考えるなら、羽毛や綿が使われたベッドが庶民にも行き渡っているとはとても考え難い。それでもシーツが敷かれていたり掛布団には羊毛が使われていたりするから、睡眠にはそこまで支障は出ないだろう。
「十分じゃねえの？　寝具が気になるようだったらある程度稼げるようになってから宿変えればいいだけの話だろ」
灯火は特段気にする様子もなく、窓際に備えられたベッドに身体を投げ出す。ガサリという音と共にベッドの形が歪み、灯火の身体が沈み込んだ。
それに倣って僕も身体を預けてみる。制服を着ているおかげで上半身にチクチクとした感覚は無いが、下半身は布が薄いこともあってか少し気になってしまう。
「まあ、大丈夫でしょ」
部屋の確認も終わったところで、僕たちは寝転がりながら今後のことについての話し合いをすることにした。
「灯火は講義を受けるってことは、そのまま冒険者として稼ぐってこと？」
「今んとこはそのつもりだな。
そういう陽向は、冒険者やるのか？」
「そう……だね」
灯火に聞かれて、一瞬口ごもる。

「陽向、お前冒険者やめとけ」

灯火から帰ってきた返答は、僕が冒険者になることを否定する言葉だった。
「……なんで？　僕に魔法適正が無いから？」
灯火に捨てられたような気持ちになってしまった僕は、縋るように

灯火に聞き返す。
「まあそれもあるけど、陽向が冒険者やるのは陽向の負担が増えるだけだろ」
「負担？」
「武術の経験が一切無いお前がいきなり剣を振るうのは流石に無理があると思う。まずは身体づくりからやっていかなきゃいけない。身体づくりの後は剣術の指南を受けなきゃいけない。俺だって剣の経験は無いけど、武術やってるから身体は出来てる。
それにお前、地球に帰る為の情報収集とかも一人でやるつもりだろ」
灯火に図星をつかれてしまい、何も言えなくなってしまう。それを察したのか、灯火は更に続ける。
「俺だって誰かと話して情報を得ることは出来るけど、書物関連は無理だ。字が読めないからな。
お前、この世界の文字も覚えようとしてるだろ？　そうなるとお前にかかる負担が大きすぎるし、時間だってどれだけかかるか分からん」
「……そんなことまでばれてたか」
「何年親友やってると思ってんだ。
兎に角、今から陽向が戦闘面に参加するのは非効率だ。どうせお前だって頭ではそんなこと分かってんだろ？　でも俺だけが危険な戦場に行くのが忍びないから、自分も冒険者になろうとしてるんじゃないのか？」
僕の考えをすべて言い当てられてしまう。そこまで理解してくれている嬉しさを感じるのと同時に、全てを見通されている感じがしてなんか恥ずかしくなってきた。
「大丈夫だよ、俺は死なない。
少なくともお前を残して、俺は死んだりしねーよ」
お互い、身体の殆どをベッドに沈めている為に顔を見ることはできない。灯火が今どんな顔をして僕に言葉を掛けてくれているのかを見ることは出来ないけど、きっと昼間みたいな浮足立った顔ではない

だろう。
「なんかそれ、告白みたい」
　だから僕は照れ隠しに、そんな返事を返した。
「嫁に貰ってやろうか？」
「僕が貰われる側なの？　ちょっと嫌だな～」
「自分で言っといて断るのかよ」
　いつもの軽いやり取り。ここにきて漸く、気持ちが軽くなったような気がした。
「ありがとね、灯火。お言葉に甘えて、僕は勉強に専念させてもらうよ」
「ああ。その代わり、いい情報期待してるぞ」
「ご期待に沿えるように頑張ります」

第一章第9話　【剣の師】

「ん……くあぁ～～!!」

太陽がまだ昇ってすらいない時間帯、俺はいつも通りに目を覚ました。異世界に来たって言うのに、体内時計は変わっていない辺りは流石と言うか何というか。

「よし」

いつものランニングをこなす為、靴を履いて外に出る。制服にローファーなせいでかなり走り辛いが、着替えなんて持ってないし仕方ないだろう。

……昨日のうちに買っておけばよかったと思わなくもないが、別にこの格好じゃ走れないって訳じゃないからまあ良しとしよう。

外に出てから念入りに柔軟をして、まだ寝ぼけている身体を叩き起こす。足首周りを念入りにほぐしておいて、怪我をしないようにしないと。

「まだこの街の道殆ど知らないし、迷わない程度にグルグル走るか」

ゆくゆくは街中を走りながら色々なところを見て回りたいが、今日はそういったことはお預け。迷子になって今日から始まる講義に遅れたら元も子もないし、それに今日は他にやらなきゃいけないこともあるから早めにギルドに顔を出さなきゃいけない。

程よく身体が解れたので、早速走り始める。空は段々と白み始め、太陽が頭を出していた。走り始めてから気づいたけど、正確な時間や距離が分からないから感覚でしか走れないのは結構不便かもしれない。

時計みたいなものがあればいいんだけど……魔道具ってどのくらい便利なアイテムなんだろうか？　家電製品みたいな位置づけで考えていいのかな？

……まあ、そこら辺は実際に色んな魔道具を見てみれば分かることか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「……何してるんだ？」
暫く走ったところで、目の前に見知った顔が現れる。見知ったと言っても昨日会ってほんの少し話した程度ではあるけど。
「ランニングっす」
昨日俺たちに受付の場所を教えてくれた心優しき冒険者は、まだ朝も早い時間だと言うのに背中に剣を携えてどこかへ行こうとしているところだった。
「えっと……お兄さんは？」
咄嗟に会話をして、そういえばこの人の名前を聞いていなかったことに気づく。
「ダインだ」
「え？」
「お兄さんではなく、ダインだ」
俺が名前を呼ばなかったので察してくれたのか、お兄さんのほうから名乗ってくれた。本当は礼儀としてこちらから名乗るべきではあるんだけど、まあ結果オーライと言うことで。
「ダインさん、でしたか。俺は明村灯火って言います。灯火って呼んでください」
「トウカ……分かった」
そこで一度会話が途切れる。ダインさんはそのままどこかへと行こうとしたので、俺が慌てて呼び止める。
「あ、ダインさんちょっと待ってください！」
「……なんだ？」
ここでダインさんに会えたのはかなりラッキーだ。何なら今日は一日中ギルドで張る予定だったから、その分の時間が浮いたのはデカい。

「俺に剣を教えてくれませんか」
俺が昨日からずっと考えていたこと、それはこのダインさんに剣術の指南を乞うことだった。俺には格闘技の経験はあっても剣術の経験は一切ない。昨日ギルドにいた冒険者を見た感じ、皆剣なり弓なり斧なりと、何かしらの『武器』を持っていて、拳一つで戦っていそうな人間は誰一人いなかった。
そもそも俺だって、あんな化け物たちと拳でやりあえるなんてこれっぽっちも思っちゃいない。でも剣術に関してずぶの素人の俺がいきなり剣を握って、どうにかなるとはとても思えない。そこで昨日会ったダインさんにお願いしてみようと思いついた訳だ。
ダインさんは驚くでもけなすでもなく、じっと俺の目を見つめる。だから俺も自分の真剣さを伝える為に、じっとダインさんの目を見返す。
「何故俺に指南を乞う」
「あなたが強いと思ったことと、俺たち流れ人に対して偏見無く接してくれたからです」
「……」
昨日一日を通して思ったことだけど、この街の……というより恐らくこの世界の人たちは、だと思うけど、俺たち流れ人に対してあまりいい印象を抱いていないように思えた。
幸いなことに、俺たちが接してきた人たちはそこまで露骨に嫌がっている人はいなかったけど、ギルドに行くまでの道すがらやギルド内部でかなりの人たちが俺たちに煙たがるような視線を向けていたのを感じた。
俺たちの態度が悪かったようには思えないし、そもそもそんな不快感を与えるようなことなんてしていない。だから多分、元々嫌われているんだろうなと感じた。
「俺はそこまで強くは無いぞ」
「一切の気配無く俺たちのところに歩み寄ってきている時点で相当強いと思いますし、もしそれで強くないと言うなら俺はこの世界で生きられる資格は無いと思います。

でも、俺はこの世界で生きなきゃいけないんです。生きて元の世界に、陽向と一緒に帰らなきゃいけないんです。その為にはここで死ぬわけにはいかない。戦えないじゃ駄目なんです。

だから、お願いします。俺に剣を教えてください」

昨日から何度下げたか分からない頭を下げる。

今の俺には何も無い。金もなければ生きていくだけの力も無い。だから俺がこの人に差し出せるものは何一つとして無い。だからこそ、俺は誠意しかこの人に見せられない。

長い、長い沈黙が流れる。

頭を下げ続けている俺には、ダインさんの表情は見えない。もしかしたら俺がこうして頼み込んでいるのも、ダインさんにとっては迷惑かもしれないんじゃないだろうか。一度は優しくしたけど、こうしてつけあがるならあんなことしなければよかった、そんなことを思っているんじゃないだろうか。

そんなマイナスな思考ばかりが頭を駆け巡る。

「……今日は魔法に関する講義だったな」

どれだけの時間が経っただろうか、ダインさんがぽつりとそんなことを言った。

「え、あ、はい」

「ならそれが終わったら門の前まで来い」

それだけ言うと、ダインさんは俺に背を向けて歩いて行ってしまった。

「……あ、ありがとうございます！」

俺はこの世界で戦う力を手に入れることが出来る。これで俺も漸く、この世界でスタートラインに立てる。

不安でどうにかなりそうだったが、ここにきてやっと重りが一つとれた気がした。

第一章第１０話　【路傍の石】

「……ん、んぅ」

窓から差し込む朝日の眩しさに、僕は耐え切れずに目を覚ます。最初は心配だったベッドだけど、寝てみると意外にも快適でぐっすりと眠ることができた。

「まあ、夢オチってことはないよね……」

ほんの少しだけ期待していたことではあるが、藁のベッドと昨日と同じ光景でそんなものは簡単に打ち砕かれた。

隣を見ると既に灯火の姿は無かった。きっといつものロードワークにでも行ったのだろう。異世界に来たというのに殊勝なことだ。

「僕も早く行動しなきゃ」

部屋を出て食堂に向かう。今日は街を散策するのと同時に、働けるところを探すっていう大事な用事があるから早めに行動しないといけない。まだ太陽は昇り始めたばかりのようで、街の中に昨日のような騒がしさは無い。これなら一日をフルに使って仕事探しと街の探索が出来る。

食堂でおばさんにお金を払って朝食を作ってもらう。この宿には僕らの他にも冒険者が泊っているようで、食堂には４人の冒険者がそれぞれ食事をしていた。

「はい、お待たせ」

「ありがとうございます」

少し待っていると、おばさんがお盆に料理を乗せて持って来てくれた。内容は茶色ががったパンと野菜のスープ。朝ご飯としては十分すぎる内容だ。

「頂きます」

両手を合わせて挨拶をし、パンを一齧り。日本で食べていたパンよりも硬いけど、食べれないってことは無い。というか普通に美味しい。

野菜スープも啜る。こちらも野菜そのものの味がしっかりと出ていて美味しい。料理に詳しくないから何の出汁を使って作っているのか分からないけど、美味しいのは確かだ。
ものの数分でご飯を平らげ、空になった皿とお盆をおばさんのところへと持っていく。
「ご馳走様でした。とっても美味しかったです」
「そうかい？　それはよかったよ」
おばさんは食事を作り終えて軽い休憩を取っているところだった。今なら邪魔にならないだろうと踏んで、今日の行動のために聞きたかったことをおばさんに聞いてみることにした。
「あの、少し聞きたいことがあるんですけどいいですか？」
「ん？　なんだい？」
「この街で、僕を雇ってくれそうなところってありますか？」
僕の質問に、おばさんはキョトンとした顔をした。
「雇うって……あんた冒険者は？」
「その……僕は冒険者にはならないんです」
理由に関しては敢えて伏せたが、おばさんは僕の表情から察してくれたのかそれ以上は追及せずにいてくれた。
「……そうかい。まあ流れ人が絶対に冒険者にならなきゃいけないって決まりも無いからね。あんたがそう決めたならいいと思うよ。
にしても雇ってくれるところね……うーん……」
「やっぱり、〝流れ人〟じゃ厳しいですか？」
〝流れ人〟の部分を少し強調して言ってみると、おばさんは大きなため息を吐いて僕に憐れむような視線を向けた。
「その様子だと気づいているみたいだけど……流れ人ってのはあんまり好かれていなくてね。勿論あんたらみたいに礼儀正しい子たちもいっぱいいるんだけど、如何せん悪い者が良く目立つというか、そういうのばかりが印象についてしまうと言うか……
って、私のぼやきはどうでもいいか。それで仕事だったね、うーん……」
おばさんは両腕を組んで暫く難しい顔で唸る。この街に住んでい

る人でこれだけ悩むとなると、働き口を見つけるのはかなり骨が折れそうな気がしてくる。

「……ごめんね、私が思い浮かぶ限りじゃ雇ってくれそうなところは……」

かなりの時間悩んでくれたが、返ってきた答えはいいものではなかった。

「いえ、相談に乗ってもらってありがとうございます。働き口は自分でも探してみますので」

「本当にごめんね。出来ることならうちで雇ってやるって言えたらいいんだけど、うちも結構厳しくてね……」

「そんな、その気持ちだけで十分ですから。本当にありがとうございます」

再びお礼を言って、食堂を後にする。こうなれば自分の足で探すしかないだろう。取り敢えずは色んなお店に行ってみて、直談判をしていこう。

「うちは流れ人は雇ってねぇ、帰りな」

「流れ人？　お前らは冒険者でもやってろよ」

「うちは今従業員の募集はやっていないので……」

今日一日でこの街にある殆どの魔道具店と鍛冶屋に行ってみたが、返事はどこも同じだった。

灯火の冒険をサポートできるような仕事に就いて、灯火の冒険を少しでもサポートしたいと思って鍛冶屋と魔道具店を虱潰しに当たっ

てみたが、結果は散々。
既に日も暮れかけ、もうすぐ灯火も帰ってくるであろう時間帯になっていた。
「……帰ろう」
今日という日が完全に無駄になってしまったこと、そしてこの街での流れ人の印象が思っていたよりも悪かったことに肩を落としてしまう。明日もこんな調子だと、働き口を見つけるのは不可能かもしれない。そうなれば僕は完全に灯火のお荷物になってしまう……。
「いや、それだけは駄目だ」
灯火にこれ以上迷惑は掛けられない。灯火が冒険者として命を懸けて戦ってくれる以上、僕もまたこの身を粉にして働き、脚を使って情報をかき集めなければいけない。たった一日駄目だったくらいで折れてる場合じゃない。
よし、明日からまた頑張ろう！
「……って、あれ？　こんなところに魔道具店なんてあったっけ？」
決意を固めて顔を上げた時に、僕の目に偶然飛び込んで来た一つのお店。
見た目は殆ど普通の民家で他の魔道具店のように魔法のステッキが描かれた看板は無かったが、今まで巡った魔道具店に書かれている共通の文字列が見受けられた。恐らくこれが『魔道具店』的な意味を持つこの世界の言葉なんだろう。
「せっかく見つけたんだし、最後にここも行ってみよう」
今さっき固めた決意を無駄にしたくなかった僕は、目の前の魔道具店の門戸を叩いた。
「……御免ください」
中にはランタンなどの明かりの類は無く、窓から差し込む夕陽だけが唯一の光源だった。他の魔道具店は棚に所狭しと様々な用途を持った魔道具が展示されているのに対して、このお店は棚にずらりと本が並べられていた。
しかもそれらの本は展示されているというより、ただ整理するために置いているようだった。外見といい、この棚の本といい、ぱっと見

だとここがお店だとは気づきにくい。自分でもよくここが魔道具店だと気づいたと思う。
　ふと一冊の本が目に入った。背表紙に書いてある文字は相変わらず読めないが、僕はその本を手に取って中を開く。
　中を開いてもやっぱり内容を読み取ることはできない。冷静に考えてみると、自分でもどうしてこの本を手に取り読もうと思ったのかまるで理解が出来なかった。気づいたら手に取っていた、そんなところだ。
「その本は売り物じゃないよ」
　ふと手に取った本を元通り本棚に戻そうとしていると、突然背後から声を掛けられる。慌てて振り返ると、そこには僕よりも二回りくらい小さなお婆さんが僕を見上げて立っていた。
「あ、その、こんにちは……」
「ポーションだったらあっちの棚だ。今日はもう店を閉めるから、それ買ってとっとと出ていきな」
　右手で店の奥を指差すお婆さん。やはりどこか排他的で、僕を鬱陶しく思っているように見えた。
「あの、僕は買い物に来たんじゃないんです」
「あ？　なら冷やかしかい？　それなら尚更早く出ていきな」
　お婆さんの声に苛立ちが含まれる。慌てていたので言葉に気を配っている余裕が無かったが、思い返せば今の言い方は流石に誤解を招く。
「僕、浦沢陽向といいます。僕をここで働かせてほしいんです！」
　お婆さんに向けて頭を下げ、全力でお願いする。最初の反応から見れば恐らく断られることは目に見えているが、それでも全力で頭を下げる。そうしなければ、自分の誠意も思いも伝わらない、そう思うからだ。
「……なんで働こうとするんだい？」
　今まで行ってみたお店の人とは異なる反応を示すお婆さん。僕はお婆さんに対して、包み隠さずに全てを話す。
「親友の冒険をサポートしたいからです。魔道具の製作が出来るよう

になれば、親友の負担を少しでも軽減できるんじゃないかって、思ったからです」
　まるでこのお店での経験を踏み台にすると言っているようにも捉えられかねないかもしれないが、ここで嘘を言ったところで何も伝わらないだろう。紛れもない僕の気持ちは、親友の為に技術を身に着けて冒険のサポートをすることと、親友が戦っている間に地球に帰る方法を探すことだ。
「……」
　お婆さんは僕の目をじっと睨む。そしておもむろに、その視線が僕の目から僕の手元の本へと移った。
「それ、読めるのかい」
「この世界の文字は、まだ……。でも覚えたいとは思っています。勉強して、色々な知識を得たいと思っています」
「……そうかい」
　それだけ言うと、お婆さんは店の奥へと引っ込んでしまった。
　駄目だったか。それなら大人しく今日は帰って、また明日別の魔道具店か鍛冶屋さんを当たってみよう。
　そう思って手に持った本を棚に戻し、店を後にしようとしたところで
「どこ行くんだい」
　お婆さんに呼び止められる。
　振り返ると、お婆さんは先ほどまで着ていた麻色のチュニックのような服の上に朱と黄色のグラデーション模様が描かれた肩掛けのようなものを羽織っている。
「えっと、断られてしまったようなので宿に戻ろうと……」
「別に断っちゃいないよ」
　そう言うと、お婆さんは僕を追い越して出入口の方へと歩いていく。
「付いてきな」

第一章第11話　【僕は孤独じゃない】

お婆さんについていく形で歩くこと暫く。どこへ行くのかも分からず、聞いても「黙ってついてきな」の一言が返ってくるだけ。陽は大分落ちていて、もうあと数十分もすれば月明かりが街を照らす時間帯になるであろうことが容易に想像できる。

この時間まで僕が帰らないことで灯火に心配をかけてしまうかもしれない、と一瞬思ったが、それよりもこのお婆さんについていく方が今は重要だろう。

ごめんね灯火、帰ったら説明するから。

お婆さんは、一つの建物の前で足を止める。そこは冒険者ギルドよりも一回りほど小さな建物で、壁には魔道具店を表す三角フラスコのような絵が描かれた看板と鍛冶屋を表すハンマーと金床が描かれた看板、そして飲食店を表すナイフとフォークが描かれた看板の三つが掛けられている。

「お婆さん、ここは……？」

お婆さんは僕の問いかけに答えることなく、目の前の建物の扉を押し開いた。

中は冒険者ギルドと似たような作りになっていた。入って左手奥にはカウンターが設置され、そこには常駐している職員と思しき方々が。右を向けばそこには壁一面にびっしりと紙が貼りつけられ、その紙一枚一枚に何かしらの絵と数字が書かれていた。

「こっちだ」

お婆さんはそう言うと、左のカウンターの方へと向かって行く。よそ見をしていた僕は危うく置いて行かれそうになり、慌ててお婆さんの後を追う。

「おやスローアさん、珍しいですね。帳簿ですか？　それとも何か素材の調達ですか？」

お婆さんが向かった先は、僕たちから見て一番左に座っている男性のところ。男性はお婆さんの顔を見ると少し驚いたような表情になる。

そういえば、お婆さんの名前を今まで聞いていなかった。多分今この男性が言った『スローア』というのがお婆さんの名前なんだろう。
「素材も帳簿も間に合ってるよ。今日は適性を測りに来たんだ」
お婆さん――――スローアさんはそう言うと、目線を男性から僕の方へと移す。それにつられる形で男性も僕の方へと視線を移し、そして訝しげな顔になった。
「スローアさん、流れ人ですか？　一体どういう風の吹き回しで」
「こいつは私の弟子だ。まだ適性を見ていないからそれを見に来た。いいかい？」
男性の言葉を遮るようにスローアさんが口を挟む。余計なことを言うなと暗に言いたげなその口ぶりに、男性もそのまま口を噤んでしまった。
というかちょっと待って。今僕のこと〝弟子〟って言わなかった？
「ほら、さっさと仕事しな。魔導水晶引っ張り出して」
スローアさんは急かすように男性を煽る。男性も慌てて奥へと引っ込み、少しして冒険者ギルドで見たものと全く同じ水晶を持ってきた。
「あの、スローアさん。僕魔法の適正は……」
「誰が名前で呼んでいいって言った」
ものすごい勢いで振り返り、ギロリと僕を睨みつけるスローアさん。まだ僕には名乗っていないから名前で呼ぶのは駄目ってこと……？　今僕のこと弟子って言ったのに？
「あの、じゃあなんて呼べば……」
「それはこれから決める。
ほれ、これに手をかざしな」
これは僕が何を言っても無駄なんだろう。昨日のギルドでの様子が頭をよぎるが、やれと言われたからには仕方ない。きっと魔法適正が無いから雇うことは出来ない、とか言われるんだろうな……。
せっかくのチャンスだと思っていたのに、今回もダメそうだ。そんなことを思いながら水晶に手をかざす。やはり水晶は透明のまま、一

切色づかない。
「……ふん、『付与』と『分離』、それに『合成』か。まあ適正自体はかなり低いけど、あるだけ十分だね」
　しかしスローアさんの反応は、僕が思っていたものとは異なった。思いのほか好感触というか、もしかして認められたのか？
「あんた、明日から冒険者ギルドで魔法に関する授業を受けてきな。丁度最近流れ人が来たらしくて、それ向けに授業が開かれてるらしいからね」
「魔法の授業、ですか？」
　昨日魔法適正が無かったからという理由で暗に受けなくていいと言われた授業が、何故今になって再び登場するんだろうか？　しかも僕には適性が無いというのに。
「あれは冒険者向けに開かれているものだから、受けるのはマナに関するところとその操作に関するところだけでいい。それを完璧に覚えたらもう一回私のところに来な」
　スローアさんはそう言うと、「それじゃあまたね」とぶっきらぼうに言い捨ててその場を後にした。
　残された僕は、何が起こったのか訳の分からないまま置いて行かれたような状態。僕って魔法適正無いんじゃなかったのか……？
「ねえ、君どうやってスローアさんの弟子になったの？」
　先ほどまでの出来事を頭の中で咀嚼していたところに、先ほど僕たちの対応をしてくれた男性が話しかけてくる。
「弟子……ですか？」
「え、違うの？　でもさっきスローアさん、君のこと”弟子”って言ってたよね」
「……言ってました、よね。やっぱり」
　さっきのスローネさんの言葉は、どうやら聞き間違いじゃなかったらしい。ということは、僕はスローアさんの弟子ってことでいいんだろうか？　スローアさんの元で魔道具の勉強が出来るってことでいいんだろうか……？
「よ、よかった……！」

働き手のではなく弟子として見てくれるなら、僕も気兼ねなくスローアさんのもとで勉強が出来る。もしかしたらスローアさんは、僕の話を聞いて雇うのではなく弟子として取ってくれたのかもしれない。

あまりの嬉しさと安堵感に僕の膝が耐え切れず、その場に崩れ落ちてしまう。今まではまるで、この世界に存在していないような気分だった。みんなから拒絶され、魔法適性も無く、灯火のお荷物にしかなれない、価値の無い僕。

そんな僕が、この世界での僕の居場所を漸く見つけることが出来た。

第一章第１２話　【魔法の謎】

あの後、腰が抜けて立てなくなってしまった僕は暫くスローアさんと一緒に訪れた建物で休ませて貰うことになった。
その時に聞いた話だが、僕たちが行ったあの建物は【商業ギルド】と呼ばれる場所でこの街で商いを行っている人々の為に作られた施設らしい。各店ごとの帳簿や国への税金の納付、また魔道具製作や武具の制作に使われる素材の売買なども請け負っているらしい。
「長い間ご迷惑をおかけしました、ダンキスさん。もう大丈夫ですので」
立てるようになった僕は、僕とスローアさんの対応をしてくれた男性――ダンキスさんにお礼を言ってその場を後にする。
「うん。もし困ったことがあったらまたうちに来てくれ。商いに関する手ほどきや店を構える場所の手配も請け負っているからね」
右腕に力こぶを作ってニカッと笑うダンキスさん。ポーズはとても力強いが、体格が細身な為にどうしても頼りなく見えてしまうのは僕だけではないだろう。
「ありがとうございます」
深々と頭を下げ、商業ギルドを出る。既に外はすっかり暗くなっていて、街路のところどころに設置された街灯が夜道を照らしている。この世界には電気が無いはずなのにどういった仕組みで光っているのかが気になって見てみると、中で炎が揺らいでいるのが確認できた。
「これも魔道具、なのかな……」
こうして見ていると、この世界は魔道具がありふれている。僕が思っている以上に、魔道具というものの多様性は凄まじいのかもしれない。
「……うん、頑張ろう」
灯火の為に、地球に帰る為に、僕にできる最大限のことをやろう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「……成程ね、よかったじゃん」
宿に戻った後、先に到着していた灯火に今日の件を話した。灯火はまるで自分のことのように僕が新たな道を見つけられたことを喜んでくれた。
「うん、何とかこの世界で灯火のヒモにならなくて安心したよ。
……ところで灯火、一つ聞いていい？」
「ん？　なんだ？」
僕は帰ってからずっと疑問だったことを灯火に聞いてみる。
「なんでそんなにボロボロなの？」

灯火の身体には、至るところに擦り傷や打撲痕のようなものがあり、見るだけで痛々しさを感じる。
もしや今日の授業で何かあったのかと思ったが、次の灯火の言葉で僕の心配は杞憂に終わることとなる。
「ああ、師匠に剣の稽古をつけて貰ってたんだ」
「稽古？」
灯火曰く、僕と同じようにこの世界で師匠を見つけたらしくその人に手ほどきを受けていたらしい。
「考えることは一緒だね」
「さすがにこの世界で誰にも頼らず生きていける訳ないからな。それに俺剣なんて使ったこともないし、扱い方すらわかんねぇもん。
先人の教えを乞うのが一番だろ」
「……言い方はともかく、僕もそう思う」
これで僕も灯火も、当面の間やることは決まった。暫くはこの街に

定住し、互いの師匠から色々なことを教えて貰って力を蓄える。どれだけやっても過剰ということは無い。僕たちはこの周辺の世界しか知らないんだし、準備はし過ぎて損をすることもないだろう。
「ひたすらに頑張ろう。時間はかかるかもしれないけど、無理して死んだら元も子もないし」
「だな」

「……あ、そういえば」
お互いに今日のことについて一通り話終わり、ご飯も食べ終わってそろそろ寝ようかというところで僕は大事なことを思い出した。
「灯火、僕に今日の授業の内容教えてくれない？」
「授業って、魔法のか？」
ベッドから起き上がった灯火が、こちらに身体を向ける。
「うん、魔道具製作をするにあたって、マナについての知識とそれを自由に操作するための技量が必要らしいんだ。だから僕も明日から授業に参加しようと思うんだけど、それで今日やった内容を知りたくて」
「なるほど了解。それなら今ここでちょっとやるか」
灯火は立ち上がると、僕が座っているベッドの横に腰を下ろす。
「今日教えてもらったのは〝マナと魔法〟についてだ。まずマナってのは――」
ここから、灯火による特別授業が始まる。
灯火によると、マナとは空気のようにこの世界に溢れている魔法の源となる物質のことで、普通の人間は目で捉えることが出来ないらしい。
マナは空気のように無意識的に取り込むようなことはなく、魔法を使う際に意識することで漸く体内に取り込むことが出来る。そしてマナの循環を意識できない人間に、魔法は扱えないと言う。

「……ええと、つまりマナっていうのは空気と同じように空気中に当たり前に存在しているものなんだけど、空気とは違って意識的に取り込まないと体に入ってくることは無い、ってこと？」
「そうらしい。んで次に魔法なんだけど、正直こっちの方が俺にとっては厄介だったな」
「厄介？」
「ああ。先生が言ってたことをそのまま言うと、『魔法は自分自身のイメージが強く、強固であるほど威力が上がる』らしい」
「イメージ……ねぇ」
魔法の説明を聞いたとき、僕の中で何かが引っかかる感じがした。
「……商業ギルドに行った時の話したじゃん？　その時にそこの職員さんと話したんだけど、魔道具を作る時に『付与魔法』って言うのを使うらしいんだ。道具に対して付けたい効果を自分で思い描いて、その道具に効果を付与する、らしいんだ。
説明を聞いたときは正直なんのこっちゃって思ってたんだけど、その『イメージ力』っていうのが魔法を使う上で大事ってことなのかな」
「ああ、多分俺もそうだと思うんだ。
んで問題はここからなんだけど、そのイメージ力ってのが大事なら、なんで『属性』なんて概念があるんだ？」
「……言われてみれば、確かに」
自分自身のイメージが魔法において重要だって言うなら、そもそも属性とか付与魔法とか、そういう魔法ごとの種類の概念があることに疑問が生まれる。イメージが大事だと言うなら、それこそ属性という垣根を越えて何でも想像通りの事象を起こせるのではないだろうか。
「聞いてみなかったの？　先生に」
「聞こうと思って忘れてた」
「……」
大事なことだろうに、忘れないでくれよ。
「まあいいや。明日からは僕も授業に出るし、その時に聞いてみよ」
「そうだな」
結局その日は謎を謎のままにして、僕たちは眠ることにした。

第一章第１３話　【マナと魔法】

翌日、僕はいつも通りランニングを終えた灯火と一緒に冒険者ギルドへと向かう。

僕が授業を受けたい旨を伝えると職員の人は不思議そうな顔をしていたが、別に受けること自体は自由だと言ってくれたのでありがたく受講させていただくことにする。

職員の人に案内され、僕たちはギルドの二階へと向かう。階段を上がってすぐのところに部屋が用意されていて、そこは日本の学校の教室をそのまま小規模にしたような部屋だった。ヨーロッパのような外観に対して超日本な教室の風景は、あまりにもミスマッチな気がしてならない。

「……まあ、何でもいいか」

教室を見に来たのが僕たちの目的って訳じゃないんだし、別に合う合わないは大した問題じゃないだろう。

用意された椅子に座って待っていると、間もなくして講師の先生と思しき人物が入ってくる。細身で身長の高い、２０代後半くらいの男性だった。

「はい、というわけで今日も授業をやっていきます。今日は【マナ操作】についての勉強をしていきますのでよろしくお願いします」

マナ操作、といえばスローアさんが完璧に覚えて来いと言っていた項目の一つだ。ということは、これと昨日灯火から教えてもらったマナについてを理解してから、スローアさんのところに行けばいいってことか。

「マナ操作に関してですが、習うより慣れろと言うことで実戦形式で覚えてもらいます。

それでは二人とも、ちょっとお手を拝借して……」

先生が僕と灯火の手を握る。

最初はいきなり何をしているんだろう、と思ったが、段々と先生の

手が触れている部分から僕の全身にビリビリとした痛みのようなものを感じるようになってきた。
「あの……先生これは？」
耐えられないほどではないが結構痛い。顔を苦痛に歪めながら先生に聞くと、先生は笑顔で答える。
「これは二人の身体に『マナの通り道』を作る為の作業です。これをしないといくら適性が高くても魔法そのものが一切使えませんので、我慢してください」
マナの通り道、回路のようなものだろうか。今まさに僕の身体は作り変えられているということなんだろうか。そう思うとかなりキツイな、これ。
ちらりと灯火の方を見ると、灯火は目を閉じ何かに集中している様子だった。この無視できない痛みと身体を勝手に変えられている感覚の中で別のことに集中できるって、流石は灯火だなぁ。
「陽向君、少し目を閉じて貰ってもいいですか？」
「え？　あ、はい」
先生に言われるまま瞼を閉じる。すると僕の手から先生の手の感触が無くなり、代わりに瞼に何かが添えられる感覚があった。タイミング的に先生の手だろう。
少しして、目にぴりっとした痛みを感じる。目にもマナの通り道を作ったんだろうか。
「……はい、オッケーです。二人とも目を開けてください」
先生に言われて、ゆっくりと目を開く。

「うわぁ……！」

僕の目の前に広がった光景は、紫色の光の粒がそこかしこに浮かぶ神秘的な世界だった。
灯火も僕と同じように、目の前に広がる光景に唖然としている。
「二人とも見えているようですね。その紫色の光が『マナ』と呼ばれる

ものです。これをこうやって体に取り込んでイメージをすることで……」

宙に浮かぶマナが先生の元へと引き寄せられるように集まっていく。マナは先生の身体に取り込まれ、体中を巡り、色を紫から赤へと変えながら一本だけ立てられた右手の人差し指の先へと集まっていく。

そして、先生の指先に小さな火が灯った。

「このように、魔法を発現させることができます。

今見えていたと思いますが、マナは魔法を使おうとすると一度私たちの身体に取り込まれます。そして身体を駆け巡るうちにその人のイメージに沿った『属性』へと色を変え、発現させたい場所へと集まっていきます。

この身体を巡る際に、適性の無い属性にマナは変化しません。つまり水属性の適性が無い人間が魔法で水を出そうとしても、身体の中でマナに水属性を付与する能力が無いために失敗してしまいます」

昨日の疑問が思わぬ形で改善された。

つまり、マナはマナのままでは効果を発揮することが出来ず、『属性』という味付けをすることで初めて魔法の源としての効果を発揮する、ということなのだろう。

ということを理解して、僕の中で別の疑問が浮かび上がった。

「あの先生、一つ質問良いですか？」

「はい、何ですか？」

「それなら、付与魔法はどういった原理になっているんでしょうか？」

属性魔法の原理は理解できた。属性という概念が存在する意味も理解できた。では、付与魔法はどういった原理になっているんだろうか？

属性魔法と同じような考え方をするなら、『付与』という味付けが存在してそれをマナに与えるということになるのかもしれないが……。

「付与魔法をはじめとした魔道具製作に使われている魔法も、基本的には属性魔法とは仕組みは変わりません。自身の持つ適正でマナに力を与え、その効果を道具に与えるのです」

先生の答えは概ね予想通りのものではあった。
でも、なんか引っかかるんだよな……。この世界に来てまだ3日しか経っていないけど、魔道具を作るのがそんな簡単なことには思えない。特に『付与』って、恐らく道具に自分が望む効果を加えることだと思うけど、それが属性魔法と同じようにできるって言うのは、ちょっとどうなんだろう……。

「……ごめんなさい、私は付与魔法にはそこまで詳しくないので、もしそっち方面のことでしたら実際に魔道具を製作している方に聞くのがいいと思いますよ」
僕が難しい顔をして悩んでいることで察したのか、先生が苦い顔でアドバイスをくれた。気を遣わせてしまったことが申し訳なくなり、僕は慌てて頭を下げる。
「ああ、すいませんそんなつもりじゃ……」
「大丈夫ですよ。
それでは続きですが――――」
そこからは、マナの起源が謎であるという話をされた後にマナを本格的に操作する練習の時間になった。
魔法を使おうとして集まってくるマナを自分の身体で循環させてその色に染めるという作業をしなければいけないんだが、この身体の中を循環させるのが非常に難しい。
マナ自体は魔法を使おうとすれば勝手に集まってくるが、それを身体の中で巡らせるという動作は自分の意思で行わなければいけない。今まで生きてきて感じたことの無い感覚や、使ったことの無い意識の使い方を強いられる為、僕も灯火もこれには大分苦戦してしまった。
「……っと、今日はもう時間ですね。
二人とも、明日もマナ操作の訓練をしますので今日はここまでにしましょう」
太陽が真上に昇りきった頃、先生の号令で今日の授業はお開きと

なった。
ちなみに僕は属性魔法を一切使えず、付与魔法も教えて貰っていない為、今日は先生からマナを僕の身体に送ってもらって、それを循環させる練習をした。
……他人を経由してマナの供給が可能なのって、何かに使えそうな気がする。一応覚えとこ。

第一章第１４話　【原点にして起源】

「灯火はこの後ダインさんのところだっけ？」
　授業が終わり、ギルド近くの露店で適当に買った昼食を食べながらこの後の予定を灯火に尋ねる。灯火は野菜の串焼きを頬張りながら、首を縦に振った。
「ああ。陽向はどうするんだ？」
「僕はこれからスローアさんのところに行こうかなって。今日の授業で気になることもあったし」
　付与魔法がどういった仕組みで使われているのかを今すぐにでも理解したい僕は、この後スローアさんのところに行って直接聞いてみようと思っている。講師の先生も「魔道具に関する話は魔道具師に聞いた方がいい」と言っていたことだし、言葉通りそうさせてもらうことにしよう。
「じゃあ、午後からはまた別行動だな」
「だね」
　その後僕らは残った串焼きを食べ、各々の師匠の元へと向かうことにした。

　午後。スローアさんの元へ来た僕は早速今日の授業で出来た疑問を聞いてみた。
「完璧に覚えてから来いと言ったんだけどね……」
　僕が来た時にスローアさんはそんな小言を言いながら僕を睨んだが、僕の質問を聞くと丁寧に答えてくれた。
「いいかい、この世界における『魔法』ってのは、大きく分けて三つに分類される。
　まずはアンタが今朝見てきた『属性魔法』。これは説明しなくてもいいだろうから省くよ。

次に付与魔法以外の『生活魔法』。例えばあんたが適性を持っている『分離』や『合成』もここに当てはまる。これらの魔法は単体では何も機能しない。

ならこれらの生活魔法はどうやって使うのか？　ここで出てくるのが最後の一つに分類される『付与魔法』さ。付与魔法は先の二つの根底に位置する魔法とされている。生活魔法を道具に付与するのには付与魔法が必要だし、属性魔法を使う時にだって体内のマナに自身の『属性』を付与しているんだ」

「……成程。ってことは、属性って僕が持っている『分離』や『合成』と同じようなものだと考えてもいいってことですか？」

僕が聞くと、スローアさんは感心したように頷いた。

「まあ、一応ね。でも属性魔法が戦闘に使われることはあっても生活魔法が戦闘に使われることは無いから、一般的には分けて考えられてるんだ。

ともかく、付与とそれ以外の魔法は別物として考えなきゃいけない。付与の適性は魔法が扱えるものなら誰でも持ってるものだし、『付与無くして魔法は成らず』なんて言葉もあるくらいだ」

自慢げに話すスローアさん。この世界にも諺みたいなものがあるんだ……。

「それで付与魔法についてだが、ざっぱに言ってしまえば『モノに自分の好きな機能を与える魔法』だ。

例えばここにある羽ペン、これには『インクを吸い上げ、中で保管する』という機能が付与されているし、外にある街灯には『太陽が沈んだ時、微弱な火属性魔法が発動する』という機能が付与されている」

スローアさんが手元の羽ペンを持ち、近くに置かれた黒インクの瓶の中にペン先を漬ける。するとインクはみるみるうちに嵩を減らし、遂には瓶の中から無くなってしまった。

「一見なんでもできそうに見える付与魔法だけど、勿論そんなことは無い。

物体にはそれぞれにマナの許容限界ってのがあって、このマナの許容量を超えて物体にマナを蓄積することは出来ないんだ。

そして付与ってのは、そのマナに自身が付与したい効果を乗せて物体に移すことで完成する。その時にどのくらいのマナが必要なのかはその効果毎に変わってくるが、まあぶっ飛んだ効果だとその分マナの必要量も変わってくる。例えばそうだね……この羽ペンに『人に当てるだけでその人を殺す』っていう効果を付与しようとすると、膨大なマナが必要になるわけだがそれだけのマナをこの羽ペンは許容できない。つまり付与が失敗するって訳さ」

スローアさんが羽ペンで図を描きながら分かりやすく僕に説明をしてくれる。僕はスローアさんの話を、必死に頭を働かせて把握しようと努める。

「さて、付与魔法についてはこんなところだが理解できたかい？」

「……恐らく？」

「なら私に簡単に説明してみな。付与魔法とは何なのか、そして欠点とは何かを」

スローアさんが図を描いた紙を裏にして伏せ、僕に見えないようにする。いきなりの無茶ぶりに一瞬焦ったけど、意地でも頭の回転を止めまいと思った僕は先ほどのスローアさんの言葉を出来るだけ簡単に頭の中で纏めて話すことにした。

「ええと……付与魔法とは全ての魔法の根底に位置する魔法で、『対象のモノに自分の望む効果を与える』というのが付与魔法の効果になっています。

しかしどんな効果でも付与できるわけじゃなく、そのモノが持つマナの許容限界に応じた分の効果しか与えることが出来ません。

望む効果の大きさ……僕はこれを『現実を改変する力』だと思っていますが、この大きさに応じてマナの必要量が変わってきます。

……こんな感じでどうですか？」

僕の説明を聞いたスローアさんは、腕を組んで少し考え込むような仕草をした。

「現実を改変する力……か。流れ人は随分と面白い表現を使うね」

「えっと……褒められてます？」

「ああ、褒めてるよ」

スローアさんはしゃがれた声でからからと笑う。そして僕の元へと歩み寄り、その鋭い眼差しで僕を見上げた。
「頭の回転が速いのは大変結構。だがまだマナ操作は初期の初期。一度難しいことを考えず、ひたすらにマナ操作の修業をして来い。そうだね……１０日後、またここに来な。毎日欠かさずに修行するんだよ、いいね？」
「は、はい……」
褒められたと思って嬉しくなっていたところで刺してくるスローアさんの眼は、今後僕のトラウマになること間違いなしだろう。なんてったって圧が凄い、「次に約束を破ったらお前を弟子には取らない」と目が語っている。
と言っても僕の疑問に丁寧に答えてくれたのもまた事実ではあるので、一回目の今回は見逃してくれたんだろう。僕はそんな優しさと丁寧に教えてくれたお礼の念を込めてスローアさんに頭を下げ、店を後にした。

第一章第１５話　【ぼくらのアゾット】

トラックに轢かれそうになったらこの世界に来ました。
そんな夢のような現象に見舞われてから、今日で１４日。日本で言うところの二週間が経過した。
灯火は魔法に関する授業を全て終え、最近は属性魔法の訓練も兼ねてダインさん同伴の元でクエストをこなし始めている。
対する僕は、スローアさんの言いつけ通り十日間きっちりとマナ操作の練習を続けた。睡眠と食事以外の時間は全てマナの操作に時間を当て、そんな生活を毎日続けた。正直思い返すと精神的にかなりキツい日々だったけど、それもこの世界で生きていく為と思えばなんてことは無かった。
そして、昨日がスローアさんから言われた十日目。僕はこの日まできっちりと練習を続け、今日という日を迎えた。今、僕はスローアさんの店の前に立っている。
「すぅー……はぁー……」
妙に緊張する。自分ではしっかりとやったつもりではあるけれど、もしも技量不足なんて言われたらどうしよう。そんな不安感で頭がいっぱいだった。
「……よし」
何度か深呼吸を繰り返し、覚悟が決まったところで店の扉を開く。中を見ると、奥のカウンターのところでスローアさんは待っていた。
「きっちり十日、守ったね」
「はい、クビになりたくはないので」
「殊勝な心掛けだ。で、成果はどうなんだい？」
スローアさんが僕のマナ操作の上達具合を見る為に目に少しだけマナを集める。するとスローアさんの眼の色が黒から紫へと変わった。
これは、授業の最初に先生が僕にやってくれたマナを視認する為の所作だ。眼にマナを集中させることで一時的にではあるが、マナを視認することが出来るようになる。勿論眼にマナを流し続ければ、その

間はずっとマナの視認が可能になる。
僕はこの十日間の成果を見せる為に、そしてスローアさんの弟子として認めて貰う為に、マナを集め始める。
目を閉じて視覚情報をシャットダウンし、大気中のマナをより感じやすくする。僕は属性魔法が使えない、そして適性がある『付与』『合成』『分離』の使い方を学んでいない為、この三つも使えない。要は現状僕は魔法そのものが一切使えないのだ。
ではマナの操作どころか、マナを体内に取り込むことすらできないんじゃないのか、と思うかもしれない。何なら僕だって最初はそう思った。
でも実際には、魔法が使えなくてもマナの操作自体は出来る。初日に先生がマナを僕に流すことで僕に操作の練習をさせてくれたが、あの時先生は何か魔法を使おうとはしていなかった。ということは、僕でもマナを大気中から取り込んで操作することは出来るってことだ。
先生にやり方を聞いて、出来るようになるまで三日かかった。半自動で取り込んでくれる魔法使いとは違うので、感覚を覚えるのにとても苦労した。
取り込んでから、マナを放出させないように身体の中に留めておけるようになるまで二日かかった。魔法の源にするわけではないので、行き場の無いマナは簡単に霧散してしまう。それを身体という器に閉じ込めておくのが大変だった。
そして、今実演しているみたいに体内を自由自在に動かせるようになるまでに五日かかった。最初の二つの過程をスキップ出来たらもっと練習に時間を費やせたのにと、この十日間で何度思ったか分からない。
でも、そんな壁も、苦難もすべて乗り越えて、僕は今こうしてマナを自由に操ることが出来るようになっている。最初にマナを取り込んだりそれを体内に閉じ込める動作を練習したからだろうか、よりマナという存在を近くに感じることが出来るようになれた気がする。

「……ふん、まあまあだね」
僕のマナ操作を一通り見たスローアさんが、吐き捨てるようにそう言った。その口元が心なしか笑っているように見えたのは、僕の気のせいだろうか？
「まあそれだけできれば合格だ。今日からは文字を覚えるのと付与魔法の指南を同時にやっていくから、心してかかりな」
「……はい、ありがとうございます！」
こうして僕の、魔道具師としての第一歩が踏み出された。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

とある日の昼下がり。俺はダインさんと一緒に『スライムボア』と呼ばれる魔物の討伐依頼をこなす為、街を出てすぐのところにある森、通称『はじまりの森』へとやってきた。
この世界には動物とは別種の生き物にカテゴリされる『魔物』という存在が確認されている。魔物とはマナが何かしらの理由で変化し、生物としての形を成すに至ったもののことらしい。その形状は様々で、確認されているだけでも２００は超える種類がいるとのこと。ちなみにこの魔物が発生する理由は未だに解明されていない。
俺たちが今回ターゲットにしているスライムボアは、猪のような見た目をした体長３ｍほどのゲル状の生命体だ。猪のように突進攻撃をメインに俺たち人間に襲い掛かってくる。
そして突進時に巻き込んだ生物を体内に取り込み、強力な融解力で時間を掛けて骨ごと溶かして食べてしまう。そんな恐ろしい生物だ。
倒す為には『核』と呼ばれるマナが結晶化した物質を破壊するか、身体から引き抜くことで身体の形状を保つことが出来なくなり死滅す

る。しかしこの図体のデカさのせいで刃が核まで届かず、また体内に非常に強力な融解力を保持している為、簡単には討伐できない。初心者が最初にぶつかる壁となる魔物だと言われている。
「相手の動きに合わせて剣を振れ。奴は動きこそ早いがその分カーブが出来ない。単調な動きのパターンを見極めて、隙を突け」
　というダインさんのアドバイスを基に、まずは慎重にスライムボアの動きを観察する。スライムボアは俺を見つけると、猛り狂ったように地面を蹴り上げ突っ込んできた。その姿は読んで字の如く『猪突猛進』、俺を餌として喰らう為にそのバカでかい巨体が迫りくる。地球ではまずあり得ないサイズから来る威圧感と恐怖感が、ほんの一瞬俺の身体を縛り付けた。
「――――っ！」
　恐怖で竦む身体に鞭を打って、無理矢理横に飛ぶ。スライムボアは俺の居た場所を通過し、後ろにあった木を何本かなぎ倒して漸くその巨体を止めた。
　ゆっくりと俺の方へと身体を向ける魔物。身体と同じくゲル状の物質で出来た半透明の眼が、再び俺を捉える。
　落ち着け。見た目は気持ち悪ぃし殺意は今まで戦ってきたどんなファイターよりも強いけど、だからって勝てないと思うな。
　身体がでかいからなんだ。見た目がキモいからなんだ。スピードが速いからなんだ。俺は――――
「俺は、こんなところで立ち止まってる暇はないんだよ！」
　スライムボアが走り出すよりも早く、地面を蹴って敵へと迫る。背中に背負った、ダヤンさんが選んでくれた長剣を引き抜き、振り向きざまのスライムボアの顔目掛けて上段から一気に振り下ろす。
「ブモオオオオオオオオ!!!」
　鼻を形作っていたスライムの塊がぼとりと地面に落ちる。スライムボアの身体は想像以上に柔らかく、豆腐でも切っているかのような感覚だった。
　顔を斬られたことでよりキレたのか、スライムボアは俺をその体躯で押しつぶそうと、前足を上げて思い切り倒れこんで来た。

俺はその攻撃を見切り、隙だらけの脇腹へと猛ダッシュを仕掛ける。スライムボアの核は身体の真ん中あたり、丁度腹の中心に位置する場所に浮いている。これを取り除くためには周りのスライムを地道に斬って剥がしていくしかない。

轟音と共に地面に倒れるスライムボアの腹に刃を突き立て、ほじくり出すようにしてスライムを切り取っていく。体重全てを預けた攻撃をかましてしまったせいで未だに立ち上がれていないスライムボアは、立つことを諦め転がることで俺を体内に取り込もうとしてきた。

身体を斬りつけながらもスライムボアの動向に気を配っていたおかげで、転がり攻撃も難なく避けた俺は再び身体を削ぎ取る作業を再開。背を地面につける形になってしまったスライムボアは、俺の攻撃に両足をじたばたさせて抵抗の意を示すが、その足は空を蹴るばかりで俺の作業には何の影響もなかった。

こうして見ていると先ほどまであった恐怖心はどこへやら、今はただの動物程度にしか見えなくなってしまった。何ならこうしてもがいている姿はちょっとかわいいとさえ思えてくる。

そして数分かけて身体から核を摘出。その瞬間、スライムボアは猪の形を保てなくなりバシャッ、と音を立てて崩れ落ちた。地面に残るのは、スライムボアの身体を形成していたスライムのみ。そのスライムは、核が無いためもう動くことは無い。

倒したスライムボアの核を満足そうに見つめていると、俺の頭目掛けて拳骨が降ってきた。

「痛ってぇ?!!」

痛む頭を押さえて振り向くと、握り拳を作ったダインさんがそこに立っていた。

「まず一つ、スライムボアが仰向けになったときに気を抜いたこと。いくら相手が見た目抵抗する術を持っていないとしても、自分の知ら

ない未知の攻撃手段がある可能性だってある。最後まで油断するなと再三にわたって教えたはずだ」
「……すいません」
「次に、倒れこんで来たスライムボアに対する攻撃が長すぎる。向こうが転がるという選択肢を取ったから何とかなったが、もし別の行動を取られていたらお前が危険にさらされていた可能性だってある。」
「……はい」
「何度も言うが、人は簡単に死ぬ。お前はまだ死を感じ取れていない。まだ動きに甘さが残っている。
死を覚悟するだけではだめだ。死を覚悟し、死を恐れろ。そのうえでそれを乗り越え、勝利を掴み取れ。いいな」
ダインさんは厳しい。これだけ大きな魔物を傷一つなく倒したというのに、それを褒める前に問題点を指摘する。普段の修業でも、俺の問題点をこれでもかと列挙してくる。
「……よくやった」
でも、褒めるところはこうしてしっかりと褒めてくれる。少し照れくさそうに、ぶっきらぼうに俺の頭を撫でると、ダインさんは踵を返して街へと戻っていく。
「ありがとうございます！」
だから俺も、そんなダインさんの背中を追って、街へと戻っていった。

第一章第１５．５話　【ロイハの苦悩は空へと舞う】

陽向たちがこの街に来てから7日が経過した日のこと――

ロイハの執務室の扉が三度、ノックされる。

「入って」

手元の書類から一切目を逸らすことなく言うロイハ。ガチャリとドアが開く音がしても尚、ロイハはそちらに視線を向けない。

「ロイハ支部長、先日の『はじまりの森』の調査結果に関しまして、結果が出ましたのでご報告させて頂きます」

部屋に入ってきたのは、男。ペスト医師のような嘴の尖ったマスクを被り、全身を黒のローブで包んでいる為一切の特徴は分からないが、その声色から男だと言うことだけは分かる。

彼がこうしてマスクを付け、素性を隠している理由をロイハは知っている。それは彼はロイハお抱えの調査部隊『コリンツォ』の一員であり、陽向と灯火という二人の流れ人の動向の監視、及び身辺調査を任された人物のうちの一人だからだ。

「聞かせて」

「まず森の原っぱについてですが、我々が二日かけて隈なく捜査した結果そのような場所を発見することは出来ませんでした」

「でしょうね」

これはロイハの中でも分かりきっていたことだった。あの森に原っぱなど存在しない、それは２０年以上この街のギルドで勤め続けたロイハが一番よく知っていることだから。

「ですが、『はじまりの森でクリミナルベアの死骸を見た』という情報があります。そして、『キゼモナスの帰還』も……」

「……」

クリミナルベアは、本来であればはじまりの森に生息するはずの無い、凶暴な魔物である。本来であればタラハットよりもずっと西にある山『シャドウマウンテン』にてその生息が確認されている魔物で、間違ってもはじまりの森で観測される魔物ではない。

陽向たちがこの世界に飛ばされたあの日、長らくどこかへと旅立っ

ていた厄災龍キゼモナスが住処である厄災の降る地へと帰ってきたという情報がロイハの元に舞い込んできたのは、ほんの三日前のことだ。キゼモナスは自身の姿を隠した状態で移動することができる。故に旅立った時もいつの間に旅立ったのか分からず、以来コリンツォの一部部隊を厄災の降る地に常駐させなければいけなくなってしまった。

そんな状態で、キゼモナスが帰ってきた。いつ、どのタイミングで降り立ったのかは定かではない。調査部隊が気づいたときに、キゼモナスは既に寝床で気持ちよさそうにいびきをかいていた。

「あの二人がキゼモナスとどんな繋がりがあるのかは分からない。でも現状を鑑みるに、何かあるのは間違いないはずよ」

目の前の書類に判を押して漸くペストマスクの男性の方を向くロイハ。眉をひそめ、鋭い眼光でペストマスクを睨む。

常人ならそれだけでちびりそうな程の眼光に晒されながら、ペストマスクは一切怖気づくことなく言葉を続ける。

「では、我々は引き続き二人の動向の監視に戻ります」

「何かあったらすぐに戻ってくるように」

「畏まりました」

そう言うと、ペストマスクは静かに部屋から出ていった。

残されたロイハは背もたれに体重を預け、疲れたように天井を仰ぎ見る。

「はぁ～……厄介事の嵐だ」

独り言ちるロイハの言葉は、誰に届くこともなく宙に霧散していった。

第一章ＥＸ　【とある修行の最中、陽向と灯火の会話編】

「……灯火、出来た？」
「……いやだめだ。」
太陽が顔を出してから少ししてのこと。まだお昼前だというのに、僕と灯火は現在外にも出ずに部屋の中にいる。
その理由は明白。互いにマナ操作の特訓をしているからだ。
灯火は属性魔法が扱えるため、僕よりも先に『体内に集めたマナをより早く循環させ、自分の属性に染色する』という特訓を行っている。
対する僕は、『マナを体内に閉じ込めておく』という内容の特訓。僕は属性魔法が扱えないから、マナを集めて体内に留めておく、という動作が自動化出来ない。だからこうして、集めるところから自力でやらなければいけない分灯火より進みが遅い。
だから今の時間は、僕が操るマナの様子を外から見て貰っている。
「まだ一部が身体から漏れ出てる。昨日よりは大分ましになったけど、まだ抑え込めてないな」
「そっか……」
「んじゃ次、俺行くぞ」
「おっけ」
続いて、灯火のマナ操作を僕が見る。眼に微量のマナを集めてマナを捉えられるようにし、灯火の身体へと視線を移す。
灯火が人差し指を立てると、空気中のマナが灯火の元へと集まっていく。徐々に徐々に増えるマナは灯火の身体で一つに纏まり、そして灯火の身体を流れていく。何周も、何周も。
やがて周っていくうち、灯火の身体の中でマナの色が紫から青に変わっていく。そしてそのマナは灯火の立てられた指先へと向かっていき、弾けた。
「はぁ、はぁ……どう？」
「体感前と変わってない。多分１２秒くらい？」

「っか～！　それじゃダメだな、全っ然だめだ！」
顔に滲んだ脂汗を雑に袖で拭い、藁のベッドに身体を投げ出す灯火。僕と同じように、灯火もダインさんから課題を貰っている。
灯火に課せられた課題は『魔法発動までの時間を、遅くても５秒以内に収めること』らしい。
この５秒とはとても重要な時間で、戦闘において盾役が一切の無理なく、そして咄嗟に言われて持ちこたえられる時間らしい。それ以上の時間を掛けるとその分パーティメンバーが全滅するリスクが上がっていくんだとか。
「先生も言ってたじゃん、『数撃って慣れるしかない』って」
「……だな。まだ始まって四日目だもんな」
そうして僕らは、また同じように互いに確認しあいながらマナ操作の研鑽を重ねていく。

特訓は、その日の夜まで続いた。
「俺もうベッドから起き上がれねーわ」
「同じく」
僕と灯火は、互いにベッドに全体重を預け、天井を仰ぎ見る姿勢であっぽん口を開けていた。
マナを操作するという作業は、予想以上に疲労感が溜まる。慣れない作業だからだろうか、かつ使ったことの無いような神経を使っているような気がして、朝から晩までぶっ通しでやった今日みたいな日にはもうその後は何もしたくなくなるくらいには疲労感に苛まれる。
「飯と湯浴みー……はいいや。今日は別に剣振ったわけでもねぇし。起き上がる気力がそもそも無ぇ」
「同じく……」

喉にご飯を通すことすらやりたくなるほどの倦怠感が僕たちを襲っている今、僕らに出来ることはこうして寝ることだけだ。
「陽向～」
「何～？」
「しりとり」
「……りんご」
唐突に始まった僕と灯火のしりとり大会。ここにはゲームのような娯楽がない為、遊ぼうとすると身体を使うか頭を使うかの二択になる。
そして僕らは今、その両方を使いたくない。そんな時に選ばれた遊びが、『しりとり』だった。
「……ねこ」
「こあら」
「ら、ら、……ランゲルハンス島」
「何それ」
「膵臓の内分泌腺」
「どこで覚えたんだよそんなん」
「何だっけ……確かテレビでやってた救命〇急２４時だった気がする」
「へー」
「次『う』だよ」
「う、う、……うんこ」
「もっとマシなの無かったの？」
「うるせーな今頭の中空っぽなんだよ」
「僕だってそうだよ」
「頭空っぽな奴の語彙にランゲルハンス島があってたまるか」
「あります～」
余りにも他愛もなさすぎる会話。普段だったら絶対しないような会話だが、それだけ僕らの脳は疲れていた。
この後もどうでもよすぎるしりとり大会は続き、最終的には僕の『め』攻めに対応しきれなかった灯火がふて寝するという結果で幕を

閉じた。

第二章　冒険者らしく旅に出ようと思います

第二章第０話　【進む君と、止まった僕の】

僕と灯火はこの世界で師匠と呼べる存在に出逢い、遂に新たな生活が幕を開ける。

――なんていうことは無く、特に代わり映えすることの無い生活が今日も幕を開けた。

日が昇るよりも早く起きてロードワークに行く灯火、日が昇ってから起きて朝食までの間はマナ操作の練習をする僕。

朝食を食べ、灯火はダインさんと一緒に依頼をこなしに行き僕はスローアさんが経営するお店に行く。

修業と同時に依頼をこなしていく灯火と、修業の傍らでお店の手伝い（というよりバイト）をする僕。

そんな仕事と修業を両立させるような日々が、暫くの間続いてた。

それに変化が起きたのは、この世界に僕らが来てから６０日くらいが経った時のこと。

灯火が一人でも依頼をこなしに行くようになった。

ダインさんに聞いてみたところ、「そろそろ独り立ちしても十分だろう」とのこと。実のところ、２０日ほど前の時点でダインさんはクエストに同行するだけで依頼内容は灯火一人でこなしていたらしい。

この時、僕は灯火の凄さを、センスの高さ、努力を怠らないことで身に着いた結果を改めて知った。

と同時に、自分自身の不甲斐なさを思い知らされた。

僕は未だに、代わり映えしない生活を送り続けている。

朝起きてマナ操作と『付与』『分離』『合成』の練習をし、朝ご飯を食べてからスローアさんのお店に行く。お店を手伝い、日が暮れたら修業を始める。

灯火はこうして結果を出し、どんどんと先に進んでいるにも関わらず僕は漸く『付与』『分離』『合成』の基礎を身に着けることが出来たくらい。独り立ちの兆しは全く見えてこない。

僕が止まっている間に、灯火はどんどん先に進んでいく。

数多の依頼をこなし、実力をつけ、タラハットの中でも徐々に頭角を現していった。

そして約半年が経つ頃には、灯火はタラハット内でも1、2を争う程の実力の持ち主へと成長していた。

僕は半年経っても、初級魔道具師程度の技術しか身に付けられていないのに。

勿論、冒険者と魔道具師では覚えることの量が違うということは分かっているけど、身近でこうして頑張って結果を出している人がいるとそりゃあ焦る。

先天的なセンスに差があることだって分かっている、僕にセンスが無いことも分かってる、灯火は僕の何倍も努力していることだって分かってるそもそも僕と灯火を比べること自体がおこがましいことだって言うことだって全部ちゃんとわかってる

でも、でもこれじゃあ……

「灯火の影にすら、なれないじゃないか」

第二章第1話　【あれから半年】

僕らがこの世界『ピラマ』に不慮の事故でやってくる羽目になってから、今日で約半年が経った。

初めの頃は右も左も分からず、この世界での居場所を作る為に、そして生き抜く為に精一杯だったけど、流石に半年も経てばここでの生活にも大分慣れてきた。

「おーヒナタ、今日もスローアさんとこか？」

「はい！　今日はやっと新しい付与に挑戦させて貰えるようになったんです！」

「よかったじゃねえか。がんばんだぞ！」

「ありがとうございます！」

最初は僕たち流れ人に対してあまりいい印象を抱いていなかったであろうタラハットの人たちも、今では大分友好的に接してくれるようになった。

それもこれも、灯火の活躍あってこそだろう。

灯火は今や、この街でも1、2を争う程に強い冒険者に成長していた。こなした依頼は半年で４００を超え、灯火への指名依頼すらも最近ではよく来ている。４種類の属性魔法を巧みに織り交ぜた剣と魔法の融合戦術は、灯火のアドリブ力が成せる強さと華やかさを孕んだ剣技に昇華していた。

そして何よりも、灯火の人当たりの良さもあるだろう。灯火はその明るい性格とコミュニケーション能力の高さから冒険者の知り合いをどんどん増やし、更にはこの街に暮らす人とも交友の輪を広げていった。

そんな灯火は今、タラハットの冒険者仲間と一緒に遠出のクエストをこなしている最中。出発したのが3日前なので、早くてもあと7日は帰ってこないだろう。

対する僕はといえば、半年前と何も変わってはいない。

この世界の文字を覚えることは出来たし、魔道具師として覚えたことは確かに増えた。この街での交友関係も多少なりとも広がりはしたが、灯火のような目まぐるしい活躍は出来ていない。
「まだまだ頑張りが足りないよなぁ……」
スローアさんの店までの道すがら、独り言ちる。灯火と比べてしまうと、どうしても自分自身の能力の低さが目立ってしまう。灯火は『俺には付与とかできないし、適材適所だろ』とは言ってくれるけど、やっぱり気にはなる。
灯火の相棒として、しっかりと灯火を支えていけるような魔道具師になる為に今以上に頑張らないと……！
半年経った今日立てられた新たな目標を胸に、スローアさんの店の扉を開く。
「おはようございます」
相変わらず、この店は薄暗い。外や各家庭、ひいては宿にすら置いてあるランプがこの店には無く、太陽光だけがこの店を照らす唯一の光だからだ。
以前スローアさんに何故ランプを設置しないのか聞いてみたら、『あれを使うとマナが減る』と言われてしまったのでそれ以上は何も言えなかった。
そんな薄暗い店内を奥に向かって進むと、今では顔なじみになった一人の女性が僕を迎えてくれる。
「あ、ヒナタ君おはよう」
「ルチルさん、おはようございます」
この女性は、スローアさんのお孫さんにあたるルチルさん。緋色の美しい長い髪に、すらりとしたモデルのような体型の彼女は、僕と同じ歳なのにこの店の経理を全て担当しているとても凄い方。
魔道具師ではないけれど、付与関係の知識も豊富で僕の付与の修業の際はよくサポートして貰っている。そしてこの世界の文字を僕に教えてくれたのもルチルさんだ。同世代でありながら、ルチルさんには尊敬の念を幾ら抱いても足りない。
「スローアさんはまだ付与中ですか？」

「うん。昨日ヒナタ君が帰ってからずっと作業しっぱなしで……正直心配なんだよね」
　昨日の夜、日課になった僕の修業の後からスローアさんは付与専用の部屋に閉じこもってしまった。ルチルさんの話だと寝た様子も無く、夜通しでずっと何かの付与をしているらしい。
「付与中はマナが散るから扉を開けるな、って言われてるから中の様子も見れないし……一応部屋の中のマナは動いてるから生きてはいるんだろうけどね」
「それだけ大規模な付与をしてるんですかね……」
　スローアさんもかなりいいお歳だからあんまり無理をしてほしくない、って言うのが個人的な心情ではあるんだけど、僕のレベルがまだスローアさんの足元にも及んでいない以上、この店の魔道具の供給はスローアさんにしかできない。
　こうして見守ることしか出来ない自分に歯噛みしてしまう。灯火のように才能があれば、僕も今頃は……
「まあ、お婆ちゃんだし大丈夫でしょ」
　ルチルさんが僕の頭に手を置いて、優しく撫でる。僕よりも身長が高いせいか、ルチルさんは僕のことを時折弟のように扱ってくる。急にそんなことをされて一瞬呆けてしまうが、悔しさが表情に出ていたんだと気づいて一気に恥ずかしさが込み上げてきた。
「もう！　僕とルチルさんは同い年なんですから、こうやって子ども扱いするのはやめてください!!」
　ルチルさんの手を払いのけて抗議する。ルチルさんはからからと笑うと、カウンターに頬杖をついて僕の顔を見上げるように覗き見る。
「大方『トウカはあんなに凄いのに僕は～』とか考えてたんでしょ。
　大丈夫だよヒナタ君。君は君自身が思っている以上に努力してるし、その分の結果もちゃんとついてきてる。一番近くで見てきた私が保障してあげる」
　シャープに尖ったアーモンドのような目が僕の目を捉える。流し目で上目遣いという、世の男性ならきっとどきっとするような仕草に

も関わらず僕の心は一切ときめかない。
「ありがとうございます、ルチルさん」
　その理由は、ルチルさんは僕の師匠であり姉のように思っている為今更女性としては見れないから。そもそもルチルさん自身、僕を弟のように見ている為そんな男女の関係になるはずがない。
「ヒナタ君はつまんないなぁ。私これでも結構モテるんだけど？」
「ルチルさんだってその気がないでしょ？　僕が今ルチルさんに襲い掛かったら、普通に引くくせに」
「腹殴り飛ばして立場を分からせるね」
「やらないんで勘弁してください」
　確かにルチルさんはモテる。このお店にも、ルチルさんと話す為にここでわざわざ魔道具を買っていく冒険者までいる程だ。ただその冒険者からのアプローチが成功した例はこの半年近くで一度も無いけど。

「はあぁ～……やっと終わった」
　お店を開けてから少しして、スローアさんが専用部屋から出てきた。大きな伸びをして眠そうに目を擦る。
「お疲れ様です、スローアさん」
「あ？　ヒナタあんた帰ってなかったのかい？」
「お婆ちゃん、外見てみなさい外を」
　僕の顔を見て驚くスローアさんに対して、ルチルさんが呆れながら窓の外を指差す。それにつられて窓の方へと視線を向けたスローアさんは、眩しそうに手の甲で目に影を作って光を遮った。
「時間が経つのは早いね」
「歳考えなさいよ、また無茶して今度は何作ったの？」
　腰に手を当ててスローアさんに詰め寄るルチルさんに対して、スローアさんは眠そうに答える。
「別に大したもんじゃないよ」

そう言うと、スローアさんは自室へと潜っていってしまった。
「何あれ」
「まあまあ、スローアさんも長時間の付与でお疲れなんだと思いますから、そう怒らずに……」
「分かってるわよ」
そう言うルチルさんの顔は、明らかに怒っていた。ただこの怒りはぞんざいな扱いをされたことにではなく、スローアさんの身を案じているからこそになんだと分かる。
「家族愛ですね」
「……うっさいわね」
さっきの仕返しとばかりににやにやと笑みを浮かべながら言うと、照れ隠しとばかりに頭を小突かれてしまう。いいね、家族愛。

第二章第2話　【緋色のマドンナ】

スローアさんが寝たとしても、このお店は普通に営業を始める。というのも基本的にこのお店はルチルさんが切り盛りしているので、スローアさんが表に出ること自体が珍しいからだ。

「おうヒナタ、調子はどうだ？」

「レブルさんおはようございます。これから依頼ですか？」

筋骨隆々で背中に巨大なバトルアックスを背負ったこの人はレブルさん。ルチルさん目当てでこのお店に通い詰めている男性の一人で、僕が働き始めた当初はかなり毛嫌いされていたけど最近ではたまに一緒にご飯を食べに行くくらいには仲良くなることが出来た冒険者の先輩。

「おう、今日は仲間と一緒にモンスターブックの討伐に行くことになってな」

モンスターブックとは、タラハットから太陽の昇る方へと歩いて三日ほどのところにある洞窟『魔導士の隠れ家』にいる本の形をした魔物のことだ。

『ブック』と名前にある通り火に弱く、冒険者は魔導士の隠れ家に行く際には火属性の適性を持った仲間を連れていくか火を扱える魔道具を持っていくことが常識とされている。

「ということは、『バーナ』ですか？」

バーナとは、マナを媒体に炎を発生させることが出来る魔道具のことで、地球で言うところの火炎放射器に似た用途で使われる。

見た目は一本の杖で、勢いよくこの杖を振ることで火の玉を前方に飛ばすことが出来る。威力は大して大きくは無く普通に魔物に使えばダメージの足しにもならないが、モンスターブックを倒す為ならこれで十分な威力になる。

「いや、今日は仲間がいるからそっちはいらないんだ。丁度ポーションが切れててな、そっちを買いに来たんだ」

ポーションとはこの世界に存在する不思議な赤い液体の名前。これも魔道具の一種ではあるけれど、用途はＲＰＧでよく出てくるポー

ションと同じで飲むと疲れが取れるという強力な滋養強壮効果がある。そしてもう一つの特徴として、傷口にこのポーションをかけるとその傷が即座に治るという効果も持ち合わせている。
「ポーションですね、分かりました」
レブルさんの注文を受けた僕は奥の棚から5本ポーションを持ってくると、レブルさんの前に並べて見せた。
「魔導士の隠れ家でしたらこれくらいあれば十分だとは思いますが……もう少しいりますか？」
「いや、丁度いい。毎度助かるわ」
ポーション5本を受け取ったレブルさんが代わりに銀貨１０枚をカウンターに置く。僕がそれを脇の小箱に片づけていると、レブルさんがそわそわと店内を見回し始めた。
買い物が終わったのに何を探しているのかは言うまでもない。依頼前に緊張していないのは良いことではあるが、少しだけ呆れながら僕はレブルさんの探し物の在処を教えてあげることにした。
「ルチルさんなら今は休憩中ですよ」
「ええ、開店前なのに!?」
「スローアさんが夜通しで付与魔法を使っていてお疲れなので、寝る前にご飯だけでも食べて貰おうと料理中です」
「そっか……」
あからさまにがっくりと肩を落としたレブルさんは、そのままお店を出ていった。
それと入れ違いになる形で、ルチルさんが店の奥から顔を出す。
「悪いね、店開けたばっかりなのに任せきりにしちゃって」
「いえ、気にしないでください。それよりもスローアさんの様子は大丈夫そうですか？」
僕が聞くと、ルチルさんは肩を竦めながら呆れ顔で答える。
「元気も元気よ。私が作った朝ご飯残さず平らげてそのまま寝てやんの。心配したのが馬鹿みたいだわ」
「あはは……」
流石にこれは苦笑いでしか返せない。にしても夜通しの付与って、

本当にスローアさんは何を作っていたんだろうか？
「多分あの調子なら店閉めるころくらいには起きてくると思うから、修業の方は心配しなくて大丈夫よ」
「いえ、今日は自主練習にしておきます。夜通しで頑張っていたスローアさんに無理はさせたくないですし」
「う～ん……まあそこら辺はお婆ちゃんが起きてきてから話し合ったらいいんじゃない？」

そこからは僕とルチルさんで適当に雑談し、お客さんが来たら対応をする。その繰り返しで一日が過ぎていった。
「よし、今日は終わりかな」
太陽が沈みかけ、夕焼けが街を彩ってきたころにルチルさんが大きく伸びをしながら言う。僕はお店の掃除をする為に掃除機のようにゴミを吸ってくれる魔道具を置くから引っ張り出してそれにマナを注ぐ。
マナに反応して魔道具がウィーンと唸り声をあげ、今日一日の汚れを吸い取っていく。
こうして見ていると、本当にただのコードレスクリーナーにしか見えない。素材は勿論プラスチックではなくマナを通しやすい合金でできている為取り回しはかなり悪いが、性能で言えばほぼ変わらない。
「科学じゃなくて魔法が発展した世界、か……」
魔道具の音で僕の呟きが誰かに届くことはない。半年経ってこの世界にもかなり慣れてきたとは思うけれど、未だに地球とのギャップを感じる時は多い。
特に顕著なのは、『人の命の重さ』。この世界は地球に比べて人の命、特に冒険者の命が軽い。別に街中で殺人が横行していて、それを良しとされているとかそんなことは無い。でも冒険者で誰かが死んだりするのは日常茶飯事だし、ギルドでは盗賊の討伐依頼などもたま

に見られる。
そこに関して、僕は未だに慣れない。知り合いが死ねば悲しいし、そう簡単に気持ちを切り替えることだって出来ない。
そして何よりも、灯火もそうした命のやり取りを魔物や動物だけではなく、盗賊のような人間相手にもやっているということを僕は受け入れられていない。勿論それじゃいけないのは自分が一番よく分かっている。やらなきゃやられるし、仕方の無いことだっていうのも頭では分かっているけど、そこに感情が追い付いてくれない。
「……」
それに、お金も貯まってきてそろそろ頃合いもよくなる。灯火が帰ってきたときには、僕たちは地球に帰る為の方法を探すべく次のステップに進まなければいけなくなるだろう。灯火と一緒に旅に出た時、僕は灯火が人を殺すところを目の前で見ることになるかもしれない。そんな灯火の姿を、僕は受け入れることが出来るんだろうか……？
「――ナタ君、ヒナタ君。ねえヒナタ君聞いてる？」
考え事をしていた僕の意識が、急に現実に引き戻される。声のする方に視線を向けると、ルチルさんが心配そうに僕の顔を見ていた。
「……あ、ごめんなさい。少し考え事をしていて」
「大丈夫？　もう帰った方がいいんじゃ……」
「いえいえ、体長は万全ですから！」
力こぶを作って元気をアピールするが、ルチルさんの表情は晴れない。
「本当に大丈夫ですよ。少しだけ故郷のことを考えていただけです」
「地球……だっけ。どんなところなの？」
ルチルさんが不意にそんなことを聞いてきた。
「どんなところ、そうですね……あ、地球には魔法が無いんです」
「魔法ないの!?　じゃあどうやって生活してるの？」
「魔法の代わりに科学っていうものがあって……」
そこから僕は、掃除をする手を止めて地球についての様々な話をルチルさんに話した。今まで特に聞かれたこともなかったから話す機

会も無かったし、地球について話すの自体なんか新鮮だ。

「で、あんたら掃除は終わったのかい？」

結局、僕らの雑談はスローアさんに叱られるまでずっと続いた。その日の修業がいつにも増してきつかったことは、言うまでもないだろう。

第二章第３話　【目的を忘れるなかれ】

僕の一日は、基本的に固定化されている。
朝起きてスローアさんのお店に行き、閉店までバイト。その後月が顔を出すまでの間はスローアさんの指導。終わったら宿に戻り、灯火と一緒にご飯を食べて眠る。お店が休みの日は一日中スローアさんからの特別指導と称して、超スパルタの魔道具師としての訓練が行われる。
そんな日々を半年間続けてきたが、遂に今日そのルーティーンが破られる。
「８、９、１０……。うん、大分溜まってきたね」
灯火が遠出の依頼から帰ってきた日の夜、僕らはこの半年間で貯めこんだお金の総量を確認する。
これから、この世界で新たな一歩を踏み出す為に。
「そろそろ動き出すか？」
僕らの目的は、決してこの世界で有名になることじゃない。地球に帰ること、それが僕らの最終的な目標で、今日までこうして生活基盤を整えたり力を付けたりしたのはこの世界で動きやすくする為のものだ。
「……そうだね。これだけ資金も集まれば、旅に出ても暫くは苦労しないと思う」
目の前には金貨が１０枚、銀貨が２２枚と銅貨が何枚か。これだけあれば依頼をこなさなくても、半年近くは余裕で暮らしていける。
「それなら何処へ向かう。西か？　それとも東？」
「その前に、一度今日までの間で集めた情報を精査しよう」
この先向かう方向を決める為、そして二人で考えることで新たな可能性を発見できるかもしれないと、僕たちは改めて今日までの間に手に入れた情報をお互いに話し合うことにした。

「……で、なんの発見も無しか」
「だね……」
　話し合うこと数時間、結局新しい情報も発見も僕らの会話から見出すことは出来なかった。
『一番最初にこの世界に来た流れ人がもしかしたら地球への帰り方を知っているかもしれない』、これくらいしかまともな情報無かったな」
　この街がそもそも流れ人をあまり好いていないことが相まって、流れ人が何処に多く住んでいるかとかはよく聞けたけど地球への帰り方に関する有用な情報を入れることは出来なかった。
「もう少しここで粘ってみるか？　それとも新しい街に移動するか？」
「……多分、まだ仕入れていないような情報はあると思う。でも、それを仕入れるのは僕らの能力じゃ難しいだろうし、それの為にここに居続けるのも正直悪手な気がする」
「……」
　灯火はベッドに腰を掛けて手を後ろに置き、その手に体重を預けるようにして座っている。顔だけをこちらに向けて何か言いたげに僕を見るが、僕は灯火の視線に耐え切れずにふい、と目を逸らしてしまう。
「明日は早いうちから次にどこに行くのかを検討しなきゃだし、今日はもう寝よう」
　これ以上何か言われる前に、毛布を被って狸寝入りを決め込む。その間も灯火の視線を毛布越しにひしひしと感じるが、気づいていないふりをした。
「……そうだな」
　暫くして、灯火も眠りにつく。灯火が何を言おうとしていたのかは何となく分かるけど、その言葉は僕の為になっても灯火の為にはならない。

（ごめんね、灯火）
謝罪の言葉を胸に留め、僕は本格的に眠りにつくことにした。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

夢を見た。
霧で覆われた世界。何もない草原の真ん中で、誰かがしゃがんですすり泣く夢。
近づいて声を掛けてみると、それは小さな女の子だった。
「どうしたの？」
僕がそう問いかけると、女の子は涙を服の袖で拭いしゃくり上げながらも言葉を繋ぐ。
「あの、ね……いたいの……」
「痛い？　どこか怪我でもしたの？」
「……とっ、っても、いた、いたい、の」
「そっか……うーんと、よしよし、もう大丈夫だからね」
僕はその女の子の頭を優しく撫でる。女の子はまたもおんおんと泣き出した。
「お母さんは？」
「……いる、けどあ、いた……あいた、くないの」
「お母さんと喧嘩しちゃったの？」
「けん、か……」
僕の問いかけに、女の子はふるふると首を横に振る。
「おにいちゃん、たすけて……」
涙目で僕を見上げる女の子。
「助けてか……うーん困ったなぁ」

助けてって言われても、原因が分からないからなぁ……。
「取り敢えず、お兄ちゃんと一緒にお母さんのところに行こ？　ね？」

「……だめ」
「え？」
「それはだめ」
瞬間、女の子の顔からすっと表情が抜け落ちた。
「お母さんのところは駄目。お母さんのところに行ったら、お兄ちゃんたちも変えられる」
「え、どうしたの？　変えられるって何のこと？」
女の子はすっと立ち上がると、僕から遠ざかるように歩き出した。
「ちょ、ちょっと待って！」
追いかけようと立ち上がろうとするが、何故か身体が中腰のまま動かない。
「お兄ちゃんたち、騙されないで。嘘に、偽りに」
振り返り、ぽつりと真顔で言う少女。そこに先ほどまでの泣きじゃくっていた子どもらしさは欠片も残っていない。
「気を付けてね、お兄ちゃんたち」
そう言うと、女の子は霧の向こうに消えて行った。

第二章第４話　【明日の旅路】

「……待って！」
　草原だったはずの眼前の風景が、見慣れた天井になった。
「夢……だったのかな」
　思い返せば、幻想的な光景ではあった。霧に包まれた草原、そこにいる僕と謎の女の子。
「……草原？」
　そういえば、僕らが初めてこの世界に来たのも草原だった。灯火によると、僕らがいた草原はあの森の中には無いらしい。それなら僕らがいた草原は何なのという話にはなるけど、実際に僕も灯火と一緒に森に入って隅々まで歩いたけど見つけられなかったので、無いものは無いんだろう。
　でも、僕たちが居た場所は草原、夢で居た場所も草原とあれば、少なからずの関係を考えてしまいたくなる。
「……ちょっと待てって！」
　夢の内容について僕が考えていると、隣で寝ていた灯火が手を伸ばしながら大声を上げて飛び起きた。
「……灯火？」
「え？　あ……夢か」
　どうやら灯火も夢を見ていたらしい。でも今「待て」って言ってたけど、もしかして……？
「ねえ灯火、もしかして灯火が今見てた夢って、霧がかかった草原で女の子が泣いてなかった？」
「……何でわかるんだよ」
　訝しそうな目で僕を見る灯火。もしかしなくても、灯火引いてるな。
「僕が見た夢がそれだったんだよ」
「陽向も同じ夢を見たのか？
　……偶然、で片づけていいのか悩むな」
「偶然は無理あると思うけど……」

念のため灯火が見た夢について尋ねてみたが、やっぱり僕が見たものと全く同じ内容だった。
「あの夢、僕らに何を伝えたかったんだろ……」
僕らが同じタイミングで、同じ夢を見たということはきっとあの夢には何かがある。あの女の子が言っていた言葉を、僕らはもう一度思い出してみることにした。
「確か、女の子は草原の真ん中で泣いていた。痛い痛いって言いながら、うずくまって」
「うん。だから僕は、お母さんのところに行こうって提案してみたんだ。そしたら女の子が急に立ち上がって、人が変わったみたいに頑なにそれを拒否した」
「ああ。んで最後に言った言葉が……」

騙されないで。嘘に、偽りに

「騙されないで、ってまあそりゃあ嘘偽りには騙されない方がいいのは事実ではある。が」
「状況的にもっと深い意味がありそうだよね」
一体誰が僕らにメッセージを伝えたいのか分からないけど、これが言いたいだけなら直に会って言えばいい。それでもわざわざ夢という伝達方法を取ってきたってことは、そうしなければいけない理由があったということだ。
「現実的に僕らと会えない状況にある……とか？」
「囚われの身で、俺たちがまだ知らない何らかの方法、あるいは魔法を使って俺たちにメッセージを伝えたと。
普通にありそうな話なのが困るんだよな……」
半年近くピラマで暮らして尚、この世界は謎が多い。僕らにとっては未知の技術や生物が、この世界にはごまんと存在している。だから今回の出来事について考える時も、僕らが持っている『常識』という

枠組みを一度取り払わなければいけない。
「何に騙されるなって言うんだよ……てかそもそもあの女の子は誰なんだ？　あの子の言葉を素直に信じていいのか？」
「それは……」
灯火に言われて、あの女の子が僕らに何か危害を加えようとしている可能性もあるんだということに漸く気づいた。確かに、あの子の言葉が１００パーセント信用できるものであるっていう証拠は無い。
「……これは流石に、判断材料が足りなさすぎる。あの女の子の言葉が抽象的過ぎて一体何を指しているのかも分からないし、そもそもあの女の子の言葉が信用できるものなのかどうかも怪しい。
メッセージをくれた人には申し訳ないけど、一旦は頭の片隅に置いておく程度にしておくしかないと思う」
「実際に会ってもいない人間に申し訳がる必要は無いと思うけど、俺も陽向の意見に同意だ。現状じゃどうしてみようもない」
議論の結果、あの夢に関しては一度保留にして、僕らは僕らのやるべきことをやっていこうということで話は纏まった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「いらっしゃいませ」
翌日、僕がいつもと同じようにスローアさんのお店に行って手伝いをしていると、見たことのないお客さんがやってきた。
全身を黒のローブで包み込み、嘴の尖ったマスクを身に着けている。顔も全身像も一切見えてこない不思議な人物だ。
というかペストマスクだよな、あれ。細部のデザインに違いはあるものの、あれは間違いなくペストマスクだ。何であれがピラマに？
そんなことを考えていると、ペストマスクのお客さんは足音一つ立

てることなく僕の目の前へとやってくる。
「ウラサワヒナタさん、ロイハ局長がお待ちです。これから冒険者ギルドへと来ていただけますでしょうか」
特に特徴的というわけでもない、普通の成人男性の声でお客さんはそう言った。ロイハ局長といえば、このタラハットの冒険者ギルドのトップを務める女性のはず。そんな人が冒険者ですらない僕を何故呼び出したんだろう？
「あの……今店番中なので一度スローアさんに確認を取ってきてもいいですか？」
「どうぞ」
いきなりの事態に動転しつつも奥に潜ってスローアさんに事情を話すと、スローアさんは二つ返事で僕が店を空けることを了承してくれた。スローアさんの許可も取れたので、これから行く旨をペストマスクの男性へと伝える。
「畏まりました、お待ちしております」
そう一言言うと、ペストマスクの男性は来た時と同じように一切の足音を立てることなくお店から出ていった。
何事なのかさっぱり見当もつかないが、取り敢えず行くって言ったし行ってみよう。

ギルドに入ると直ぐに、受付嬢の一人が僕を見つけてロイハ局長の執務室へと案内してくれる。
「ロイハ局長、ヒナタさんをお連れしました」
「ありがとう、通して。」
木製の扉越しにロイハ局長の声が聞こえる。受付嬢の人がドアを開けてくれたので、軽く頭を下げて部屋へと入る。
部屋にはロイハ局長の他に先ほどのペストマスクの男性、そして灯火もいた。
「あれ、灯火も呼ばれたの？」

灯火は僕の方に一瞬視線を送ると、直ぐにロイハ局長へと視線を向ける。
「俺ら二人を呼びつけたってことは、流れ人関連ですか？」
ロイハ局長は手元の資料から僕らへと視線を移し、再び手元の資料へと視線を戻す。
「お前ら、故郷に帰る方法を探してるんだったか？」
「え？　ええまあ、そうですけど……」
「ほら」
そう言って、ロイハ局長は今しがた読んでいた資料を僕らへと差し出す。その動作の意味をいきなり理解することが出来ず、僕と灯火は互いに顔を見合わせた。
「あの、これは……？」
「多分お前らが欲しいであろう情報だ」
くい、と資料を振るロイハ局長。横に立つペストマスクの男性へと視線を送るが、男性は微動だにしない上にマスクのせいで表情も読み取れない。受け取っていいってことだろうか……？
恐る恐るロイハ局長の元まで歩き、おずおずと資料を受け取って目を通してみる。そこにはピラマの言葉で
『キシワダケイゴを名乗る人物、王都付近で確認』
と書かれてた。
「きしわだ、けいご……？」
「ああ、その男はこの世界、ピラマに初めて訪れた流れ人だ」

第二章第５話　【目的をもって一歩を踏み出せ】

「初めての流れ人、ですか……」
　名前を聞いてもピンと来ない。少なくとも僕は聞いたことのない名前だ。灯火に視線を送るが、灯火も黙って首を横に振る。
「それで、この人がどうかしたんですか？」
「この男は一度、ピラマから消えている」
「消えている？」
　死んだという表現ではなく、消えたとは一体どういうことなんだろうか。
「この男がこの世界にやってきたのは今から１５年近く前。そしてそれから１０年後、この男はこの世界から完全に姿を消した」
「あの、どうして〝消えた〟って言い切れるんですか？　普通に亡くなってしまったっていう可能性も」
「実際に見た奴らがいるんだよ。この男が目の前で消失した瞬間を」
　そう言いながら、ロイハ局長はもう一枚の資料を僕に手渡す。受け取って目を通してみると、そこには恐らくこの世界の住人と思われる二人の女性の名前と、その二人の証言と思しきものが載っていた。
『キシワダの身体が白い光に包まれはじめ、私たちの視界も真っ白になった。そして次に目が見えるようになった時には、キシワダは消えていた。』ですか。
　場所は王都内の宿の一室……」
「そう。王都という安全な街中で、それも当時の仲間の目の前で消失し、その後５年間に渡ってキシワダケイゴの存在は一切確認されていなかった。」
「それが、最近になって再びきしわだけいごを名乗る人物が現れた、と……」
「それも、半年前にだ」
「え……？」
　半年前と言えば、丁度僕たちがこの世界にやってきた頃と被る。ロイハ局長は僕らがこの世界に来たのと何らかの因果関係があると

思っているんだろうか……？
「あの、ロイハ局長……申し訳ないですが僕らはきしわだけいごさんのことは何も」
　ロイハ局長は頬杖をつき、僕を見上げるような姿勢になって言葉を続ける。
「私が言いたいのはそんなことじゃない。この男、王都の警備隊に『なんでまた俺はここにいるんだ』って言ったらしいんだ。
　ここからは私の推測になるが……私はこの男が一度故郷に帰ったんじゃないかと睨んでいる」
「故郷って……まさか地球にですか!?」
　ロイハ局長の言葉に思わず声のボリュームが上がる。
「確たる証拠は無い。それこそちきゅうでもピラマでもない、全く違う世界に行っていたっていう可能性だってある。
　だがこの男自身が、『またここにいるんだ』と言った。それも何かに絶望したような表情だったそうだ。地球というのはこのピラマよりもずっと平和なんだろう？　それならこの表情にも説明がつく」
　確かにロイハ局長の意見には一理ある。それに何よりも、僕らは今地球に帰る手段について何の手掛かりも得ることが出来ていない。どんな些細な情報で、どんなに信憑性が低くても僕ら自身の目で確かめる価値はあると思う。
「ということは、きしわだけいごさんに直接会って話を聞けば、何かわかるかもしれない……？」
　きしわださんがこの世界に再びやってきたのは約半年前。もちろん今も王都にいるのかどうかは分からないし、何なら存命なのかどうかも不安な点ではある。王都に行ったのに既にどこか別の場所に行ってしまっている可能性だってあるし、そもそも会って話を聞いても無駄足になる可能性の方が高い。

　それでも、僕はこの人に会いに行くべきだと思った。

僕は灯火の方を向くと、力強い目で言った。
「行こう灯火、王都へ」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

浦沢陽向は、凄い男だ。
人一倍努力家で、一つのことをとことん突き詰めるだけの粘り強さを持ってる。頭の切れもよく、ここぞという時の判断力は俺以上のものを持っている。
ロイハ局長と何かが書かれた紙を見ながら、あれやこれやと話している後ろ姿を見ながら、俺はそんなことを考える。
魔法の適性が無く、俺よりも身体が弱いからといって諦めることをせず自ら新たな道を切り開いた男。この世界の文字を覚え、今では読み書きを普通に行えるレベルになっている。付与魔法に関する知識が無いため詳しいことまでは分からないが、陽向が働いている店に通い詰めている冒険者仲間曰くかなり頑張っているらしい。

浦沢陽向は、強い男だ。
決して物事を楽観的に考えず、されども悲観的にも考えることなく冷静な視点で見つめることが出来る。なるようになるさ、といつも考えている俺とは違って。
俺のブレーキを踏んでくれるっていう安心感があるから、俺も多少無理出来ると言えば聞こえはいいか。
分かってんだよな、陽向の優しさに俺が甘えてるだけだってことは。冒険者を辞めとけって言った時も、陽向を危険な目に合わせたくないって感情の他に『俺のサポートに回って、地球に帰る為の方法を

探してほしい』っていう気持ちは確かにあったし。

俺は陽向が思う以上にずるく、汚い男だ。

俺ががむしゃらに依頼をこなし続けているのは、陽向をサポートに回したことを正当化させる為。陽向に冒険者を降りさせたのに俺が何もできませんじゃ話にならない。

そりゃあ俺だってあんなバカでかい魔物と戦うのは怖いし、人を殺すことなんてやりたくもない。

でも俺は、そうでもしないとこの世界で生きていけない。戦うことでしか、勝つこと弟子か存在価値が見出せないから。

思えば、地球にいた時もそんな感じだったな。普段は俺の意見を全肯定するのに、ここぞって時や俺が間違った選択をしそうになった時は全力で止めてくる。まるで影のように、俺を支えて正しい道を指示してくれる、そんな存在だった。

でも、俺は思うんだよ。

そろそろ、お前が太陽になってもいいんじゃないか、って。

第二章第６話　【進む】

「……灯火？」
　僕が呼びかけると、灯火は今気づいたとばかりに大げさに反応して答えた。
「ん？　おお、王都な。俺もそうした方がいいと思う」
「……灯火、話ちゃんと聞いてた？」
「大丈夫だよ、聞いてたって」
　笑顔で灯火に背中を叩かれる。……あれ？
「灯火、もしかして」
「ほれ陽向、目的地が決まったんなら出発の準備をしなきゃいけないだろ」
　灯火が僕の肩に手を回し、半ば無理矢理話を遮ってくる。
「……そうだね」
　まあ灯火がそう言うなら、いいか。
「ロイハ局長、ありがとうございました。今日のこの情報もそうですが、これまでに色々と手助けをしてくれて」
「私はただ仕事をしただけだ。それに、私はお礼の言葉よりも実績で示してくれるほうが好きだね」
　照れ隠しなのか、それとも本心なのか。ロイハ局長は艶めかしく微笑みながら答えた。
「キシワダが今も尚王都にいるのかは、申し訳ないけど私には分からない。でも王都に行けば何かしらの手掛かりは掴めるはずだ。
　……ほら、これがここら一帯の地図と、これが王都までの大雑把な地図だ。細かい道なんかは途中途中にある都市によってそこのギルドで聞くなり、冒険者に聞くなりしてくれ」
　そう言って、二枚の地図を僕に手渡すロイハ局長。一枚にはタラハットを中心とした周囲の森や道、都市が事細かに描かれたもので、もう一枚はこのピラマのものと思われる全体の地図だった。
　この世界に簡単に地図を複製するような技術は無いので、この二枚はかなり貴重なもののはずだ。地図一枚に対して銀貨２０枚はくだ

らない。
「あの、今お金を……」
「ああ、それならもう貰っているからいらないよ」
「え？」
　灯火がいつの間にか支払っていたのかと思って灯火の方を見るが、灯火は何のことかと言わんばかりに首と手を横に振る。
「細かいことは気にするなよ。それより、早く準備しないと時間が無いんじゃないのか？　ここから王都に向かうとして、一番近くの街でも徒歩で5日は掛かる。その為の食料を買い込んだり武器の手入れをしたり……とにかくやることは色々あるんだ、時間が必要だろう」
　もう話は終わりだと言わんばかりに、手をひらひらとさせるロイハ局長。同時にロイハ局長の横に立っていたはずのペストマスクの男性がいつの間にか執務室の扉の前に立ち、ドアノブを握って待っていた。
　仕方なく、僕らは二人からの出ていけオーラに押される形で部屋を後にする。
「ロイハ局長、本当にありがとうございました」
「ありがとうございました」
　僕と灯火が、合わせてロイハ局長に深く、深く頭を下げる。ロイハ局長は一言「ああ」とだけ言った。

「それじゃあ、色々と買い物をしなきゃいけなくなったね」
　ギルドを後にした僕たちは、明日にでも出発できるように今日中に準備を整えてしまうことにした。僕と灯火で冒険に必要なものを買いに行く。
「取り敢えずは次の街のゼストスまでの物資で十分かな」
「ああ。あんまりいっぱい持って行ってもかさばるだけだし、俺たちは馬車とかも無いから少しでも移動が楽になった方がいいだろうしな。

それに最悪、食料は現地でも調達できるし」
「……料理するの僕なんだけど」
灯火は料理が一切出来ない為、道中の料理はきっと僕が担当することになるだろう。長期移動の依頼の時とか一体どうしていたんだろうと疑問に思ってしまうけど、きっとそこら辺で狩ってきた動物の丸焼きとかばっかり食べてたんだろうな……。
「美味しいごはん頼むわ、シェフ」
「全く……」
互いに軽口を叩きながらも買い物を続ける。こうして灯火と一緒に何かするのってかなり久しぶりな気がする。最近はお互いに自分のことで精いっぱいだったし、仕方ないと言えば仕方ないんだけど。

「ええと、後は……」
食料を買い、リュックのような形をした大きめの麻袋を買い、幾つかの器を買った。あとは灯火の武器を手入れする為の道具をいくつか買い足せば終わりかな？
「あとは俺の分だけだし、先に行っててていいぞ」
鍛冶屋の手前で、灯火が突然そんなことを言った。
「え、いいよ別に。それくらい付き合うよ？」
「お前だって、話しとかなきゃいけない人がいるんじゃないのか？」
ちらりと鍛冶屋に、見覚えのある人影が見える。ギルド内で僕らに初めて話しかけてくれた人であり、今は灯火の剣の師匠でもある男性。顔に大きな傷があり、それが歴戦の戦士であることを物語っている。
「……そうだね。ここからは別行動にして、終わったら宿に集合にしようか」
師匠と弟子の話に、部外者の僕が入る余地はない。それは逆もまた然り。僕は僕の師匠に、明日旅立つことを伝えに行かなければいけない。
灯火に一度別れを告げ、僕は走ってお店へと向かう。

陽はまだてっぺんに位置している。まだ午後になったばかりなので店はまだ余裕で開いている。でも僕は、少しでも長くスローアさんとルチルさんと話をしたいと思っていた。
普段運動なんかしないせいで息が上がる。タラハットはそこまで大きな街ではないけど、それでも日本の地区一個分くらいの大きさはある。
「はぁ……はぁ……」
膝に手をついて呼吸を整える。ドアを開けた時にこんな息も絶え絶えでは話をするどころではない。
暫くして心臓の鼓動が落ち着いたところで、僕は店のドアを開けた。
「いらっしゃ……ああヒナタ君、おかえり」
出迎えてくれたのはルチルさん。お昼を食べたばかりなのか、お店の中にはスープの温かい香りが漂っている。
「ギルドからの呼び出しって何だったの？」
お店の商品を整理しながら何の気なしに聞いてくるルチルさん。僕は一度大きく深呼吸をして、真剣な表情で答える。
「そのことで、ルチルさんとスローアさんに話があるんです」
僕の言葉を聞き、顔を目の前の棚から僕へと向けるルチルさん。そして僕の真剣な表情から何かを察したのか、ルチルさんが寂しそうに笑う。
「……じゃあ、今日はもう店じまいだね」

第二章第７話　【出逢いがあれば別れもある】

　僕はスローアさんとルチルさんの二人に、ロイハ局長から聞いた話や地球に帰ることが僕の最終的な目的なこと、それら全てをしっかりと話した。

「……スローアさんの教えを途中で投げ出すような形になってしまうこと、本当に申し訳なく思っています。不義理だって言われても仕方がないとも、思ってます」

　僕が話している間、二人はただ黙ってじっと僕を見つめていた。僕の話が終わってからも、二人の口が開くことは無い。

　暫くの間、部屋の中に沈黙が流れる。

　おもむろに、スローアさんが立ち上がってお店の方へと歩いて行ってしまった。

「あ、あのスローアさん、どこに……？」

「……」

　僕の問いかけにスローアさんは答えない。カウンターを超え、お店の陳列棚の方へと歩いて行ってしまった。

「やっぱり、怒るよね……」

　そりゃあ、魔法を教えてほしいと言って直談判で駆け込んで来た人間が、たった半年で『王都に行かなければいかないので旅立ちます』なんて言ったら舐めているのかと思うのも無理はない。覚悟していたこととは言え、恩師を怒らせてしまう、失望させてしまったという事実はやっぱり心にくるものがある。

「そんな落ち込まなくても大丈夫よ。お婆ちゃん、別に怒ってる訳じゃないと思うから」

　ルチルさんが落ち込む僕を見てフォローを入れてくれる。たださすがに、あれで怒っていないは無理があるだろう。

「……ありがとうございます。

　ルチルさんも、本当にごめんなさい。たった半年で投げ出すことになってしまって」

「ん～……別にヒナタ君のは『投げ出す』って言うのとはまた違うん

じゃない？　そもそもヒナタ君って、元々地球に帰るつもりだったんでしょう？　それなら、遅かれ早かれ今日はやってきたと思う。だから、私は『投げ出した』って言うよりも『前に進んだ』んだと思うなぁ」
　ルチルさんは、僕が落ち込んだ時にいつもこうして優しい言葉を掛けてくれる。今だって僕が一方的に悪いのに。
「まあちょっと待ってようよ。その間に、次に行く街のこととか聞かせてよ。王都の方向だとゼストス辺り？」
「はい、今のところはその予定です」
「馬車とか取ってるの？」
「いえ、何があるか分からないからお金は大事にしようって話になったので、ゼストスまでは徒歩で向かいます」
「徒歩か～大変そう。あーでもトウカ君、だっけ？　あの子が冒険者なんだっけ？」
「ええ、まあ……」
　いつもの、本当にいつもの調子で話しかけてくれるルチルさん。ルチルさんは一度ゼストスに行ったことがあるらしく、ゼストスの街並みや人についていろいろと話してくれた。
「それでそこの冒険者ってのがいい奴ばっかりで――――あ、お婆ちゃんお帰り」
　ルチルさんが景気よく話しているところで、先ほど部屋を出ていったスローアさんが戻ってくる。振り返ると、僕を険しい顔で睨んでいるスローアさんと目が合った。
「ス、スローアさん……」
「……」
　スローアさんは小さく息を吐くと、出る時には持っていなかった大きめの麻袋を一つ、僕の目の前に置いた。
　麻袋は移動時に背中に背負えるよう、リュックについているものよりも細めのヒモが二つ備え付けられている。袋はランドセルくらいの大きさで、何故か四角形にその形を歪めていた。
「スローアさん、これは……？」
「……持っていきな」

スローアさんは短くそう言うと、そのまま元居た椅子に腰を下ろした。
「開けてみてもいいですか？」
「好きにしな」
一応スローアさんからの了承も得られたので、麻袋の口を開けてみる。するとそこには本が入っていた。
全部で三つ。それぞれがちょっとした辞書くらいの分厚さがあり、その分重さもずっしりとしている。
一冊の中を開いてみると、そこには『付与』に関する様々な情報が書かれていた。
「その本はあんたが持っている『付与』『分離』『合成』に関して、私が研究するときに使ったメモ書きを纏めたもんだ」
本に目を通していると、スローアさんの口からとんでもない発言が飛び出して来た。本に釘付けだった視線がスローアさんの方へと跳ね上がる。
「え、今何て……!?」
「私はもうそこに書いてあることは全部覚えちまった。もういらなくなったから、やるよ」
この本に書かれている図や文字は、明らかに手書き、しかもスローアさんの手書きだ。一ページ一ページにかなりの文量が書き込まれていることから、この本一冊にスローアさんの血の滲むような努力とかけられた長い年月が垣間見える。
そんな本を、言わばスローアさんの人生ともいえる代物を、頂ける。
「……っ！」
ポタポタと、開かれたページに染みが出来る。気づけば僕の目から涙が零れだしていた。
「スローアさん……こんな、こんなに凄いものを貰って、本当にいいんですか……？」
「私が要らないって言ってるんだ。あんたが要らないと言うなら、これは処分するしかないね」
「要ります、要りますってば！」

僕の手元にある本に手を伸ばしてきたので、慌てて胸に抱える。そんな僕の動作に、スローアさんとルチルさんが二人して小さく笑いだした。
「そんな必死にならなくても。お婆ちゃんは元からヒナタ君にあげる予定だったんでしょ？」
「偶々だよ、偶々」
「へぇ～」
机に頬杖をついたルチルさんが、スローアさんに生暖かい視線を向けながらニヤニヤとほくそ笑む。
「じゃあ本の影に隠すようにして入れたネックレスも、偶々？」
「え？」
ネックレス？　そんなもの最初は見つけられなかったけど……。
改めて麻袋の中をよく見てみると、確かに本の影に隠れるような形で何か赤く光るものが入っていた。取り出してみると、親指の第一関節までくらいのサイズの赤い石が付けられたネックレスだった。
「これは……？」
「目にマナを通して見てみな」
スローアさんに言われた通り、マナを目視できるように目にマナを通す。
空気中に紫色のマナが浮遊しているのが見えるのと同時に、僕の身体からわずかに溢れ出るマナが赤い石に吸い寄せられているのが見て取れた。
「マナを、吸ってる……？」
「それはマナを貯蔵しておける魔道具だ。規模の大きめな魔法を使おうとする時、あんたの身体に通せるマナの量は普通に比べて少ないから、そのネックレスに一時的にあんたのマナを貯めておくことで今まで作れなかった魔道具でも作れるようになる。
ただし、そのネックレスはあんたのマナにしか対応していないから、他の人間が使っても何の効果も価値もないよ」
「凄い……」
僕のマナを吸収して赤く輝くネックレスに、思わず見とれてしま

う。
「私の用事はこれで終わりだ。あとはあんたの好きにしな」
そう言うと、スローアさんは立ち上がって自室の方へと歩き出した。まだ大したお礼の言葉も言えていないのに、ここでじゃあばいばいとは言える訳が無い。
「スローアさん、待ってください！」
慌てて立ち上がり静止の声を掛けるが、スローアさんは止まらない。僕は遠ざかるスローアさんの背中に向けて、僕の精一杯の気持ちをぶつけることにした。
「半年前、嫌いなはずの流れ人である僕を拾ってここまで面倒を見てくれて、本当にありがとうございました。スローアさんに出会えていなかったら、ここでこうして魔道具師としての勉強が出来ていなかったら、きっと僕はどこかで諦めていたかもしれません。
僕が今こうして地面に脚をついて立っていられるのは、間違いなくスローアさんのお陰です。
この本も、このネックレスも、大事にします。旅に出ても魔道具師としての修業は、毎日欠かさずやります。スローアさんの弟子だって、胸を張って言えるようなそんな魔道具師になります！」
スローアさんは自室への扉を開けたまま、いつの間にか止まっていた。その背中は、小刻みに震えているようにも見えた。
「本当に、本当に……お世話になりました！」
頭を下げる。僕の目からまたも零れ出た涙が、木製の机を濡らす。
「……生意気だよ」
スローアさんはそれだけ言うと、自室の扉を閉めた。

「で、私には？」

感涙にむせぶ僕の横から、空気の読まない一言が飛んでくる。物欲しそうに期待する眼差しに対して、しらっとした視線と共に僕は言葉を送った。
「……勿論ルチルさんにも感謝してますけど、催促されたせいで感謝の気持ちが今薄れました」
「いや残された私の気持ちよ。確かにお婆ちゃんとヒナタ君の熱い師弟関係の絆に感動する場面なのは分かるけどさ、そこで空気になってる私の立場よ。流石にいたたまれないことを察してよ」
「それは、申し訳ないですけど……」
実際にルチルさんにも、スローアさんと同じくらいに感謝をしている。ピラマで文字の読み書きができるようになったのはルチルさんのお陰だし、このお店で働くときに色々とサポートしてくれたことやお客さんに僕が馴染みやすいように色々と手回しをしてくれた恩だってある。
でも、それとこれとは話が別だろう。
「ルチルさんのせいで涙が引っ込んでしまった僕の気持ちを察してほしかったです」
「そこはお互いさまってことで」
からからと笑うルチルさん。一見空気の読めない行動にも見えるけど、これがルチルさんなりの「いつまでも泣いてないで早く前に進め」というメッセージなんだろう。
多分、きっと。

結局、スローアさんは自室から出てくることは無く、お店を出る僕を見送ってくれるのはルチルさん一人だけだった。
「改めてにはなりますけど、ルチルさんにも感謝しています。僕にピラマの文字を教えてくれたことや、この街に馴染みやすいように積極的に仲良くしてくれたこと、弟のように面倒を見てくれたことだったり……言い出したらきりがないですけど、この街で僕らが今日まで何

の不自由もなく過ごしていけたのは、間違いなくルチルさんのお陰でもあります。
本当に、ありがとうございました」
ルチルさんに向かって、再び頭を下げる。スローアさんの時のように涙を流すことは無かったが、そこには確かにスローアさんに対するものと同等の感謝の気持ちがあった。
「偶には顔みせて、って言いたいのは山々だけど……それを言ったらヒナタ君のこと困らせちゃうもんね。
うん、どういたしまして。見つかると良いね、故郷に帰る方法」
「はい、必ず見つけます」
哀愁に満ちた笑顔を浮かべるルチルさん。その顔に、僕は寂しさを覚えてしまった。
「駄目だよ、君はちゃんと君の成すべきことをしなきゃ」
おでこに軽い痛みが走る。ルチルさんのデコピンが、僕のおでこを捉えていた。心の中を見透かされて恥ずかしい気持ちになるが、それ以上に寂寥感が僕の胸を抉った。
「少しくらい、いいじゃないですか……。寂しがっても、ここにいたいと思っても……」
「でも、それは君の為にならないでしょ」
ルチルさんの言う通りだ。ここに留まっても僕らの目的が達せられることはほぼ間違いなくない。地球に帰る為には、僕たち自身が動かなければいけないから。
「……そうですね」
赤く腫れた目でルチルさんの目を真っすぐに見る。
「それじゃあ、僕は行きます」
「うん、頑張ってね」
ルチルさんの温かな手が、僕の頭を撫でる。いつもより少しだけ、その温度が高いように感じるのは気のせいだろうか。

第二章第８話　【言葉よりも剣で語れ】

陽向と別れてから、俺は鍛冶屋で自身の剣の手入れが終わるのを待っている師匠に話しかける。
「どうも」
「トウカか。その後どうだ？」
「おかげさまで、大きな怪我もなく順調に依頼をこなしてます」
驕りたかぶるような気持ちは一切ない。ただ淡々と事実を伝える。
「そうか。それは良かったな」
「ダインさんは最近どうっすか？」
「まあまあだ」
ダインさんは基本的に口数が少ない。話すことが嫌いというわけではなさそうだが、普段からあまり喋っているところを見たことが無い。
「ダインさん、俺明日にはこの街を出ることになりました」
ダインさんの眉がピクリと震える。ダインさんには元々、俺が剣を教わるのは地球へ帰る為だと言うことは伝えてあるので、いつかこういう日が来るということは互いに分かっていた。
「……そうか」
「はい。なので一つお願いがあります」
だから、俺はこの日にどうしてもやりたいことがあった。
「なんだ？」
「俺と、勝負してくれませんか？」
単刀直入に、俺が伝えたかったことを伝える。真っすぐにダインさんの目を見て、返答を待つ。
「……分かった。ギルドに木剣と練習場がある、そこへ行こう」
「はい」
ダインさんの剣の手入れが終わるのを待って、俺たちはギルドへと向かった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ギルド裏手、学校の体育館程の大きさがある修練場にて俺とダインさんの二人が互いに向き合い、木剣を構える。

修練場には俺たちの戦いを見たがった野次馬がわらわらと集まり、俺たちを取り囲むように立っていた。

「……」

「……」

修練場の広さ、その人の多さに対して、そこは驚くほどに静かだった。俺とダインさんの息遣いが互いに聞こえるほどに。

合図は、ない。

ほぼ同時に脚を踏み出した俺たちは、それぞれの思いを乗せた剣を携えて相手へと肉薄する。

ダインさんは低く体勢を保ちながら俺の元まで走り寄る。バネのようにその体を跳ね上げながら剣を下から上へと振るい、俺の顔面を潰しにくる。

俺はその剣を、避けることなく真っ向から自分自身の木剣で受け止める為に剣を振るう。上から振り下ろされた剣が、ダインさんの剣とぶつかり合う。

ガコン！　とおよそ木剣とは思えない程重い音が修練場内に鳴り響く。互いの木剣が鍔迫り合い、どちらも一歩も引かないまま拮抗状態となった。

「く……っ！」

ダインさんのパワーが、俺が思っていた以上に凄まじい。上から押している分俺の方が有利なはずなのに、徐々に徐々に押され始めてき

た。
　このままでは押し負けると思った俺は、剣の角度と身体をを少しだけずらしてダインさんの攻撃を流す。
　ガリガリと音を立てながらダインさんの剣を滑らせ、力を受け流す。判断が間に合ったおかげで、何とか剣を弾かれ隙を晒すという事態は避けることに成功した。
　鍔迫り合いの状態が解消されたことで体勢が逆転した。今度は下になった俺が、脚目掛けて横に薙ぐように剣を振るう。
　しかしダインさんにそんな小手先の技が通用するはずもない。俺の攻撃を難なく躱すと、がら空きになった背中目掛けて剣を勢いよく振り下ろして来る。
「ふっ！」
「!?」
　だけど、そこで終わる俺じゃない。低い姿勢を生かして地面に手をつき、迫りくる剣の腹を思い切り蹴り飛ばした。流石にこれにはダインさんも驚いたようで、剣を蹴られた瞬間行動が止まった。
　剣を蹴るという完全に想定外の動きをして、しかも剣の腹を完璧に蹴ったはずなのにダインさんは剣を手放すことなく握り続けた。それだけでもとんでもない握力と対応力だというのに、更にダインさんはすぐさま体勢を立て直して俺の追撃に備えてきた。
　勿論これで勝負が決まるとは思っていないが、虚を突いた一撃でも大きな隙を作れなかったという事実はかなり堪えるものがある。一度落ち着くために互いに距離を取り、再度踏み込む隙を伺う。

「ふぅー……」
　俺とダインさんの実力差は戦う前から分かっていたつもりだが、こうして実際に相対してみると差の大きさを痛感させられる。
　このままやっても負けるだけだ。そう判断した俺は剣を腰へと置いて大きく息を吐き、呼吸を整える。そして神経を集中させ、マナを集め始める。

ダインさんは純粋な剣技だけで勝てる相手ではない。なら、俺なりのやり方で勝つしかない。
「なるほどな」
俺がやろうとしていることに気づいたダインさんは、一気に勝負を決めに来た。およそ人間とは思えないほどのスピードで俺の懐へと潜り込み、上段に構えた剣を一気に振り下ろす。
空気を切り裂き、マナをも押しのけながら迫りくる木剣。いくら木で出来ているとは言え、あの勢いで振り下ろされたらかすり傷では済まないだろう。
めっちゃ怖い。でも、俺は逃げない。ダインさんの振るう木剣から、ダインさん自身から一瞬たりとも視線を逸らさず、全力でマナをかき集めてひたすらに魔法の発動に集中する。

そして――――

ダインさんの剣が俺の額を捉える本当に直前で、俺の魔法は発動した。
「よし……」
足に風のベールを纏うことで機動力を上げることに成功した、名付けて【ゲイルブーツ】。加減を間違えると戦うどころか壁に向かって吹っ飛んで行ってしまうので、構想から形にするまで随分と苦労したオリジナルの技だ。
寸でのところで一撃を避けることに成功し、大きめに距離を取る。
「ズルとか、言わないっすよね？」

「それもお前の技だ」
不敵に笑うダインさん。次の瞬間、ダインさんの姿が俺の目の前から消えた。
「っ!?」
消えたと思った時には、既にダインさんの剣は俺の胴を捉えていた。寸前でピタリと止められた木剣が俺の目に映るのと、遅れてやってきた豪風が俺の身体を通り過ぎるのとはほぼ同時だった。
油断は無かったはずだ。それなのに、ダインさんの動きを一切目で捉えることが出来なかった。俺が魔法を発動していたのと同じように、ダインさんも俺の気づかぬうちに魔法を発動していたのだ。
「ズルとは言わんな?」
にやりと笑うダインさん。俺の頬を一筋の汗が通り過ぎた。
「……それもダインさんの技っすから」
俺と師匠の最初で最後の一騎打ちは、師匠の完全勝利という形で幕を閉じた。

「あー、負けた!」
木剣を片付けた後、修練場のど真ん中でごろりと寝転がる俺の隣にダインさんが座り込む。あれだけ沢山いたギャラリー陣は、試合が終わるなり「あれは凄かった」とか「神速のダインの名はやっぱ伊達じゃねえな」とか口々にダインさんを絶賛しながら散っていった。だからこの修練場には、今は俺とダインさんの二人しかいない。
実際に勝負をしていた時間はほんの数分だったと思うが、間違いなく今までで一番濃密な時間だった。
「俺の本気に、よくついてきたな」
「ついていけてないっすよ。最後の、見えなかったっす」
「あれが見えるようになられては俺が困る」

そう言うと、ダインさんはふっ、と口元を綻ばせる。
「強くなったな、トウカ」
「ええ。強くなりましたよ、俺」
剣を振るっていた間はあれだけ互いを見ていたのに、今は目を合わせようとすらしない。俺は青々とした空を、ダインさんはどこか遠くを見つめている。
「ダインさんのおかげです。俺が強くなれたのは」
恐らく半年前なら、俺は一番最初最初のダインさんの一撃を追い切れずに一瞬で倒されていただろう。それがダインさんに本気を出してもらえるまでに成長することができた。
腹筋に力を込めて上半身だけを起こし、ダインさんの方へと身体を向ける。
「流れ人の俺を育ててくれて、ありがとうございました」
胡坐の状態で、頭を下げる。ダインさんはちらりと俺の方を見たが、また何処かへと視線を移した。
「……生きろよ」
「……はい、必ず」
俺は立ち上がり、再びダインさんに向けて深く頭を下げると修練場を後にした。

第二章第8・5話【師の想い】

「……行っちまったか」
部屋に戻ったはずのスローアが、いつの間にかルチルの隣に立って陽向の背中を眺めていた。
その顔には名残惜しさがありありと描かれており、それだけでスローア自身が陽向をどう思っていたかを伺い知ることが出来た。
「珍しかったね、流れ人嫌いのお婆ちゃんがあそこまで肩入れするなんて」
ルチルが問うと、スローアは不機嫌そうに答える。
「私は流れ人が嫌いなんじゃない。自分自身を勘違いしている奴が嫌いなだけだ」
「なるほどね」
陽向の姿は、既に人ごみに紛れてしまったので二人には確認できない。それでも二人は店に戻ることなく、人の行き交う街道を見つめていた。
「いずれ来るとは分かっていても、いざ直面すると寂しいもんだね」
「……」
スローアは答えない。
「……あれ？　ダインさんじゃん。どうしたの？」
暫く二人とも、言葉もなくただ行き交う人々を見つめているとそこにダインがやってきた。ダインとスローアは友人と言えるほど仲が良い訳ではないが、互いに流れ人の弟子を持つということからちょくちょく交流自体はしていた。
灯火との勝負が終わり、スローアたちの様子が気になったダインはそのままここまでやってきたという訳だ。
「お前のところも終わったのか」
「あんたんところもか」
ダインの表情を見たスローアもまた、ダインが自身の弟子との別れを終えたことを悟った。
「昼頃には済んだんだがな、どうにも受け入れるのに時間がかかった」

「死んだわけじゃないし、何なら成長してくれているんだから嬉しいだけだと、そう思っていたんだけどねぇ」
　スローアもダインも、タラハット内では流れ人嫌いで有名な二人のはずだった。それが今では二人の流れ人を育て上げた立派な師匠だ。
「あの二人は強くなるだろうな」
「当り前さね。私が育てたんだから、強くなってもらわなきゃ困る」
　寂しそうに笑うスローアの顔を見たダインは、「フッ」と小さく笑うと
「今日は一杯どうだ？」
　そんな誘いをスローアたちに持ち掛けてきた。
「酒かい？　そんなもんどこから仕入れてきたんだ」
　酒や肉などの嗜好品は、この世界では高級品とされ庶民であるスローアやダインなどは簡単に手を出すことが出来ないような代物となっている。
　勿論買おうと思えば買える金額ではあるが、食べ物にそんな金額を出すくらいなら魔道具を買って明日の生活を豊かにしたほうがいいというのが、庶民の考え方であった。
「本当はトウカと飲もうと思っていたが、あいつがまだ子どもだと言うことを失念していたせいで少し余ってしまってな」
　ダインは餞別として灯火に片手用の直剣を渡していた。今灯火が使っているものは通常の鉄で作られているのに対して、ダインが拵えたのはたとえ火魔法を剣に流したとしても耐えうる合金『魔導合金』を使って打たれた至極の逸品だ。
　それと一緒に酒でも飲まないかと誘ったところ、灯火に「未成年なので」と断られてしまったという悲しい事態が先ほど人知れずに行われていた。
「ふぅん……酒ねぇ」
　スローアはダインの持つ酒のボトルをまじまじと見つめる。
　ダインの持ってきた酒は、麦を原料として長い年月をかけて発酵、蒸留、熟成を行うことで作られる、地球で言うところの『ウイスキー』に似たものだった。

「酒なんていつ以来だ。それこそ昔に魔道具発展の立役者だかなんだかで祝ってもらった時に飲んだくらいじゃないか？」
「……お前、そんな凄い人だったんだな」
「昔のことさね。それに、わざわざそんなことを言いふらす必要もないだろう？」
　何でも無いことのように言うスローアだが、実際スローアが居なければ魔道具というものはこのピラマでここまで広く普及はしていなかっただろう。スローアが付与魔法を細部まで分析し、一般の人間にも分かりやすく、簡単に扱える魔道具を開発することが出来たからこそ、今魔道具はピラマの生活の一部として確立されている。
「まあ、それもそうだな。で、どうする？　弟子の門出を祝って、師匠だけの晩酌は」
「まあ、それもいいんじゃないかい。
　ああ、勿論孫も参加していいだろ？　こいつだって立派なヒナタの師匠だ」
　脇の方で会話の邪魔にならないように大人しくしていたルチルを指差しながらスローアが言う。突然名前を呼ばれたルチルは一瞬驚きの表情を見せたが、直ぐにかぶりを振ってスローアの申し出を断る。
「いやいやいや、私なんて本当に何もしてないですから。二人でゆっくりと楽しんでくださいよ」
「酒が飲めないと言うなら無理強いはしないが……一人だけ仲間外れというのも寂しいだろう。私は構わないが、どうだ？」
　スローアとダインからの視線。二人に比べて圧倒的に年下のルチルがこの視線に耐えきれるはずもなく、またこれはルチルにとっても嫌な誘いという訳でもない為、ルチルは二人からの誘いをありがたく受けることにした。
「……それじゃあ、私もお邪魔させて頂きます」
「じゃあ、料理は頼んだよ」
　スローアがしたり顔で言う。そこで漸く、ルチルは自分がシェフとして誘われたんだと言うことを悟った。

「お婆ちゃん、まさかその為に私を!?」
「一緒に飲みたいと思っていたのは本当だよ？」
「減らず口を……」
　幾ら陽向に対しては年上の余裕を見せているとは言え、所詮この二人の前ではルチルも子ども同然。まんまと掌で転がされたルチルは大人しくシェフとしての役目を果たすことを了承することとなった。
「さ、そうとなれば買い出しだね。どうする？　一緒に行こうか？」
「うーん……家の中にまだ食料自体は余ってるし、別に買ってくるとしても野菜だけだからなぁ。私一人でいいや」
「なら俺は、家から少しだけ肉でも取ってこよう」
「肉ですか!?」
　ダインの言葉に、ルチルが目を丸くして聞き返す。高級品の肉を食べられるとあって浮足立っているルチルに対し、ダインは苦笑いを浮かべながらルチルを宥めるように言った。
「ルチルさん、残念ながら貴族が食べているような豪勢なものではないぞ。
　動物の肉を自分で解体して塩漬けしたものだから、味も保証は出来ん」
「それでも肉は肉です」
　ルチルの頭の中は既に肉のことでいっぱいで、ダインの釈明が受け入れられることは無かった。
「早速買い出し行ってきます！」
「あ、おいそんなに期待を……聞く耳すら持ってくれないのか」
　再度ダインが言い訳をしようとするが、それよりも先にルチルがバザーへと走ってしまったのでダインの声が届くことは無かった。
「……騒がしいね、肉程度で」
「まあ、冒険者でもない限り肉にありつくことも無いだろうし、あの反応は多少ながら仕方ない部分もあるとは思うが……あそこまで期待されて、俺が持ってきた肉でがっかりされたらどうする？」
「知ったこっちゃないよ。あの子が勝手に期待しただけだ。別に問題ないだろう」

「……まあ、それはそうなんだが」
多少良心が痛むダインではあったが、ルチルの為に豪勢な肉を用意できるほどダインの懐事情は温かくは無い。仕方なく、家に戻って宣言通りの塩漬け肉を持ってくることにした。

その後、三人が酒を片手に朝方まで互いの弟子を自慢し合ったのはまた別の話。

第二章第９話　【旅立ち】

「おう、お帰り」
　宿に戻った僕を出迎えてくれたのは、どこかスッキリとした表情の灯火だった。窓の外を眺めながら黄昏るその姿は、灯火がやっていると絵になる。
「ただいま。先に帰ってたんだ」
「おう。やっぱお前は長かったな」
「やっぱって何だよ」
　互いに師匠との別れを終え、もうこの街に思い残すことは無くなった。明日の朝にはこの街を出発する為、今日は準備をしておいて早めに寝るべきだろう。
「あれ、その袋何？」
　灯火が僕の担いだ麻袋の存在に気づく。僕は少しだけ自慢げに笑いながら、麻袋を床へと下ろした。
「よくぞ聞いてくださいました」
「え何そのテンション」
「この袋はね、スローアさんからの餞別というかプレゼントなんだ」
　袋の口を開け、中身を灯火に見せびらかす。
「何だこれ、本？」
「そう。これはね……」
　灯火にこの本がいかに凄く、また貴重なものであるかを興奮気味に伝える。この本はスローアさんの人生と言っても過言ではないほどの代物で、付与魔法における一から十までが書かれている、まさに『至高の逸品』なのだ。
「……へぇ」
　話に夢中になりすぎて今の今まで気づかなかったが、灯火の表情がかなり引きつっていた。……あー、やりすぎた。
「ごめん、夢中になりすぎてた」
「いやいいよ。気持ちわかるし」
　そう言いながら、灯火はベッドの脇から一本の長剣を引っ張り出し

てきた。鞘や柄は素朴で何の変哲もない代物だが、一度剣を引き抜くとその異様さが露わになる。
刀身は通常の剣とは異なり、深い紫色に染まっていた。禍々しさの中にどこか美しさを感じさせるその刀身に、思わず目を奪われてしまいそうになる。
「貰ったの？」
「ああ。前々から用意してくれてたんだって」
「……一緒だね」
目線が自分の首にかかるネックレスへと流れ、苦笑いが零れ落ちる。お互いに送ってくれたこの代物から、僕らの師匠がどれだけ僕らのことを大切に思ってくれていたかが分かる。沁みるなぁ、心に。
「その剣、なんで刀身が紫なの？」
ふと気になったことを聞いてみる。紫色の鉱石なんて、ピラマにあったっけ？
「よくぞ聞いてくれました。この剣は『魔導合金』っていう特殊な合金を使って作られていて――――」
それから僕は、ひたすらに灯火の話に付き合うこととなった。明日早いんだからもう寝ようと言いたかったのは山々だが、自分もさっき同じことをした手前流石に言い出せない。
……まあ、気が済むまで話させてあげよう。

結局灯火の話は夜遅くまで続き、僕らは二人して無事に昼頃まで寝過ごすこととなった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

翌日、僕らは眩しすぎる日差しに叩き起こされる形で目を覚ました。
「……多分だけど、寝坊してる」
外の騒がしさが僕らがいつも起きている時間帯のそれとは違っている。人々は活動的に街を歩き、今が早朝ではないことをしっかりと証明している。
「お前が本について熱く語るから……」
「後半は灯火だったじゃん。灯火がもう少し控えてくれればもっと寝られたのに」
互いに愚痴を言いあうが、僕自身自分にも非があることを自覚している為あまり強くは言えない。
「……言っても仕方ないか。もう荷物は纏めてる？」
「ああ、ここに」
灯火が僕のものと似たような麻袋を見せる。灯火のものは口の部分に一つだけ紐が括り付けられていて、それを肩にかけて担ぐことが出来るようになっていた。僕のものとは違い、灯火の袋は片手が塞がってしまう為戦闘時には一度袋を地面に手放さなければいけない。
灯火の袋には、昨日買っておいた水と、武具の手入れに使う道具がちらほらと入っている。
僕の方にはスローアさんから貰った三冊の本の他に、少しばかりの野菜が入っている。戦闘が出来ない分、僕が重い水を持つと言ったんだけど、本が濡れるといけないと灯火が水を持ってくれることになった。
「本当に大丈夫？　水、重くない？」
「まあこれくらいなら、向こうでよく担ぎながら走ってたしそんなに気にならん」
床の麻袋を軽々と持ち上げ、ひょいと肩に担ぐ。確かに灯火の言う通りなんてことなさそうだけど、やっぱりちょっと申し訳ないなぁ……
「やっぱり交代制に……」
「俺にその大事な本は荷が重すぎるから嫌だ」

きっぱりと断られた。灯火からしてみれば、多少重い水を持って移動するよりも僕の本を持つ方が気持ち的に嫌なんだそうだ。
「……それならごめん、お言葉に甘えさせてもらうね」
「俺が良いって言ってんだから、気にしなくていいんだよ」
申し訳なさそうにしている僕の肩を勢いよく叩き、部屋を先に出ていく灯火。サラッと罪悪感を感じにくくさせる言葉を付け足してくるあたり、やっぱり僕はこの男には敵わない。
僕は一応忘れ物が無いかどうか、部屋の中を再度見て回る。そして完全に忘れ物が無いことを確認すると、部屋を後にした。

既に朝のピークを過ぎていることもあり、宿の中は比較的静かだった。受付ではこの宿を切り盛りしているおばさんが、帳簿のようなものを付けている。
「おばさん、今日までお世話になりました」
仕事の邪魔にならないかを確認して、おばさんに声を掛ける。おばさんは目線を帳簿から僕らの方へと移し、驚きの表情を見せた。
「どこかへ行くのかい？」
「はい。王都を目指して旅をすることにしました」
それを聞くと、おばさんはより驚いた顔をする。
「王都？　そんな遠くまで行くのかい」
「はい。王都に手がかりがあるらしいので」
おばさんには、僕らがこうして冒険者として実力を付けたり魔道具師として勉強をしている理由を話している。だから僕らが王都で探そうとしているものも、何となくは察してくれているだろう。
「そうかい……２００日近くも居てくれたからいなくなるのは寂しくなるけど、でも手がかりが見つかってよかったね。これで、故郷に帰る為に一歩前進って訳だ」
おばさんは笑顔で僕ら二人の頭を雑に撫でる。雑過ぎてちょっと

痛いけど、おばさんの愛情を感じられた。
「頑張りな、死ぬんじゃないよ」
「はい。あの日からずっと泊めて頂いて、ありがとうございました」
「仕事だからね。でも、あんたらは礼儀正しいし部屋も荒らさないからこっちとしても楽でよかったよ」
　悪い笑みを浮かべるおばさん。まあ確かに掃除が楽なようにと部屋を出る前には毎回シーツを直したりとかはしてたけど……こんな風に面と向かって言われるとちょっと反応に困る。
「次の街でも元気でやりな」
「はい」
「ういっす」
　僕と灯火が揃っておばさんにお礼を言う。おばさんは満足そうに笑うと、小さく手を振ってくれた。だから僕らも入口のところでおばさんに手を振って、宿を後にした。

第二章第１０話　【はじめのいっぽ】

久しぶりに出たタラハットの外。見た目的な違いは殆ど無いはずなのに……この世界に慣れたからだろうか、半年前とはどこか違って見えた。

「よし、それじゃあ行こうか」

一旦の目的地に据えたゼストスまでは、徒歩で約５日かかる。僕はこの半年間、タラハットから一歩も外に出ていないからここら辺の土地勘が一切ない。その為、ゼストスまでの道のりがどんなものなのかも知らない。

「灯火はゼストスって行ったことある？」

地図を確認し、目的地の方向に向かって歩きながら灯火に聞いてみる。灯火は依頼でタラハットを出ることも多く、長い時はひと月近く帰ってこないこともあった。だからもしかしたら、ゼストスにも行ったことが無いかと思って聞いてみたけど、

「俺はそっちの方は一度も行ったことが無いんだ。俺たちが遠征に行くのは専ら『厄災の降る地』がある方向だったからなぁ」

結果は残念ながら、知らないとのことだった。それよりも気になる単語が聞こえたな？

「厄災の降る地？　何その名前だけでもヤバそうな場所は」

「ああ、何か厄災龍？　とか呼ばれるドラゴンが住んでる土地なんだと。そっちの方にはタラハットみたいな大きな街が無く、冒険者なんてのも当然いないからタラハットの冒険者がちょくちょくそっちの方に住んでる人たちの依頼をこなしに行くんだ」

「へえ、それで」

ドラゴンと言えば、半年前に僕らが見たのもドラゴンだった。もしかしてあれが厄災龍というやつなんだろうか？　だとしたら、襲われることもなくこうして生きている僕らは運が良かったのかな……？

「そっか、行ったことないならゼストスまでのもろもろの概算も出来ないけど……まあ水とかは節約気味に行けば問題ないかな。僕そんなに喉乾かないし」

「戦闘職の俺に遠慮して飲まないとかはやめろよ。最悪水魔法使えば水くらい生成出来るんだし」
「でも飲み水くらいの量に調整するの、めっちゃ大変なんでしょ？」
灯火は戦闘に適した威力の高い魔法を扱うことには非常に長けているが、飲み水とかそよ風とか火起こしとか、そういった『ちょっとあればいい』くらいの魔法の扱いが下手だ。最近『ゲイルブーツ』とかいう新技をやっと扱えるようになったらしいけど、それでもやっぱり生活で使うと考えると魔法の威力は高い。
「……俺の実力不足を叩くなよ」
「叩いてないよ。ただ戦闘までして大変なのにそれ以上の負担を強いたくないだけ。何のためにお金出して水買ったと思ってんの」
「うぐ……」
渋い顔をする灯火。別に僕も責めているつもりはなく、事実を言っているだけなんだから仕方ない。
「ほら、いつまでもダメージ受けてないで早く行こ。ただでさえ寝坊したせいで時間がないんだから」
「へい……」
「そんなに落ち込むならこの旅の間で練習すればいいじゃん。僕だって移動中とかはマナ操作の練習してるし、夜は本読みながら魔道具師としての修業をするつもりだし」
初めの頃は止まって集中しながらじゃないと出来なかったマナ操作も、今では呼吸のように無意識に行うことが出来るようになった。灯火と違い、僕はほぼ毎日このマナ操作を行わなければいけない環境にいた為、これだけは灯火よりも上手くできる自信がある。
「……分かってるよ、俺だってそのつもりだ」

それから僕らは、通学路を歩いている時のように他愛もない雑談を

しながら道を歩き続けた。勿論無警戒という訳ではなく、周囲にしっかりと警戒しながら。
　とは言っても、ここら辺は見通しもよく森の中のように障害物になるようなものも全く無い平原だ。カメレオンのように保護色を持って襲ってくるような生物がいるならまだしも、灯火の知り合いから貰った情報によるとそういった動物や魔物はここら辺には生息していないらしい。
「……拍子抜けするくらい平和だね」
「陽向は修羅の道がお好みか？」
　灯火が茶化してくるので、僕は灯火の意見を訂正する。
「いや、勿論楽なのがいいのは当たり前なんだけど……一応、たくさんの魔物に襲われる覚悟くらいはしてたから、その覚悟が無駄になりそうだと思うと、なんか……」
「実際のところ、命を脅かす魔物ってのはこんな見晴らしのいい場所にはあんまり出てこないらしいぞ。魔物だって馬鹿じゃないから、自分の住処は人目につかないところに作るし、自分よりも強い敵に無理に挑みに行ったりはしないんだ」
「そこら辺は、普通の動物と似てるんだね」
「まあ実際に戦った時の強さが動物とは桁違いだけどな」
　旅のお供にと、灯火が苦笑いを浮かべながら今までに戦ってきた魔物について僕に語ってくれる。灯火の話によると、ピラマで言う魔物はゲームの中に出てくるようなファンタジー味溢れるものが多いらしいが、その生態は限りなくリアルなんだそうだ。
　特にスライム系の生物は、身体が半透明なものが多く中で消化中の生物がしっかりと見えてしまう為、それはそれは精神的にしんどいらしい。
「会いたくないなぁ、スライム」
　ゲームの中だとあんなに愛らしい見た目なのに、現実は非常だ。
「こっちの方にも出るのかね？　そもそも魔物自体が出るか怪しいとこだけど」
　陽が沈みかけている現在、僕らは今日野宿する場所を探しながら歩

いているところだけど見渡す限り平野で危険らしい危険が微塵も存在していない。だから野宿の場所は選び放題、という訳だ。
「完全に暗くなる前に火を起こしておきたいよね」
「任せとけ」
「魔道具持ってきたから大丈夫です」
背中の麻袋から一つの魔道具を取り出す。ステッキ状のそれは、マナを通すことで小さな火を発生させることができる、簡易版のバーナのようなものだ。
「この辺でいいか」
「だな」
適当な場所に荷物を下ろして、野宿の準備をする。と言っても準備することといえば焚火の用意と夕食の準備をすることくらいなので、手分けして準備を進めていくことにする。
灯火に薪の調達をお願いして、僕は食材の下ごしらえを。まだそんなに歩いてないし、今日は節約気味にスープとパンにしようかな。

その後僕らは夕食を食べ、互いに火の番を交代しながら眠ることになった。起きている間、ずっと魔道具師の鍛錬をしていたのはまあ言うまでもない。

第二章第11話　【情けは人の為ならず】

「……なんだあれ？」

タラハットを出て今日で三日目。話すネタも大分尽き始め、景色の変わることの無い平原にそろそろ飽きてきた頃、僕らは街道の脇に人を発見した。

遠くて顔や姿は見えないが、どうも3～4人くらいはいるっぽい。

「取り敢えず近づいてみる？」

近寄ったらいきなり襲ってくる、なんていう可能性もゼロじゃない。でもこんなところで真昼間に留まっている理由となれば、かなり限られてくるだろう。もしかすると僕らが持ってるポーションが必要になる可能性もあるし。

「ヤバそうだったら逃げるで」

「うん、それで行こう」

ピラマは日本のように治安がいいとはお世辞にも言えない。盗賊だって出るし、人は簡単に死ぬ。だからこそ、最大限に警戒するのは当然のことと言える。

でも、それと親切心を忘れるというのはまた別の話。困っているなら助けて損は無いだろう。

最悪逃げられるように灯火に風魔法の用意だけしておいてもらって、僕らは街道脇の人物の元へと歩み寄る。

近づくにつれ、段々と街道脇の人たちの様子が明らかになっていく。

彼らは、四人の男女グループだった。一人の男性を囲うように、三人が周囲を警戒しているようだった。その内の一人、澄んだ青い髪をポニーテールに纏めた女性が僕らに気づくと、向こうも警戒心を露わにして腰に携えた剣をこちらに向けてきた。

反射的に両手を挙げてしまう僕だけど、こっちでもハンズアップって無抵抗の意味になってるのかな？

対して灯火は、先ほどまでの警戒を解いて無防備な格好で四人の元へと歩み寄っていく。

「近づくな！　それ以上来ると斬る！」
剣を持った女性が、僕らの方を睨みつけながら怒鳴る。いきなり怒鳴られたから思わず身体が反応して肩がビクッ、となってしまった。ちなみに灯火は一切動じていない。
「落ち着け、俺らは冒険者だ」
両手で落ち着くように促しながら、脚を止めることなく近づく。向こうは三人で陣形を組み、こちらに対して攻撃を仕掛けようとしている。さっきの青髪の女性と、もう一人青髪の男性剣士が二人、弓を携えた赤い髪の弓士が後ろに一人といった構成だ。
「だから落ち着けって、俺らに戦う意思はない。怪我してるならポーション持ってるし、渡そうとしてるだけだ」
流石にこれ以上近づくと攻撃されると判断した僕たちは、一度足を止めて話し合いの姿勢に移ることにした。
「……」
依然として臨戦態勢を崩さない三人だが、仲間内で小さく何か話している様子だ。僕らと四人の距離は既に２０メートルほどにまで近づいていて、襲い掛かろうと思えばできなくもない距離にいる。
「もし警戒してるなら、これで信じてくれるか？」
そう言って、灯火は背中の剣を地面に置いた。その行動にぎょっとした三人は、ぽかんと口を開けて固まってしまった。
「で、そっち行っていいか？」
お互いに固まった状態で５分くらいが経過して、痺れを切らした灯火がめんどくさそうに頭を掻きながら言った。向こうもその一言で我に返ったのか、慌てて武器をしまうと僕らに手招きをしてきた。
「けが人がいる。大したことは無いと思うが、立てない程痛いらしい」
近寄ってみると、地面にうずくまっている黒髪の男性が一人、そこにはいた。足を抑え、歯を食いしばりながら痛みに耐えている様子だ。相当な痛みに襲われているのだろう、脂汗もひどい。
「陽向」
灯火が僕に視線を送る。ここからは僕の出番だ。
「ちょっと手を失礼しますね」

男性が抑えている手をどけると、そこには大きな穴が開いたふくらはぎがあった。焼き爛れた穴の側面は赤黒くなっている。不幸中の幸いだが、そのおかげで失血死するという事態を免れることが出来たんだろう。
「うぅぅ……」
男性が小さく唸る。そのグロテスクな光景に今朝食べたものが喉元まで昇って来たけど、無理矢理吐き出すのを抑える。袋の中から濃い緑色のポーションと赤いポーションを二本取り出し、緑の方を男性の口元へと持っていく。
「苦いですが、これを全部飲んで下さい。今から足にかけるポーションの効果を促進するものです。決して毒ではありません」
ゆっくりでいいので全部飲み干すように指示する。痛みのせいで上手く呑み込めないのか、少し口から零れ出てはしまったけど大体は飲んでくれた。
「御免なさい、かなり沁みると思うのでより痛みが来るとは思いますが我慢してください。
もし暴れるようであれば、皆さんで抑えてください」
灯火を含め、四人にアイコンタクトを送る。赤いポーションは冒険者の間でもよく使われているものなので、他の三人も怪我をしている男性もその効果は知っているんだろう。皆覚悟を決めたような表情をしていた。
「それでは、いきますよ……」
「あああああああがあああああああ!!! いでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ!!!!」
ゆっくりと、傷口全体に染みわたるようにポーションを穴の内側にかける。液が傷口にかかる度に、男性が悲鳴にも似た絶叫を上げながらのたうち回ろうとするが、それを四人が全力で押さえる。
均等にポーションがかかるように回しながらかけ、中身を全部かけ終わったところで傷口に変化が訪れる。
男性が暴れながら絶叫してそれを四人が押さえつけているという構図は変わらないが、傷口の周りから肉がもりもりと湧きだし、あっ

という間に傷口を塞ぐ。見ようによっては傷よりこの光景の方が余程気持ち悪いかもしれないが、ポーションを学ぶ際にスローアさんに嫌という程見せられたので僕は慣れた。
　数分で傷は完全に塞がり、元通りの綺麗な足がそこにはあった。
「まだ痛みはあるかとは思いますので、暫くは安静にしていてください」
　医者でもないのに、そんなことを無意識に言った自分自身に笑いそうになる。このポーションという魔道具が、この世界に医者という職種が存在しない最大の理由だ。
　ある程度の傷なら一瞬で治し、直ぐに前線に復帰させることが出来る。それなのに副作用らしい副作用が無く、比較的簡単に入手することも出来る。
　人間よりも強い生物が当たり前に跋扈しているこの世界だからこそ、人類が生きるために開発したと言えば聞こえはいいが……
「だとしても、これは流石にチートだよなぁ……」
　ゲームじゃないんだし、ＨＰがあるわけでもないのに、簡単に怪我が治る世界。そりゃあ無茶だってしやすくなるし、命だって軽くなる。
　ポーションが入っていた小瓶を袋に戻しながらこの世界の現実を憂いていると、
「あの、ありがとうございました。助けて頂いて……」
　後ろから声を掛けられた。振り返ると、先ほど僕らに向かって剣を向けていた一人の女性が申し訳なさそうな表情でこちらを見ていた。
「いえ。ポーションの持ち合わせが無かったんですか？」
「……お恥ずかしながら、初めて行く場所だったものでポーションの量を読み違えてしまい、帰りにフレアスライムに襲われてしまったせいで怪我を……」
　フレアスライム、確かこれもスライム系の魔物だったはずだ。なるほど、それで傷口があんなことになっていたのか。
「……あの、少しお聞きしたいんですが、皆さんはどちらに向かう予定で？」

「ゼストスです。私たちはそこを拠点にしているので」
帰る途中だったと言っていたので、もしかしたらと思って聞いてみる。結果は見事にビンゴ、僕らの目的地と一緒だ。
「あの、提案なんですけど……僕らも同行してもいいですか？　ここからゼストスまでだと恐らくあと二日は掛かると思いますし、その間にまた何者かに襲われたら大変ですし」
僕が提案すると、女性は目を丸くしてこちらを見つめてきた。
「……私たちは寧ろありがたいですが、そちらにメリットが無いのでは？」
「夜に番を回すのが、二人だと結構きつくて……」
恥ずかしそうに言うと、女性は「ああ、なるほど」と納得したように頷いた。
ここまでで二回の夜を二人で過ごしたわけだけど、それがまあしんどい。睡眠なんて殆ど取れないし、朝は眠気で思考が纏まらない。魔道具師の勉強をしようにも、一切頭に入ってこない。
だから、ここで仲間が出来るというのは僕らにもちゃんとメリットがあるということだ。
「……それなら、お願いしようかな。
私はレイ、宜しく」
「僕は陽向です。宜しくお願いします」
互いに固い握手を交わし、僕らは一時的にパーティを組むことになった。

第二章第１２話　【ＯＤ】

「……ところで、あれは大丈夫なのか？」
　レイさんが後ろを指差しながら僕に問いかける。視線をそっちに移すと、ひとしきり叫び疲れたのか先ほどの怪我を負った男性が眠っていた。
「ああ、あれは多分さっきまで痛みに耐えていた分の疲れが出て眠っているんだと思います。足の方は徐々に治っているところなので、起きた時に違和感が無ければ大丈夫だと思います」
　多分レイさんはあの男性が死んでしまったのではないかと勘違いしたのだろう。まあそりゃパーティーメンバーが命の危機に陥って、さっきまで泣き叫んでいたのにポーションを飲んだ途端に静かに眠ったら心配にもなるよな。
「そうか……改めて、危ないところを助けて頂き本当にありがとう。
　実は私たちが持っているポーションをすべて試してみたんだが、一向に効く気配がなく、それどころか飲んだポーションを吐き出してしまって……」
「えっ!?」
　レイさんの話を聞き、急いで男性の元へと駆け寄る。眠った男性の介護をしている二人の男女を引き剥がし、男性の腹部の辺りに手をかざしてマナを集中させる。
「……ヒナタさん？」
「すまん、ちょっと黙ってて」
「え？」
　僕に話しかけようとするレイさんを、灯火が静止する。ありがと灯火。
　掌に意識を向け、『分離』の魔法の準備をする。同時に男性の身体を巡るマナの中から僕が飲ませたポーションと、それ以外に残存するポーションを見極める。
「……これだ」
　僕が飲ませたポーション以外のポーションの成分を男性の体内で

『分離』させる。そして分離させたポーションの素材をさらに『分離』、それをさらに『分離』、さらに『分離』……

真上にあった太陽が傾きかけたころに、漸く男性の体内にあるポーションの成分の完全分離に成功した。

「危なかった……」

極度の緊張状態から解放された僕は、そのまま仰向けに倒れこむ。額には大量の汗が滲んでいて、目に入ってきたせいでそれが沁みる。

きっと外科医の人とかは、毎日これ以上の緊張状態の中で難しい手術を沢山成功させているんだろうな、なんてふと思った。

「おい、お前ダグラスに何をした？」

寝転ぶ僕を見下ろす形で、腰に片手用の直剣を携えた青髪の青年が僕を厳しい目で睨みつけていた。

「助けてやったんだよ、二度も。それなのにその態度は無いんじゃないのか？」

そんな青年に突っかかるように、灯火が睨みつける。青年も灯火の方へと視線を向けると、険しい顔で言い返す。

「そんなこと、分からないじゃないか。俺たちにはこいつが何をやったか分からない。さっき飲ませたものだって、ポーションじゃなくて毒なのかもしれないだろ」

「……あぁ？」

まずい、これ以上は非常にまずい。

僕は慌てて起き上がると、青年と灯火の間に入って一触即発の空気を断ち切ろうと試みる。

「ストップ！　これに関しては説明も無しに行動に移った僕が悪いから、ね灯火！」

灯火に目で『ここは抑えてくれ』と訴えかける。僕の意図を汲み取ってくれた灯火は、不承不承と言った形でそっぽを向いてしまった。

取り敢えず灯火の方はこれでよし。後は皆に対する説明をしな

きゃいけない。
「先ほどは突き飛ばしてしまって申し訳ありませんでした。一刻を争う事態だと勝手に判断してしまったため、あのような強引な方法を取ってしまいました」
　まずは謝罪。相手の溜飲を下げないことには聞いてもらえる話も聞いてもらえない。
「……あんた、あれは何をやってたんだよ」
「さっき僕がやっていたのは、『体内のポーションの効果を分解して無力化させる』というものです。
　まず、何故そう言ったことをしなければいけなかったのか、ということから説明させてもらいます」
　この世界のポーションは、ＲＰＧに出てくるようなものほど万能ではない。基本的には地球にある薬と同じようなもので、用法と容量が存在する。一日の容量を超える量を摂取すれば体調に支障をきたす可能性があるし、一度に大量のポーションを飲めばオーバードーズの原因にもなる。
　スローアさんの話によれば、今までにもポーションの多量摂取で人が死んだ例は幾つかあるらしい。でもそれがポーションが原因であると分かったのはかなり最近のことだと言う。一人の流れ人が、それを発見したのだとか。
　つまり、今回寝込んでいる男性もそのオーバードーズで死んでしまう可能性があった。だから体内の自浄作用に任せるのではなく、僕の力で無理矢理ポーションの成分を細かく分離して無効化させる必要があったのだ。
「この話は、まだ世間的に広く認知されていません。なのでここで覚えてください、ポーションの過剰摂取は危険だと」
「……でもよ、その容量ってのはどれくらいなんだよ？」
「それは……すいません、まだ分かっていません。ただ過去の例から、一日に１０本以上のポーションを飲むか一度に５本以上のポーションを飲むと体に害が出る可能性があるとは言われています」
「……曖昧だな」

「そこは、ごめんなさい。僕たち魔道具師の力不足としか言えません」
「なら、お前が飲ませたポーションはどうなんだ？　あれだって、ダグラスを危険に晒す可能性があったんじゃ――――」
「陽向、もう行こう」
　僕と青年の話を遮るように、灯火が割って入ってくる。灯火の顔は、明らかに怒っていた。
「……灯火？」
「受けた恩義を素直に受け取らないどころか、疑ってかかる奴らに俺はこれ以上構いたくない」
「……でも、彼らだって知らなかったんだから仕方が無いと思うし、僕の行動だって傍から見たら大分怪しかったと、思う」
「だとしてもだ。命の危機から仲間を二度も救ったのに、お礼の一つも出ないような奴を俺は信用できない」
「灯火……」
　僕はよく知っている。普段は僕の意見を極力聞いてくれる灯火も、こうなってしまってはどうしようも無いことを。
　でも、ここは灯火に矛を収めて貰わなければならない。ここでこの人たちとのパーティーを解散すれば、ゼストスまでの道のりは何とかなってもゼストス内での生活で苦労する場面が出てくるかもしれない。敵はなるべく作らず、味方は出来るだけ作っておいたほうがいい。
「灯火、今回は――――」
「いい加減にしろユース！」
　灯火を何とか宥めようとしていた時に、レイさんの怒号が響く。驚いてレイさんの方を見ると、レイさんは青年を物凄い形相で睨んでいた。
「命の恩人に対して何だその態度は！」
「でも姉さん！　こいつらが嘘を言っている可能性も」
「こいつらではない！　言葉遣いに気を付けろ！」
　どうやら、レイさんと青年は姉弟の関係にあるらしい。腰に手を当て、なおも青年を叱るレイさん。

「お前の方こそ、何を根拠にヒナタさんたちが嘘を言っていると思っている？」
「……だって、ダグラスが目を覚まさないから」
「それについての説明は先ほどヒナタさんがしてくれたはずだ」
「だから、それが嘘の可能性も」
「その根拠は何だと聞いている」
有無を言わさぬ口調で青年を捻じ伏せるレイさん。どの世界でも、姉は強いと言ったところなのだろうか。
「……」
暫く口での攻防が続いてたが、初めから勝負は決まっていたも同然だっただろう。涙目の青年が僕と灯火のところへと歩み寄り
「……変に疑って、すいませんでした」
と謝ってくれた。
「私からも済まない。命の恩人だと言うのに、弟のユースが疑ってかかるような真似をしてしまって」
「いえ、こちらこそ疑われるような行動をしてしまったのが原因ですし……」
「それもこれも、我々の知識不足が故だ。本当に申し訳ない」
ユースさんの頭を押さえつけ、レイさん共々再び頭を下げられる。
「灯火？」
「……わーったよ。陽向がいいなら、俺はそれでいい」
一度怒ってしまった手前引き下がれないのか、僕を理由にする灯火。
「僕は仲直りしてくれるならそれでいいよ」

第二章第１３話　【僕は君じゃないし、お前は俺じゃない】

　眠っているダグラスさんが起きてから移動を再開しようという話になったので、目を覚ますのを待っていた結果夜になりました。なので移動は明日からにして、今日は親睦会を込めた食事会になりました。

「改めて、私はレイ。このパーティーのリーダーをやらせてもらっている」

　僕と灯火が並んで座り、焚火を挟んでレイさんのパーティーメンバーが座るという構図。レイさんが改めて自己紹介をしてくれた。

　そのままの流れで、レイさんのパーティーメンバーが次々に自己紹介をしていく。

「……ユースだ」

　むすっとした顔でユースさんが名乗る。姉に叱られたことが響いているのか、それともまだ僕たちを味方だと思ってくれていないのか、あの一件以降僕らと話そうとしてくれない。個人的にはわだかまりは出来るだけ無くしていきたいんだけど、僕が謝ったとしても何とかなる問題じゃないしなぁ……。

「私はミリメリ。ごめんね、さっきは殆ど話せなくて」

　そしてピンク色の髪を肩口で切り揃えた弓使いの女性、ミリメリさん。天然でピンク色の色素を持ってる人っているんだ、と初めて見た時は思ったけど、見慣れると案外違和感も無くなるものだ。

　ミリメリさんは、僕たちとユースさんが言い合っていた間もずっとダグラスさんの看病をしていたので殆ど話に入ってくることはなかった。こうして話してみると物凄く気さくで、僕らが疎外感を覚えないように橋渡し的な役割を担ってくれた。

「俺はダグラス。君たちには感謝してもしきれない。本当にありがとう」

　そして、最後に深々と僕らに向けて頭を下げている黒髪の男性が、

脚に大穴を開けられてもがき苦しんでいたダグラスさん。ポーションがしっかりと効いてくれたようで、今や穴は跡形もなく塞がっていた。
「いえ、僕らもポーションが余っていただけなので」
それに困っている人を見かけると助けたくなってしまうのは日本人の性だろう。見捨てられるほど僕は豪胆じゃないし。
「僕らからも改めて、ヒナタです。よろしくお願いします」
「トウカです。よろしくお願いします」
僕らが簡単に自己紹介を済ませると、ユースさん以外の三人は目を丸くして僕らの方を見ていた。ただ自己紹介をしただけでなんでそんな顔をされるのかがいまいち分からない。
「……あの、何か？」
不思議そうに僕が尋ねると、ダグラスさんが両手をこちらに向けて振りながら矢継ぎ早に話し出した。
「ああいや、冒険者相手に敬語を使う奴なんてギルドの受付以外にいないから珍しいなと思って……それに冒険者同士ともなると尚更な」
「そうなの？」
横にいる灯火の方を向くと、灯火も頷いた。
「冒険者同士の場合は特になんだけど、相手に舐められないようにタメ口を使うんだと。一度舐められると報酬の分配で足元見られることもあるから、とか言ってたっけな。後はタメ口の方が何かと気兼ねなく話せるし、いちいち気を遣っていると命に係わる可能性もあるから、とか色々と理由はあるらしい」
僕の知らなかった常識だ。というか灯火も、それを知っているなら先に話しておいてくれても良かったんじゃないだろうか？
「あれ？　でも灯火は敬語だったよね？」
先ほどの自己紹介の時の灯火の会話を思い返すと、確かに灯火は僕と同じようにですますで喋っていた。
「正直どうでもいいからな、そういうの。普通に他人には敬語で行かないとイメージ悪いって思ってるだけだ」
「でも舐められるんでしょ？」

「一部だよ、そんな奴は。大体言葉遣い一つで相手の実力を測るような奴はそもそも弱いから関係ねーし」
なるほど、実に灯火らしい考え方だ。
「別に話しやすいように話して貰って構わない。私たちも言葉遣い一つで相手を推し量るようなことはしないから」
気さくな笑顔でそう言ってくれるレイさん。
「そう言ってもらえると助かります」
それから僕らは、互いをより知るべく雑談しながらご飯を食べることになった。ユースさんは端の方でずっとそっぽを向いて、僕らの会話の輪に入ってくることは無かったけれど僕が作ったご飯は美味しそうに食べてくれた。
火の番をしている間も話すことができたので、概ね互いのことを知り合うことは出来たと思う。

そして、遂に僕とユースさんが一緒になって火の番をする時間が来た。
レイさんは気を遣って僕たちとユースさんが一緒にならないようにしてくれたけど、そこを僕が無理を言って一緒の時間にしてもらった。
ユースさんは僕の顔を見ると一瞬驚き、そして不機嫌そうに眉を顰めた。
「なんでお前が……」
「ユースさんとは、まだお話出来ていなかったので」
ユースさんは何も言わず、僕から視線を逸らす。頬杖をつき、むすっとした顔で焚火に視線を置いていた。
「ユースさんは、レイさんと姉弟なんですね」
「それがどうした」
「……僕にも、妹がいるんです」

「それがどうしたよ」
「ご存じの通り、僕はこの世界の人間じゃありません。だから妹にも、家族にも、友達にも会うことが出来ないんです。
たまにふと思うんですよ、『元気にしてるかな』って」
思い出すのは、３つ離れた妹の顔。中学に上がって色づき始め、ちょっと生意気にはなったけどかわいらしい、大事な妹だ。
「……」
「お姉さん……レイさんとは、仲いいですか？」
「……まあ、それなりにな」
「この世界は、僕が居たところよりも命が軽いように感じます。人間よりも強い化け物は沢山いるし、そんな化け物と戦う冒険者なんていうのもいるし……」
「だから、何だよ」
「僕が言うべきことじゃないかもしれませんが、一瞬一瞬を大事にした方がいいですよ。喧嘩して気まずいのかもしれないですけど、早く謝っちゃったほうが後に起こる後悔も無くなりますよ」
「……姉さんに怒られたのはお前らが原因なんだけどな」
「その節は、すいません……」
苦笑いを浮かべながら謝罪する。相変わらず頬杖をつきながら焚火を見るユースさんだけど、その表情は先ほどよりも若干和らいでいるようにも見えた。
「……悪かったな。変な意地張って」
パチパチと鳴る火の粉の音に混じって、ユースさんの小さな声が僕の耳に届いた。
「いいですよ別に。引っ込みがつかなることなんてよくあることですし」
「お前、いくつなんだ？」
「歳ですか？　もうすぐ１８になります」
「ってことはまだ成人してないのか。それなのに随分としっかりした自分を持ってるな」
「ありがとうございます。でも僕自身、まだまだ未熟な点は多いと

思っています。僕は戦闘能力が無いので、灯火に頼ってしまうことばかりですし……」
「なんでトウカが出てくるんだ？」
そう聞かれたので、僕は灯火に感じている申し訳なさや不安、劣等感を全てユースさんに話した。夜の焚火というアンニュイな雰囲気に飲まれたと言えば聞こえはいいが、僕自身、誰かに言って少しは楽になりたいという気持ちがあったのかもしれない。
「……へえ。お前も色々抱えてるんだな」
口を挟むことなく静かに僕の話を聞いてくれたユースさんは、新たな薪をくべながらぽつりと呟いた。
「時たま思うんです。僕が居なければ、もっと楽に地球に帰れていたんじゃないかって。僕の才能の無さや容量の悪さが、灯火にとって枷になっているんじゃないかって」
灯火の強さを、灯火の魔法をこの三日間で目の当たりにする機会が何度かあった。ここまでの道のりが大したトラブルもなく平和だったのは、灯火が居たからだ。
適切な間合いを保ち、視界から標的が隠れないように威力を調整しながら魔法を撃つ。そして相手がそのダメージにひるんでいるところへととどめの一撃を放つ。
最早パターンと化したといっても過言ではないほど安定して、洗礼された動きのお陰でここまで順調に来ることが出来た。勿論、その間僕は何も出来ていない。
「俺が剣を使うのは、姉さんに憧れたからだ」
「え？」
火の向こうで寂しそうな顔をしたユースさんが話し始めた。
「姉さんの剣の腕は、俺が生まれたところで一番と言われるほど美しく、洗練されていた。そんな姉さんに憧れて俺も剣を握ったんだけど、まるで駄目だった。姉さんが振るうような剣筋には遠く及ばず、姉さんの立ち回りにはついていくことすら出来ない。
俺は泣いたよ。姉さんはあんなに凄いのに、なんで俺はこんなに駄目なんだって」

僕はユースさんの話を、ただただ聞いていた。
「そんな時、姉さんが言ってくれたんだ。『私を追うな』って。最初は俺を見捨てたのかと思ってたけど、最近漸く意味が分かってきてさ」
「意味、ですか？」
「ああ。姉さんの影を追うんじゃなくて、俺は俺に出来ることを突き詰めていけ、って言いたかったんだろうなって気づいたんだ。
確かに姉さんは凄い。動きは洗練されていて隙も無いし、剣筋は素早く目で追うことすら難しい。でもそれは、姉さんだから出来ることなんだって。俺には俺の戦い方があるし、俺が姉さんと同じことをやっても姉さんの二番煎じにしかならないな、って。
だから俺は、姉さんのように美しく舞うような剣技じゃなくて、ひたすらに相手の嫌なことを突き続ける剣技を極めることにした。傍から見たら汚いし、正直剣技と呼べるかも怪しいけど。でも、俺は俺の『武器』を手に入れることが出来た」
「……」
ユースさんは頭をガリガリと掻くと、照れくさそうに続ける。
「要は、他人と比べるばっかりじゃなくて自分を見ろってことだ。お前、さっきは『トウカは出来るのに自分は』って、そればっかりだったぞ」
ユースさんに指摘され、思い返す。言われてみれば確かにそればかり言っていた気がする。
「……でも」
「でもじゃねえ。お前はトウカじゃないだろ？　お前はヒナタなんだから、お前はお前の『武器』を磨けばいい。今はお前のその『武器』の使いどころじゃない、ってだけの話だろ。
……あれだ、それこそ今日ダグラスを助けてくれたのだって、トウカじゃ出来なかったんじゃないのか？」
「それは、まあ……」
ユースさんの言う通り、ポーションを含む魔道具関連の知識を持っているのは僕だけだからもし灯火一人であの状況に直面したときはきっと助け出すことは出来なかったと思う。

「そう言うことだよ。あんまり一人で思いつめるなよ。多分、トウカだってそんなに気にしてないんじゃないか？」
「そう、ですかね……？」
「俺が知るかよ」
ユースさんが手元の枯れ木を放り投げる。パチンと、枯れ木の壊れる音が僕らの間に響き渡った。

第二章第１４話　【ゼストスの光】

翌日以降、僕たちは順調に道を進んでいった。ゼストスに近づくにつれて平野から林へと周りの様相が変わり、その分魔物に出会う機会も増えて来たがレイさんたちも戦闘職ということもあり今まで以上に危なげなく突破することが出来た。

「なんか、ますますやることなくなってる気がする……」

「陽向はこのパーティーの大事な料理人だから、仕事としては十分だろ」

「うん、こうした美味しい食事があるだけでこんなにも戦闘へのモチベーションが変わるとは思わなかった。正直これからもお願いしたいくらいだ」

「それは流石に……」

レイさんたちにも喜んでもらえたようでよかったけど、流石にレイさんたちに今後付いていくことは出来ないからやんわりと勧誘をお断りする。

「にしても、動物に会わないね」

魔物から食肉を採取することは出来ない為、道中では適当に見つけた動物を狩って肉を調達してきたが、昨日からそういう動物の類を一切見かけていない。

「肉なら、私達のを食うか？」

そう言いながらレイさんは、背負っている袋を指差す。恐らくそこに肉が入っているんだろうけど、流石にそんな貴重品をおいそれと頂くわけにはいかない。

「いえ、もうすぐゼストスに到着するはずですし大丈夫です」

「そうか」

そんな風に最初に会ったわだかまりも徐々に溶けていき、旅も大分楽しいものへと変化してから2日後、僕たちはゼストスへと到着した。

タラハットを出てからおよそ7日。食料はともかく水が底をつきかけていて、最悪灯火にお願いしなければいけないと思っていたから

ギリギリセーフと言える。
「本当にありがとう。ここまでの道中でも、大分世話になった。
もしよかったら、私たちの使っている宿に後で来てくれないか？
お礼にご馳走がしたい」
前回とは違い、ギルドから発行してもらった身分証があるおかげで検閲は難なく抜けることが出来た。街に入って、レイさんたちと別れるときに、レイさんたちが使っている宿の場所を記した簡単な地図を手渡してもらえた。
「だって。どうする？」
「まあ奢ってもらえるって言うなら素直に受け取っとくか。どうせこの街には何日か泊まる予定だったし」
まだ資金には余裕がある為、この街で依頼をこなす予定はない。でも水や野菜の調達をしたり、道中で狩った魔物の素材をギルドに提供したりとやること自体は結構あるので、2～3日くらいはここに留まる予定だ。
「じゃあ、早速今夜行ってみようか」
「だな」
まだ日中ということもあり、僕らはまずゼストスの探索がてら冒険者ギルドへと向かうことにした。ゼストスはタラハットとほぼ同じような城塞都市で、街のつくりもかなり似通っている。
しかしタラハットとは大きく違う点があった。それは――
「お肉が売ってる……？」
タラハットには無かった肉類の商品が、この街では販売されていた。
僕が聞いた話では、肉は高級品として扱われ貴族が食すものだとされているはずだ。それなのにここでは、さも当然であるかのように肉が屋台で売られていた。
「兄ちゃん冒険者か？　なら一本どうだ」
屋台のおじさんに勧められ、僕と灯火で一本ずつ肉串を購入。値段も足元を見るようなものではなく、庶民でも普通に買える値段だった。

「タラハットに近い街なのに、随分違うんだね」
「……」
肉串を見ながら、難しい顔をする灯火。
「……何か考え事？」
「いや、この肉って何の肉なんだろうな～と」
「そんなに大事？」
灯火が肉の種類で考え事なんて随分と珍しい。『食えればいい』なんて言いそうなもんだと思っていたけど、何かこの世界に来てから嫌な思い出でもあったんだろうか？
「いや、ダインさんに聞いた話なんだけどな。ピラマでは牛や豚、鶏みたいな食肉用の動物を育てる、見たいな文化が無いらしいんだ。
魔物はそもそも元がマナであるために肉というものが存在しない。食べられる肉はあくまでも野生の動物を狩って、それを解体することで得ているらしいんだ」
灯火によれば、この世界で肉は安定した供給源が無いため希少なものらしい。確かに僕もタラハットにいた頃は肉なんてめったにお目にかかれなかったけど、そういうものだってくらいにしか思っていなかった。
「冒険者ってのは基本的に魔物を狩ることを生業としている。食べる為の肉を市場に流す為に動物と戦うやつはいないんだ。だから肉が市民の市場に流れてこない」
「冒険のついでには狩るけど、そういうのって自分たちで消費しちゃうのか」
「そ。だからこうして市民に対しても安定的に肉が供給されていることに違和感があってな」
肉汁が滴る串を眺める灯火。灯火の説明を聞いた後だと、この街で当たり前に肉料理が売られていることにも違和感が湧いてくる。
「そういえばレイさんも、僕らに肉を分けることにあんまり抵抗が無さそうだったっけ。あの時は僕らのことを信頼してくれたからだと思ってたけど、ここだと簡単に肉が入手できるからだったのかな……？」

「どっから仕入れてるんだろうな、この肉」
「きな臭いってこと？」
「流石にそこまでは言ってない。でもこうやって肉を串にさして屋台で販売とか、発想がどうも日本人っぽいなって思って」
そう言われて、辺りを見回す。タラハットのように家の前にタープを引いてバザーを開いているのを奥に見れるが、その手前、僕らの近くでは祭りの出店のように肉串が売られていたり、またさっきまでは気づかなかったが、木で出来たジョッキのようなものを片手に肩を組んで騒ぐ男性たちの姿が見える。
「あれ、お酒……？」
酒も肉と同じく高級品のはず。見た感じ街並みは中世に似ているのに、食文化が現代日本に近いものを感じる。
「なんか、物語の中の世界っぽい……かな？」
それこそ異世界に転移して戦う主人公の物語の舞台は、こんな感じで中世ヨーロッパを土台に現代のテイストを交えたものが多い印象ではある。まさに今の僕らみたいな話ではあるけど、ここはまさにそんな街だった。
「でも、ピラマに住んでる人だけでこれを維持するのは厳しそうじゃない？」
「俺もそう思う。ってことは――――」

この街に、僕らと同じ『流れ人』がいる可能性がある。

僕と灯火は目を見合わせ、ゼストスの冒険者ギルドまでの道を急いだ。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ああ言われてみれば、確かにそうだな」
その日の夜、僕らはレイさんたちに連れられて街の一角にある居酒屋へとやってきた。居酒屋では冒険者と思しき人たちが酒を片手に盛り上がっている。
この街のギルドもまた、タラハットのものとは様相が異なっていた。ギルド内部には簡易的な酒場が併設されていて、昼間にも関わらず何人かの冒険者が酒に酔っていた。
僕はタラハットとゼストスの違いについてレイさんたちに尋ねてみたところ、レイさんが思い出すように語りだした。
「私たちはこの街を活動拠点にしていて他のところに行く機会が殆ど無いからあまり違和感を持つことは無かったが……言われてみればこの街くらいだな、こんな風に酒や肉を当たり前に売っているところは」
「そんなに裕福なんですか？　この街は」
ギルドの依頼ボードを確認してみたが、食肉の調達を促すクエストは存在していなかった。
「いや、別に特段裕福だと感じたことは無いぞ。金銭感覚も普通だと思っているが……」
そう言って、目の前の分厚い肉にかぶりつくレイさん。僕らの目の前には机いっぱいに料理が並べられていて、とても庶民に手を出せるような料理には思えない。
「正直なことを言うとな、この街は他に比べてどこかおかしい。肉や酒は当たり前に庶民に出回っているし、俺たちからしたら貴族の飯としか思えないこの目の前の料理でも、ちょっと奮発すれば別段払えないことも無い、ってくらいの値段なんだ」
食事に夢中なレイさんに代わり、ダグラスさんが会話を続ける。

「俺はこの街以外にもいくつか街を渡り歩いていたから分かるが、こんな風に肉や酒が一般市民に浸透しているのはここくらいのもんだ。
ま、俺たちからしたら安い金でうまい飯が食えるんだからありがたい限りなんだけどな」
そう言って、笑顔で酒をかっ食らうダグラスさん。ユースさんもミリメリさんも、やっぱり当たり前のようにご飯を食べている。
この街ではこれが当たり前。そう言ってしまえばそれまでかもしれないが、肉は最悪何とか供給できたとしても酒に関しては不可能なはずだ。
だってこの世界の酒は基本的に蒸留酒か醸造酒といった、時間を掛けて造る酒しか存在しないはず。ビールやチューハイみたいな、そんな安価に作れるものは存在していない。
「どう考えてもおかしいよなぁ……」
笑顔で騒ぐレイさんたちを見ながら、僕と灯火はこの街の違和感について考え始める。
「魔法で酒って造れるのか？」
「そりゃ理論上は可能だと思うけど……そもそも製法を知らないと話にならないだろうし、知っていたとしても炭酸系は厳しいと思う。
もしも『自分の思い通りの事象を引き起こす魔法』なんてものを本当に実践できる人がいるなら話は別だけど……」
「てことは、事実上はほぼ不可能か」
「うん。そう思っていいかな」
ズルをして高級品を作り出すことはほぼ不可能。となれば問題になってくるのは、これだけど酒や肉の出どころだ。
「昼間にざっと街を見て回った感じでも、本当に酒も肉もありふれていた。ありふれていたんだけど、この街の人はあんまり買っていなかった印象があるのは気のせいかな？」
昼間、ギルドに立ち寄った後に街を散策してみたところ、そこかしこに屋台が建てられていて肉串やら酒やらを販売していた。
そしてそれらの売れ行きもぼちぼち良さそうではあったけど、どの店も買っているのは冒険者ばかりで他の市民の人が買っているとこ

ろを見ることは無かった。
「偶々タイミングが悪かっただけなのかもしれないけど、一応留意しておいた方がいいかな？」
「ああ。もしかすると、そこに謎があるかもしれないしな」
結局僕らは食事には殆ど手を付けず、レイさんたちと別れることになった。出どころが怪しいものを食べることは僕らにはどうしても出来なかったから。

そして翌日、ゼストスを統治する貴族家から呼び出されることで事態は新たな展開を迎えることとなった。

第二章第１５話　【税金奴隷】

翌日、僕らはこの街についての調査を行うことにした。昨日のレイさんたちとの話から、僕と灯火はこの街に酒や肉製品がこれだけ溢れている理由が何かあるはずだと結論付けた。

そしてその理由には、流れ人が関与している可能性があるとも僕らは思っている。この世界で僕ら以外の流れ人に初めて会える可能性、もしかしたら地球への帰り方についてのヒントも何か見つかるかもしれない。そんな期待も胸に込め、僕らは街の人に聞き込みへと向かった。

僕はまず、街道でバザーを行っている女性のお店に立ち寄った。

「すいません、この果物一つ頂けますか？」

女性は僕を見ると、一瞬顔を顰める。そして僕が指さしたリンゴに似た果物を一つ手に取ると、僕へ向けて突き出してきた。

「銅貨２０枚」

ぶっきらぼうに言う女性。そんな女性の態度に思うところはあったが、それよりも聞くべきことがあったためにぐっと堪えてこの街について聞いてみる。

「この街って特殊ですよね、お酒やお肉が当たり前に売られているなんて。特産だったりするんですか？」

果物を受け取り、代わりに銅貨を手渡す。女性は銅貨の枚数を数えながら、僕に視線を向けることなく答えた。

「肉や酒が特産なら、皆それで稼いでいるさ」

女性の言葉は、自虐のようにも嫌味のようにも聞こえた。あれは自分たちの本意じゃない、とでも言いたげに。

「何かあったんですか？」

そう尋ねると、女性は僕の方をちらりと横目で見やる。そしてすぐに手元の銅貨へと視線を戻すと、またぶっきらぼうに答え始めた。

「この街は普通の街だ。私ら地元の人間からしてみたら、何も変わらない。変わったのは領主と、冒険者どもだけだ」

「やっぱり、この街の食糧事情には何か問題があるんですか？」

「……」
僕の問いかけに、女性は答えない。「商売の邪魔だ」と言わんばかりに手で僕のことを追い払った。
これ以上は何も教えてくれないだろう。そう思った僕は、一言お礼を言って店を離れた。
「……次行くか」
少なくとも、この街には『何か』があることが確定した。次はその原因を探る為にもう少し踏み込んで聞き込みをしていこう。

「――ありがとうございました」
もう何人に聞いて回ったかも分からないくらい聞いてみたが、結果はあまり芳しくは無かった。最初の女性が教えてくれた以上の情報を手に入れることは出来ず、分かったことも僕らの推測が正解だったことくらい。収穫らしい収穫も無いまま、僕は宿へと戻った。
「おう、お帰り」
部屋に入ると、そこには先に着いた灯火がベッドに腰を下ろしていた。この宿は別段宿泊料が高いわけじゃないのに、マットレスには羊毛がふんだんに使われている。その為、昨日はぐっすりと眠ることが出来た。
「空振りだったか？」
僕の顔を見た灯火の第一声がそれだった。それほどまでに失望感が顔に出ていたのかな？
「分かる？」
「見りゃわかる。
まずはそっちの話から聞いてもいいか？」
灯火に促され、僕はバザーで聞いた話を灯火にそのまま話す。と言っても手に入れた情報は微々たるものだったので、話自体は直ぐに

終わった。
「なるほどな。ってことは俺たちの予想は当たってたってことか」
「うん。でも核心的なことまでは分からなかった。ごめん」
「いやいいさ。その為の俺だから」
そう言って、どや顔で胸を張る灯火。この反応だと、僕よりもいい情報を仕入れることが出来たんだろうか？
「じゃあ、灯火の成果を聞いてもいい？」
「おう。
まずこの街の現状についてだが、かなり厳しい状態にある。肉や酒を無理な値段で市場に流しているせいで、その皺寄せがこの街の住人や領主に来ているらしい。ここ一、二年で税の徴収率が倍にまで跳ね上がっているんだと」
「一、二年で倍って、そんな無茶苦茶な……」
日本の法案でももう少し慎重にやるだろうに、いきなり倍近くまで税率が跳ね上がるのは暴利もいいところだ。
「んでやっぱりいたぞ、流れ人。こうなった背景に、三年くらい前にこの街にやってきた流れ人が絡んでいるらしい」
「流れ人が絡んでいるって、具体的にどういう風に？」
「その三年前にやってきた流れ人が領主に直談判して、酒と肉を冒険者が買いやすくなるようにさせたんだって。直談判とは言ったけど、実際はほぼ脅しに近かったと噂されている。
んで流れ人の要求を飲んだ領主は酒や肉を冒険者や農民でも買えるような値段で市場へと流したそうだ」
「脅しって……何でそんなことを？」
どうにも、その流れ人の行動理由がいまいち読めない。肉や酒を市場に流通させる理由が一般市民の為なら、今皺寄せが来ている時点で即刻流通を止めるべきだ。
「さあな、流石に理由までは分からなかった。でもこの街の中途半端に豪勢な部分には、その流れ人が絡んでいるらしいぞ。
例えば……このベッドとかな」
そう言いながら、自分が座るベッドをポンポンと叩く灯火。確かに

ピラマで羽毛布団を使える人なんて、貴族くらいなものだ。それを一般向けの宿に当たり前に設置されているのは、かなり違和感がある。
「……待って。その皺寄せって冒険者には来てるの？」
灯火の話を聞いて、ふと気になったことがある。灯火は『この街の住人や領主に皺寄せが来ている』と言っていたが、冒険者はどうなんだろうか？
聞くと、灯火は渋い顔で答える。
「冒険者は移動が多い職業で、一つの地に定住することが少ない。だから税の徴収方法が少し特殊で、国に定められている一定の額をギルドに納める形になっているんだ。
だから自分がいる街によっては損をすることだってあるが、大半の場合は得をすることが多い。軽いとはいえ、命を賭している職業だからな」
つまり、この街を拠点にしている冒険者は重い税徴収の対象にはなっていないということか。
「というか、それは商業ギルドも同じなんじゃないのか？」
「いや、こっちの場合は街に定住する人の方が多いから税金は街に直接納めてるよ。僕は特殊だから、灯火と同じように一定額を納めてるけど」
冒険者と違い、僕らはあまり遠出をしない。行商人は別だけど、基本的には一つの街に留まるのでその街の税率が適応される。
でも灯火が説明してくれたことで、例の流れ人の行動理由も何となく見えてきた。
「ってことは、その流れ人がやっていることって冒険者の為ってことなのかな？」
ぽつりと呟くと、灯火は顔を顰めて答えた。
「俺も恐らくそう思う。
だが、もしそうなら俺はその流れ人のやったことを許せない。冒険者として、同郷の人間として」
灯火の言うことも最もだろう。他人から搾取して得られる幸福で、心が満たされることはない。

「なら、僕らでその流れ人を探して直談判してみようよ」
この問題に関与することで時間を浪費し、王都に到着する時間がどんどんと伸びてしまうことは僕だってよく分かっている。出来ることなら一秒でも早く王都に辿り着きたいし、地球に帰りたい。
だとしても、ここで見て見ぬふりが出来るほど、僕の肝は据わっていない。苦しむ人がいると分かっていてそれを見捨てられるほど、僕は人間が出来ていない。
「そう言うと思って、その流れ人の居場所も調べてある」
待ってましたと言わんばかりに灯火がにやりと口角を上げる。本当にこの親友には、どこまでも敵わない。
「なら明日、早速行こう」
「おう」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「そう言えば灯火、これだけの情報どうやって手に入れたの？」
灯火から流れ人の現在の居場所と、何を材料に説得するかを話し合った後。僕はずっと気になっていたことを灯火に聞くことにした。
これだけの量の情報をたった半日で仕入れてくるというのは、ちょっと信じられなかった。冒険者独自の情報網でもあるのか、はたまたこの街に知り合いがいるのか。何よりもその情報の出どころが僕はとても気になった。
「ああ、情報屋に聞いたんだ」
「情報屋？」
この街に来たばかりなのに情報屋と繋がりがあったのか。なんて感心していると、灯火は申し訳なさそうな顔で両手を合わせて頭を下げてきた。

「すまん。この情報を聞くために結構使っちまった」
「使ったって、お金？」
「ああ。流石に新顔の俺に情報を教えるとなるとそれなりの額がいる、って言われてさ。必要なことだから多少なら……と思ってたけど今にして思えばかなり吹っかけられちまった」
ピラマにおける情報の価値がどれくらいのものなのかはよく分からないが、別にこれだけの情報を手に入れてくれたんだから多少なら問題ないだろう。
それに、懐にはある程度余裕があるし特段問題は無いだろう。
「ちなみに、幾ら使ったの？」
「……金貨二枚」
「……まあ、うん。いいんじゃないかな？」
幾らと言われても受け入れようと思ってはいたけど、流石に所持金の二割を持っていかれたと言われればたじろきもする。
とはいえ、必要な情報なので仕方がないことだ。

うん、仕方がないことなんだ。……よね？

第二章第１６話　【同郷とはとても】

「おおお!?　やっぱりそうか！　やべー初めて見た！　俺以外にもいたんだ～はぇ～」
　僕の目の前で若干理解に苦しむような喋り方をしている男。そんな男が、僕らの方を見て嬉しそうに近寄ってきた。

　――話は数時間前に遡る。
　ゼストスに到着してから三日目。僕らは昨日話に上がった流れ人に会いに行くため、とある場所へと赴いた。灯火の話ではここに例の流れ人がいるらしいんだけど……。
「本当にここにいるの？　ここ領主さんの家でしょ？」
　僕らがやってきたのはゼストスの領主が暮らす屋敷。街の北部に建てられている大きな建物で、門の前には門番が立って怪しい人物が近寄らないように目を光らせている。
「俺だっておかしいとは思ったさ。でも俺が情報屋に聞いた話だと、ここだって言うんだ」
「ガセ掴まされたんじゃない？」
「情報屋ってのは信用が命だから、流石にそんなことはしない。……と、信じたい。
　もしガセなら血眼であいつを探し出して金取り返してやるけど」
　領主家の近くにある物陰に隠れながら、僕と灯火が小声で話し合う。昨日聞いたときもまさかとは思ったけど、こうして来てみると余計に疑念が深まる。本当にここに流れ人が住んでいるって言うんだろうか？
「とにかく、その流れ人が出てくるまで張り込もうぜ」
　何故僕らがこうして物陰に隠れながらコソコソしているかと言うと、先ほど門番に直接「流れ人に会わせてほしい」と交渉したらあっけなく門前払いされてしまったからである。

僕らは事を荒立てに来たわけでも殴り込みに来たわけでもない。あくまでも話し合いに来ただけなので、出来るだけ穏便に事を運びたいと考えていた。
だから屋敷に侵入するという案は即座に却下され、こうして流れ人が出てくるのをこっそりと待っているというわけだ。
「やっぱり信じられないなぁ……」
肉や酒を市場に流通させたり、領主の屋敷に住んでいたりと、この街の中心部分に関わりすぎじゃないだろうか？　聞けば聞くほど、噂の主が本当に流れ人なのかということさえ不安になってくる。
「今んとこ俺らにはこの情報しかないんだし、今日一日張り込んでみよう。それで空振りだったらまた情報集めからやり直すしかないだろ」
「……それもそうだね」
結局、今の僕らにはこうやって手に入れた情報を一つ一つ潰していく方法しか取れない。だからたとえ非効率的だとしても、張り込んで流れ人が出てくるのを待つしかないんだ。
「さて、奴が本当に冒険者ならそろそろ出てくる時間だと思うが……」
灯火曰く、冒険者の朝はそこそこに早い。理由は依頼の取り合いが発生するから。
ギルドが開くと同時に、その日に入った新着の依頼がボードに張り出される。冒険者はその中から難易度と金額を天秤にかけ、一番割のいい依頼を取っていくんだそうだ。
そろそろギルドが開く時間帯。ここからギルドまでは歩いて１０分くらいなので、このくらいの時間に出ると丁度オープンに間に合う訳だが、果たして……。
「……ん？　あれじゃね？」
目の前の屋敷、門の奥にある扉が開き、一人の人物が出てきた。よく見てみると、腰に剣を携え機能性を重視したレザーアーマーを身に着けている。
ここからだと顔はよく見えないが、領主の家族に冒険者がいるとは少し考えにくい。

「本当にここにいるんだ……」
目の前で見ている今でさえ、にわかには信じがたい。だって領主の屋敷から当たり前のように冒険者が出てくるんだよ？　日本で考えたら県庁から銃持った一般人が出てくるようなものでしょ？　……ちょっと違うか。
僕が何とか目の前の現実を飲み込もうとしている間にも、冒険者は門へと向かって歩いてくる。段々僕らとの距離が近づくにつれ、見えていなかった顔立ちもよく見えるようになってきた。
まず、それは男性だった。顔立ちはお世辞にもイケメンとは言えないが、ブサイクとも言えない。特徴らしい特徴が無いものだった。
背は遠めなのでしっかりとは分からないが、１７０ｃｍくらいはあるだろうか？　それなりに高そうだが、がっしりしているようには見えない。絵にかいたような中肉中背、そんな感じだった。
「あれ、本当に冒険者？」
正直、強そうには見えない。体つきだけで言えば確実に灯火の方がしっかりしている。あれで本当に戦えるのか、疑問に思ってしまう。
「まあ恰好からしてそうなんだろうな。
それよりも行こう。屋敷から出てきた今なら接触できる」
灯火に言われ、僕らは男の後を追いかける。男は既に屋敷を離れ、ギルドへ向かって歩いているところだった。
向こうが歩いていたおかげで、僕らは直ぐに追いつくことが出来た。
「あの、すいません。ちょっといいですか？」
男の前に立ち、話しかける。目の前に立って改めて男の顔を見ると、確かにピラマの人とは少し違っていた。彫りが浅く、丸っぽい形をしている。目の色も青や赤ではなく、日本人によくある黒だった。
僕が男の顔を観察しているのと同様に、男も僕の顔を観察していた。話しかけた瞬間はめんどくさそうにしていたが、僕らを見るなりじろじろと覗き込むように僕らの顔を見る男。
「……もしかして、お前ら日本人か？」
男の第一声がそれだった。『流れ人』ではなく『日本人』と言ったと

いうことは、この人は僕らの同郷で間違いないだろう。
「はい。貴方もですよね？」
僕がそう聞くが、男は僕の声が聞こえていなかったのか、一人でテンションを上げて僕の手を掴んで来た。
「おおお!?　やっぱりそうか！　やべー初めて見た！　俺以外にもいたんだ～はぇ～」
「あの……？」
いきなり手を握ってきたので少しびっくりした。やんわりと手を離すように言うと、男はハッとした後で申し訳なさそうに僕の手を離す。
「いや～ごめんごめん。こっちで日本人に会うの初めてだったから感動しちゃって」
笑顔で僕の手を離し、形だけの謝罪をする男。
「俺は星嶋玲（ほしじまれい）。二人とも、この街の評判聞いて来てくれたん？」
「浦沢陽向です。僕らは王都に行く旅の途中で立ち寄ったんです」
「明村灯火だ」
玲さんの自己紹介に続く形で、僕らも名前を名乗る。
「王都？　何でそんなところに」
「地球に帰る方法を探す為です」
僕がそう言うと、玲さんは目を丸くして驚いた。
「は？　お前らマジで言ってんの？　あんなところよりもここの方がよっぽど楽しいじゃん。
見ろよこの街を！」
そう言いながら、玲さんは手を前に向けてどや顔をして見せる。
「フィクションの中にしかないと思っていた異世界が、本当に目の前にあるんだぞ!?　魔法に剣に冒険、こんなに楽しい世界なのになんで地球になんて帰ろうとするんだ？」
玲さんは心底信じられないと言った表情で僕らの方を見る。僕にはむしろ玲さんの考えの方が信じられないけど。
「家族や友人に会いたくないんですか？」
「そんなクソみたいなものよりもこの世界の方がよっぽど楽しくね

？」
まるで僕の考えの方がおかしいと言わんばかりに即答する玲さん。ムキになって更に言い返そうとしたところで、灯火に脇腹を小突かれた。
「陽向、そろそろ」
「……あ、ごめん。ちょっとムキになってた」
危うく話し合いどころではなくなりそうになっていたところに、灯火の待ったが入ってくれたおかげで何とか平静を取り戻すことができた。
一度深呼吸をし、僕らは玲さんに今日ここに来た目的を話した。
「玲さん、僕らは今日玲さんにお願いがあって来ました」
「お願い？　今さっき会ったばかりの俺に？」
不思議そうな顔をする玲さんに、僕は更に言葉を続ける。
「今行っている市場への肉類や酒類の流通、それをくれませんか止めてくれませんか？」
「は？　何でだよ」
眉を顰めて聞き返す玲さん。明らかに、僕の言葉に不快感を示している。
「肉類や酒類は、この世界では高級品に分類されています。それを無理に市場に流通させようとすれば、苦しむのはこの街に住む人たちなんです。
だから、今すぐに止めてはくれませんか？」
僕の話を聞いた玲さんは、
「どうでもよくね？　この街に住んでる人とか」
そう言って、僕の話を鼻で笑い飛ばした。

第二章第17話　【白黒つけてやるから】

「……はい？」
一瞬、玲さんが何を言ったのか全く理解できなかった。どうでもいい？　今どうでもいいって言ったのか？
驚いて言葉を失っている僕を他所に、もう話は終わったと思ったのか玲さんが僕らを避けてギルドへと向かおうと一歩踏み出す。
「おい、ちょっと待てよ」
そんな玲さんの腕を、灯火が掴む。
「あ？」
「あ？　じゃねえよ。お前自分がやってることと、今自分で言った言葉の意味分かってんのか？」
灯火の言葉に、玲さんは苛つきを隠すこともなく答える。
「お前らこそバカじゃねえのか？　俺のおかげで、この街はこんなにも賑わってるんだぞ？
異世界なのに肉も酒も無くて、宿のベッドは藁が痛くて寝た気がしない。そんなクソみたいな話があると思うか？
他の冒険者だって、この街の様相に満足してる。それの何がいけないってんだよ」
「俺たちが言ってるのは『この街の人』の話だ。お前のエゴを押し付ける為の金は誰が出してると思ってんだよ」
「んなもん、金持ちどもが出せばいいだけの話じゃねえか。どうせ金持ってるんだし、自分らの欲を満たすために使ってるんなら少しは俺らに還元しろってんだよ」
灯火と玲さんの言い合い、議論は平行線のままだ。というより、話がかみ合っていないように感じる。
「玲さんはそもそも、この街に貴族がどれくらいいると思っているんですか？」
「んなもん、俺が知る必要ないだろ。クソみたいなしがらみから解放されて、漸く自由に生きられるんだ。
俺は俺のやりたいことだけやって、この異世界生活を満喫するんだ

よ。お前らも同じ日本人なら分からねえか？」
「分からねえな、そんな自分本位な考え方。てめえの自由の為に多くの犠牲があるって、考えたことねえのか？」
　玲さんの言葉に突っかかるように、灯火が一歩前に出て言い返す。その瞳は鋭く玲さんを捉え、一触即発の状態だった。
「何も知らねえガキがいい気になってんじゃねえよ」
　玲さんが灯火の胸倉を掴もうと右手を前に出すが、灯火がその腕を掴み止める。
　このままだと本当に暴力沙汰に発展しかねないと思った僕は、慌てて二人の間に割って入り互いの手を解く。
「とにかく、さっきの僕らの話を一度考えてみてくれませんか？　この街に住む人がどれだけ苦しんでいるのかを。お願いします」
「チッ、知るか。二度と関わんじゃねえ」
　吐き捨てるように言った玲さんは、それ以降僕らの方を見ることもなくギルドの方へと歩いて行った。
　交渉は失敗に終わった。あの様子だと話を聞いてくれることもないだろう。
　これからどうしようか、そんなことを思いながら灯火の方を見ると、僕の視線に気づいたのか灯火も顔を僕の方へと向けた。僕は不安な気持ちを抑え、ぎこちなく口角を上げながら
「どうしようね」
　と困ったように笑いながら言った。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

　星嶋玲との交渉が決裂した日の夜、陽向が寝たのを見計らって俺は

ゼストスを出てすぐのところにある開けた草原へとやってきた。
何故こんなコソコソした真似をしているのか、それは陽向に今からやろうとしていることがばれたくなかったからだ。あいつがいると『もっと穏便にやろうよ』とか生易しいことを言うに決まってるからな。
「この俺を待たせるとは、ガキのくせにいい度胸してるな」
俺が目的の場所に辿り着くと、そこには先客がいた。俺が呼びつけたんだから当たり前と言えば当たり前だが、本当に来たことに内心で少しだけ驚いた。
「お前こそ、逃げずに来たんだな。そんなに俺に負けたのが悔しかったか？」
たっぷりの余裕を見せつけながら、目の前で青筋を浮かべ俺を睨む先客――星嶋玲を挑発する。案の定星嶋玲は俺の安い挑発に乗り、先ほどよりも声を張り上げて怒鳴りつけて来た。
「てめえの相方が割って入ってきたんだろうが。何勝手に勝ったことにしてんだ！　ああ!?」
向こうが俺の方へと歩み寄り、昼間のように俺の胸倉を掴みに来る。でも今回はその腕を掴むようなことはせず、わざと星嶋玲に掴ませる。
「おい、昼間の話覚えてるか？」
相手を馬鹿にするように顎を上げ、こっちが不利な状況にあるにもかかわらず余裕たっぷりに構えながら星嶋玲に聞く。
「昼間？」
「うちの相方が言ってた話だよ。『肉と酒の流通を止めろ』ってやつ。あれさ、お前ボコボコにしたら言うこと聞いてくれるか？」
「……んだと？」
星嶋玲が俺を掴み上げたまま、眉を顰めて聞き返してくる。こいつ、さてはキレ慣れてねえな？
「だからさ」
俺はだらりと下げていた腕に力を込め、星嶋玲の胸倉を一瞬で掴み取る。そして力任せに引っ張り、俺と星嶋玲の顔の距離を一気に鼻先

まで引き寄せた。
星嶋玲は突然のことに動揺したのか、怒りから驚きへと表情を変える。
「昼間の話、俺がお前をボコボコにしたら言うこと聞けって言ってんだよ。俺らより年上のくせに脳みそ足りてねえのか？」
そうやって煽り、持っている腕を今度は前へと押し出す。その拍子に俺の胸倉を掴んでいた星嶋玲の腕は解け、向こうは二、三歩よろめくとバランスを崩して地面に尻餅をついてしまった。
不格好な姿勢で地面に座り込む星嶋玲。漸く自分の状況を理解したのか、顔を真っ赤にして立ち上がると肩を震わせて俺を睨みつける。
「てめぇ、いい加減にしろよ！」
腰に携えた剣を抜き、俺に向けて構える星嶋玲。目には怒りと共に確かな殺意が込められ、俺を殺すことに何の躊躇いも無いことが見て取れる。
いいね、それくらいキレてもらわなきゃ負けた時の反動が小さくなっちまう。俺は陽向みたいに口での交渉とかまどろっこしいことは出来ないし、陽向と違って温厚でもない。話が通じ無さそうな相手なら、殴って聞かせりゃいいだけの話だろ。
「来いよ雑魚。その下らねえプライド、お前の抱いた幻想と一緒にへし折ってやるよ」
そう言って俺は拳を構える。向こうは一瞬目を丸くしたが、俺が剣を抜かないことすら挑発だと思ったのか更に顔を憤怒に染め、俺へと襲い掛かってきた。
「馬鹿にしてんじゃねえぞコラァ!!」
両手で握った剣を腰下に構え、低い姿勢で走ってくる星嶋玲。俺はその場にどっしりと構え、向こうが近づいてくるのを待った。
俺が間合いに入るや否や、右下から斬り上げるように剣を振ってくる。その剣筋は、思っていたよりもしっかりとしたものだった。伊達に三年以上この世界で生きてきたわけではないらしい。
それでも避けられない程ではない。何ならダインさんは、この何倍

も速い剣を振るう。この程度の剣筋、冒険者なら出来て当然だろう。
俺の胴体を狙って振るわれた剣を左にずれることで回避する。そして剣を振り上げたことでがら空きになった右わき腹に、挨拶代わりに右のストレートを一発ぶち込んでやった。
「ぐうっ!?」
星嶋玲が衝撃でよろめく。殴ったことでより確信できたが、やっぱりこいつは弱い。冒険者としても人間としても、どうしてこの世界で三年も生きていられたのか不思議なくらいには弱い。
苦痛に歪む顔面に向けて左のジャブを一発、更に空いた胴体に右足でミドルキックをお見舞いしてやる。その衝撃で、星嶋玲は３０ｃｍほど吹っ飛んでいった。
「お前よくそんなんで三年も生きてこれたな。今日まで守ってくれた仲間でもいたのか？」
これは先程までの煽りとは違い、本心からの疑問だった。今の交戦で分かったが、こいつの攻撃には二の手が無い。一撃目が当たると思って振っているせいか、避けた後が隙だらけになっていた。戦い方があまりにも杜撰すぎる。ここまで来ると、流石に仲間がいるとしか思えない程だった。
「……また俺を、馬鹿にしたな。ガキのくせにいいいいいいいい!!」
剣を杖替わりにして立ち上がる星嶋玲。馬鹿にしたつもりは無かったが、向こうはそう受け取ったらしい。正直どっちでもいいけど。
「もういい。お前ごときには使わないでおこうと思っていたが、ここまで馬鹿にされたら俺だって我慢の限界だ！」
そう言うと、星嶋玲は剣を投げ捨てた。敵前逃亡か？　と思ったが、俺の考えは直ぐに否定された。
星嶋玲が、何かを溜め込んでいるような動作を見せる。もしやと思って目にマナを通して見てみると、空気中のマナが星嶋玲の元へと集まっているのが見えた。
マナはどんどんと星嶋玲の元へと集まり、その色を紫から赤へと変えていく。

「見せてやるよ、俺の”スキル”を!!」
星嶋玲は俺に右の掌を向ける。それを中心に、赤い魔法陣が空中に描かれた。
「あの世で後悔しな、俺に喧嘩を売ったことをな!!」

第二章第１８話　【スキル】

これは、マズい。
星嶋玲の元に集まるマナの量から、俺は即座にそう判断した。
星嶋玲はこの辺りにある全てのマナを喰いつくし、自分の魔法を発動させるための糧にした。あんな量、普通に魔法を使う分には絶対に必要にならないはずだ。
「吹き飛べ……【インフェルノストーム】!!」
星嶋玲が技名を叫ぶと同時に、魔法陣から獄炎がとぐろを巻いて飛び出してくる。
「ぐ……うおおおぉぉぉ!!」
マナの集め方的にあれを喰らったらヤバいと理解した俺は、魔法が発動した直後に左に向かってダッシュした。後ろを振り返るような余裕はなく、ただひたすらに走った。俺の背中に、熱が感じられる。恐らく今まさに俺の後ろを通り過ぎたんだろう。
危機を脱したと思った俺は、星嶋玲が放った魔法がどんなものだったのかを見る為に後ろを振り返る。

それはまるで炎で出来た龍であり、また一種の厄災であった。
獄炎は意思があるかのように地面を喰い、俺が先ほどまでいた場所を奔り過ぎる。炎は前へと進むごとにその勢いを、大きさを増し、燃え尽きる直前には一つの竜巻のようになっていた。
炎が通り過ぎた場所は赤く灼け、ドロドロに融解している部分もあった。その光景が、さっきの魔法がどれだけの威力を秘めていたかを物語る。
肩で荒く呼吸をし、ほんの数メートルまで差し迫っていた恐怖を実感する。ちらりと星嶋玲の方を見やると、奴は俺を見下ろすように余裕綽々の態度で立っていた。
「おい、さっきまでの余裕はどうしたよ、ええ？」
「お前こそ、あの一発で終わりか？　もう一発撃ってみろよ、ほら」

顎に伝う汗を手で拭い、星嶋玲を睨む。星嶋玲は口惜しそうに俺を見ると、先ほど投げ捨てた剣を拾い上げて再び俺の方へと迫ってきた。

「だと思ったよ」

焦った表情の星嶋玲を見ながら小さく呟く。スキルというものがどんな原理なのかは知らないが、あれは立派な『魔法』だと言うことが今見て分かった。発動にはマナがいるし、マナを染め上げるまでの時間だってかかる。名前が変わったからと言って、その制約からは逃れられないらしい。

つまり、さっきの技は連発出来ない。奴がこの辺りのマナを全て喰い尽くした以上、少なくとも一帯にマナが戻るまでは撃つことは出来ないだろう。

それまでに、決着を付ければいい。

念のため目にマナを通し、周囲の様子を確認しながら星嶋玲を迎え撃つ為に拳を構える。さっきの【インフェルノストーム】レベルの技をホイホイ撃って来られたら流石に打つ手なしだったが、一発芸なら十分に勝機はある。

そんなことを思っていた矢先、

「【身体強化】！」

なんてことを走りながら叫ぶ星嶋玲。周りにマナは無いはずだが、何をする気だ？

「っは!?」

瞬間、星嶋玲の踏み込みの速度が上がった。一瞬にして俺の懐近くまで身を寄せ、先ほどとは比べ物にならないほどの速度で横一線に剣を振るってきた。

いきなりのことで反応が遅れた俺は、ギリギリで後ろに飛んで致命傷を回避する。しかし完全には回避しきれず、切っ先が俺の胸を掠めた。切り口から血が滴る。

「マナは無いはずなのに……」

もう一度辺りを見渡すが、空気中にマナは一切ない。

そう、空気中には――

「そんなんありかよ……」

俺の目は、紫色の光に包まれる星嶋玲を捉えていた。マナは星嶋玲の体内、心臓の辺りから湧き出るように発生し、そのマナが奴の身体を包み込んでいた。どうも奴は体内でマナを作り出せるらしく、それを元手に魔法を発動させたらしい。

こうなると状況は一転して不利になる。奴がどれくらいマナを生成出来るのかによって、あの魔法が連発できるかどうかが変わってくる。もし無尽蔵に出来るのなら俺の勝機はかなり薄いだろう。

星嶋玲は再び剣を構え、俺に向かって突進してくる。分かっていれば避けられない速度ではないが、それでも反撃に出れるほど隙が多いわけでもない。剣技自体のレベルが低いのは幸いだが、その分動きの予測がしにくい。それにさっきの【インフェルノストーム】をどこで撃ってくるか分からない為、攻撃にも出にくい。

「おら、おらおらどうした!! 俺をボコボコにするんだろ? ええ!?」

力任せに剣を振るいながら俺を挑発する星嶋玲。ああくそ、こっちがイライラしてきた……!

「っ、うるせえなぁ!」

迫りくる剣に向かって風魔法をぶっ放す。威力の調整を考えていなかった為、星嶋玲の剣を風圧で吹っ飛ばすのと同時に俺自身も衝撃に耐え切れずに吹き飛ばされてしまう。

俺と星嶋玲の間に、三度距離が出来る。

どうやってあいつをぶん殴ってやろうかと考えた時、ふと先ほど自分でやったことが気になった。

「……魔法が撃てた?」

殆ど無意識でやったことだが、冷静に考えたらおかしなことだ。マナは無いはずなのになんで魔法が発動したんだ?

「切羽詰まってんなぁ。今なら土下座したら許してやるよ」

俺との距離が出来たことで向こうにも余裕が生まれたのか、右の掌

を向け魔法の発動準備をしながら言う星嶋玲。しかし俺の頭は、さっきの風魔法のことでいっぱいだった。
「……仮説としてはあり得ない話じゃないが、いけるか？」
「てめえ何ぶつぶつ喋ってんだ。あぁ!?」
星嶋玲が何か怒鳴っているが、今はどうでもいい。もし俺の考えが合っているなら魔法が撃てたことにも納得できるが、本当に合っているのか？　もし間違っていた場合、俺が今からやろうとしている作戦は完全に頓挫する。
体内の通り道を開け、魔法発動の準備だけ整える。マナさえくればいつでも撃てる状態にして星嶋玲を見据える。今の俺に向こうの挑発に答えられるような余裕は無かった。
「失敗を恐れるな。やらなきゃ失敗したのと同じだ……」
俺の格闘技の師匠がよく言っていた言葉を小さく唱える。一見無鉄砲にも聞こえる言葉だが、俺はこの言葉に何度も救われてきた。
大きく息を吐き、呼吸を整える。向こうも準備が整ったのか、掌に浮かぶ魔法陣が一層紅く光り輝く。
「今度こそ焼け死んじまえ！【インフェルノストーム】!!」
言葉と共に、再び現れる獄炎の龍。俺はそれが見えた瞬間、全速力で右斜め方向に向かって走り出した。
逃げる為ではなく、戦う為のダッシュ。一発目を見た感じ一度撃ったらその位置からはずらせないように感じたからこそのギリギリを攻めたルートを選択する。これで指向性を変えてくることが出来たら俺の負けだ。
ちらりと奴の方を見る。奴は俺の方を口惜しそうに見ながら、先ほどと変わらない体勢で魔法を撃っていた。どうやら方向転換はおろか、途中で魔法を中断することも出来ないらしい。
それを確認した俺は、星嶋玲に向かって走りだす。もし魔法を撃ち終わる前に奴のところに辿り着ければ、その時点で俺の勝ちは確定する。
勝利を確実なものにするためにひたすらに走る。俺が奴の元に辿り着くのが先か、奴が魔法を撃ち終えて迎撃の体制を整えるのが先か

「――調子に乗ってんじゃねぇ！」
先に動いたのは、星嶋玲だった。俺が奴の元に辿り着くよりも先に魔法を撃ち終えた星嶋玲は、自身に【身体強化】を使って俺を迎え撃つ。手にはいつの間に握ったのか、奴の剣がある。勿論避けることは出来るが、それをしたらまた先ほどのようにジリ貧になってしまう。
やるしかない。
覚悟を決め、俺は迫りくる剣を避けることなく出来るだけ星嶋玲に近づく為に走り続ける。奴との距離が近づくにつれ、俺の身に死が迫ってくることを否応にも感じてしまう。恐れるな、逃げるな、大丈夫、絶対にいける……！
目を奴から離さずに走る。まだか、まだ近づかなきゃ駄目なのか!?
たかが数十メートルくらいしか走っていないはずなのに、異様なまでに息が切れる。焦りが、恐怖が俺の息を荒くしているのが自分でもよく分かった。
「頼む、頼む……！」
俺と星嶋玲の距離が片腕一本にまで縮まった。それと同時に、奴の剣も俺の首元数センチのところまで迫っていた。

そして、奴の身体から俺の身体へとマナが流れ込んでくる様が見えた。
「っ――うおおおおおおお!!!」
流れ込んできたマナを即座に変換、左腕に集めて放出する。
俺の身体は風圧に押される形で右へと一瞬で飛んだ。今回は予め準備していたこともあり、威力を調整して俺の身体だけが飛ぶように

出来た。
そして続けざまに体内に残ったマナを右手に移動、再び俺の身体は宙を飛んだ。
滑るように二度空中を移動し一瞬で星嶋玲の背後へと回りこむことに成功した俺は、渾身の右を奴の背中目掛けて放つ。
一瞬遅れて俺が背後にいることに気づいた星嶋玲が振り向く。向こうの身体の向きが変わったことで、俺のパンチは奴の左わき腹へと突き刺さった。
「うぐっ！」
苦悶の表情を浮かべる星嶋玲。続けざまに右のローキックで奴の足を崩す。バランスを崩して地面に倒れこむ奴の顔面目掛けて、左の拳を叩きこんだ。
ベキッ、と骨の折れる音が俺の耳に届く。
「……」
今の一撃で気を失ったらしく、星嶋玲は白目を剥いて伸びてしまった。鼻の骨が折れてしまったのか、先の方が潰れている。
「いっつ！」
地面に倒れる星嶋玲の姿を見ながら呼吸を整えていると、いきなり首筋に沁みるような痛みを感じた。その場所を手で触れてみると、また痛みが。触れた手を確認すると血がついていた。どうやらさっきの星嶋玲の剣が、俺の首筋を掠めていたらしい。
「マジで、危なかったな……」
軽い気持ちで売った喧嘩ではあったが、予想外に苦戦したこと、そして何とか生き残れたことに胸を撫でおろす。改めて振り返っても、かなり危険な橋を渡っていたと思う。
「……あとは、こいつに要求を飲ませるだけだな」
星嶋玲を近くの木に吊し上げ、俺はこいつが目を覚ますのを待った。

第二章第１９話　【まるでゲームだな】

「……い、おい何だこれ！　どうなってんだよ！　おい!!」
　誰かの怒号が聞こえ、俺は閉じていた目に力を込める。星嶋が目を覚ますのを待っているうちにいつの間にか俺も眠っていたらしく、空には太陽が顔を出し始めていた。
　そしてやはりと言うか何と言うか、怒号の主は俺が寝る前に気に吊るしておいた星嶋によるものだった。
「今起きるから待って」
　大きなあくびと大きな伸びをし、改めて吊るされた星嶋を見上げる。
「てめぇ、俺にこんなことしてどうなるか分かってんのか！」
「ふあぁ～……お前さ、その恰好で言われても全く迫力ないぞ」
　星嶋は今、両手を縛られた状態で木に吊るされている。インフェルノストームとやらが飛んでくる心配はないし、もしあったとしても今は周りのマナも回復している為、撃たれる前に叩き潰すことが出来る。
「あのさ、お前とやりあう前にした話覚えてる？」
「……肉と酒の流通の話か」
　渋い顔で答える星嶋。しらばっくれてくるかと思ったが、意外にもそこら辺はしっかりしているらしい。
「分かってるなら話が早いな。じゃあ早速魔導契約書にサインしてくれ」
　魔導契約書とはその名の通り、この世界における契約書のことだ。地球では法によってその効力を保証されている書類だが、この世界では『魔法』によってその効力を持つことが出来る。
　魔導契約書に契約の内容、双方の名前、血判を記すことで魔法が発動する仕組みになっていて、それを破ることがあれば互いが認めた内容の罰が下ることになる。言ってしまえば裁判という手順を踏まずに相手に罰則を与えることが出来るということだ。
　まあ今回俺が星嶋に結ばせようとしている時点で『契約』ではなく

『誓約』になってくるわけだが、この世界にはそういった細かいニュアンスの違いは無いらしい。
「ふん。誰がサインするなんて言った？」
しかし星嶋は威厳もクソも無い格好でいるにも関わらず、横柄な態度を崩さずに俺の要求を拒否してきた。
「……は？」
「顔面殴り飛ばしておいて鼻まで折って、挙句の果てにこんな辱めまで受けさせやがって。そんな奴の要求を飲むわけないだろ」
正直この状況でまだこんな態度が取れることには驚きを通り越して呆れてしまう。普段だったらこのまま放置して帰るところだが、それじゃあ陽向の目的が達成できない。
……まあ、しゃーないか。
「……おい、お前何やってる？」
星嶋の足元に枯れ木を集めていると、星嶋が上から話しかけてきた。
「何って、焚火の準備」
そう言いながら適当に木の枝を集め、星嶋の履いている靴を脱がせる。
「おい、何のつもりだ！」
暴れる星嶋の足を無理矢理押さえつけ、靴下も脱がせて素足にさせる。
「靴履いてたらせっかくの熱さも軽減されちまうだろ。だから脱がせたんだよ」
火力を調整し、暴発しないように注意しながら薪に火をつける。薪に灯った小さな火は徐々に火力を増し、パチパチと音を立てて火が上へと昇っていく。
「――熱っ！　おい、お前何してくれてんだ！」
「出来れば俺だってこんなことしたくなかったけどさ、お前がサインしないって言うんだから仕方ないだろ」
火が直接星嶋の足に当たることは無いが、それでも熱は星嶋に伝わっている。全身をばたつかせながら、どうにか火元から逃げようと

していた。
「熱っ！　おい、おいやめろ！　俺のＨＰはもう殆ど残ってねぇんだよ！　このままじゃ死んじまう！」
「足裏火傷くらいはするだろうけど、この程度で死にはしないだろ」
寝る前に取ってきた大きめの薪を火の中に投げ入れる。焚火は薪を食い、より強い火力で星嶋の足を焼く。
「おい、本当に勘弁してくれ！　もうＨＰが一割くらいしか残ってないんだよ。頼むって！」
「ＨＰって……ゲームじゃねえんだから」
「お前だって日本から来たなら分かるだろ！　変な芝居は良いから早く助けてくれ!!」
星嶋の発言に俺は呆れるが、当の星嶋は冗談なんて言っている素振りもなく必死に俺に懇願している。まさか、本当にＨＰなんてものがあると思ってるのかこいつは？
「……なら、サインするか？」
「する、するから早く！」
さっきまでの横柄な態度はどこへやら、泣きわめきながらあっさりとサインを了承する星嶋。なんなんだ本当に。
「言質は取ったからな」
そう言って、俺は焚火に水魔法をぶっかける。火はあっという間に鎮火し、薪はプスプスと音を立てて煙を上げた。
その煙を吸い込んだ星嶋が苦しそうに咳き込むが、そこまでは俺の知ったことじゃない。

「……おい、なんで降ろさないんだ？」
火を消し、契約書にサインすることを了承した星嶋。しかし俺は星嶋を木から降ろすことはせず、そのまま吊るしたままにしている。
「幾つか聞きたいことが出来たから、お前降ろすのはそれ聞いてからにするわ」

「は？　お前これ以上――」
「ＨＰ、ギリギリなんだっけ？　答えてくれたらポーションくれてやるよ」
「何が聞きたいんだ？」
　綺麗なまでの掌返し。そんなにＨＰが大事なのか？
「まず、お前がさっきから言ってるＨＰって何だ？」
　勿論ＨＰと言う概念を知らないわけじゃない。ゲームなんかではよく出てくる数値だし、それが０になれば死ぬってことくらいは普通に知ってる。
　俺が疑問なのは、この世界はゲームではなく紛れもない現実だ、という点にある。当たり前に腹は減るし眠気だってやってくる。動けば疲れるし、怪我をすれば痛い。当然、大きい傷を負って出血量が多くなったり急所をやられれば死ぬ。
　にも関わらず、星嶋はこの世界にＨＰという概念があると本気で思っているらしく、さっきから必死にそれを守ろうとしている。俺にはそれがまるで理解できなかった。
　俺の疑問に対して、星嶋は信じられないといった表情で答える。
「お前、本気で言ってるのか？　ＨＰだぞ、視界の左端の方にあるだろ。ＭＰと一緒に」
　言われて、視線を左上に動かす。しかしそこにあるのは新緑に彩られた木の葉と朝焼け空だけで、ＨＰやＭＰなんてものは一切存在していない。
「無いけど」
「……は？」
　星嶋が訝しげな顔をする。そんな顔をしたいのは俺の方なんだが。
「そのＨＰとかＭＰって、ＲＰＧとかによくあるあの数値って認識でいいのか？」
「ああ。ＨＰはそのまま『命の数値』を表していて、０になったら死ぬ。ＭＰはスキルを撃つために必要なポイントで、撃てばその分減っていく」
「まんまゲームみたいだな……」

現実のはずのこの世界が、急に陳腐なものに見えてきてしまう。思い返せば、タラハットで出会った商人のオズウェルさんも流れ人はスキルを使う、みたいなことを言っていたような気がする。
「後は何が聞きたいんだ？」
早く降ろせと言いたげに星嶋が俺を睨む。この際だ、気になることは全部聞いておくことにしよう。
「お前はこの世界についてどれだけ知ってる？」
「この世界のこと？　悪いけど俺はこの世界の名前すら知らないから、地球よりいい世界ってことくらいしか知らないぞ」
微妙に会話がずれているような気がするが、まあいいか。次だ。
「ならお前、この世界のシステムについて何かほかに知っていることは無いか？　どんな些細なことでも、当たり前のことでもいい」
「当り前のこと……ああ、レベルとかステータスとか？」
数秒考えこんだ星嶋の口から出てきた言葉は、俺の中でも何となく予想がついていた単語だった。ＨＰやＭＰがあるからもしやとは思っていたが、本当にあると言われるとにわかには信じがたい。
「……やっぱりあるんだな。どんなシステムだ？」
「ゲームのまんまだな。ＳＴＲとかＩＮＴとか、そういうやつ。魔物を倒せば経験値が貰えるし、経験値が手に入ればレベルが上がる。そしてレベルが上がれば――」
「ステータスが上がる、と……」
これでも半年近くこのピラマで生活してきたが、そんなＲＰＧじみた要素は初めて聞いた。ダインさんが隠していた、とは考えにくいし、となると俺たち流れ人にしか適応されていないのか？　だとすると、俺たち流れ人は幾ら身体を鍛えたり技を磨いても、そのステータスが上がらないと何の意味も無いと言うことだろうか。
……いや、それはあり得ない。実際俺はダインさんとの特訓で格段に強くなったし、魔物を倒さなくても実力は確実に身についていた。
なら、ステータスってのは一体何だ？　何のためにそんなものが存在していて、しかも流れ人にしか適応されないんだ？
「……おい、そろそろ降ろせよ」

暫く考えていると、頭上から恨みの籠った声が降ってきた。ああ、そう言えば降ろすのを忘れていた。
「ああ、もういいか。じゃあ今から縄を切って降ろすから、上手く着地しろよ」
腰の剣を抜き、風属性に染色したマナを通す。今から木登りして縄を切ったら逃げられるかもしれないし、そもそも縄くらいなら風の刃で十分断ち切れる。
そう思って剣を振り被ると、星嶋は慌てて首を左右に振った。
「おいバカお前何考えてんだ！　そんなことしたら俺のＨＰが無くなるだろ！」
「当てねーよ、そんな心配すんな」
「そういう問題じゃ――あああああああああああ!!!」
このまま喚き散らされても五月蠅いだけなので、さっさと風の刃で木に繋がっている縄を切り飛ばす。
叫びながら落ちてくる星嶋を、お姫様抱っこの要領でキャッチ。そのまま丁寧に地面に降ろしてやる。
「んじゃあ契約書にサインしてくれ。ポーションはそれからだ」
腕の縄を解き、眼前に契約書を突きつける。勿論逃げる素振りや抵抗の意を少しでも見せればすぐに対処するように構えながら。
「……分かってるよ、クソっ」
ふんだくるように俺から契約書を取ると、さっきまで自分が吊るされていた木の幹を机代わりにしてサインする星嶋。
「おい、血判するからポーション寄越せ」
俺に向かってずいと手を伸ばし、ポーションを要求する星嶋。さっきＨＰが一割も無いとか言っていたし、こいつからしたら血判程度の傷でも死ぬ可能性があると思っているんだろう。
「はいはい。その代わり逃げるような素振り見せたら」
「分かってるよ、早く寄越せ」
態度に思うところは無くは無いが、ここで俺がごねても意味が無いと分かっているのでポーションを手渡す。
星嶋はそれを一気に飲み干すと、右手に持ったナイフで左親指の腹

を軽く切った。
「痛っ」
一瞬、星嶋の顔が苦痛に歪む。が直ぐに元の表情に戻り、血判を押した契約書を俺に手渡してきた。
「ほら、これで満足か」
契約書には確かに、星嶋のフルネームと血判が刻まれている。
「……じゃあこれで、お前は二度とこの街に入ることはおろか、近寄ることも許されない。
それと、今回のような自分勝手な行いをすることも許されない。もしそれらを侵そうとした場合、それなりの罰が下ると思えよ」
「へいへい。
ったく、折角楽しい世界にこれたと思ったのにたった二年くらいでこれかよ……」
不貞腐れる星嶋を放って、俺はゼストスへと戻る為に歩き出す。
と、途中で星嶋に言い忘れていたことがあったので振り返る。
「おい星嶋」
「あ？」
「今日一日は、まだ街に入れるからそれまでに荷物纏めとけ」
「ちっ」
小さく舌打ちした星嶋は、街へと戻ることはせずそのまま反対方向へと歩いて行ってしまった。
「さて、俺も陽向に報告するか」